

首都圏中央連絡自動車道 埋蔵文化財調査報告書42

— 芝山町境砦跡 —

令和5年3月

東日本高速道路株式会社
公益財団法人 千葉県教育振興財団

首都圏中央連絡自動車道 埋蔵文化財調査報告書42

しげやま まかいとりであと
— 芝山町境 砦跡 —



序 文

公益財団法人千葉県教育振興財団(文化財センター)は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび千葉県教育振興財団調査報告第792集として、首都圏中央連絡自動車道建設に伴って実施した山武郡芝山町境砦跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、中世城郭の遺構とともに古墳時代や奈良・平安時代の集落跡が発見されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られています。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

令和5年3月

公益財団法人 千葉県教育振興財団
理 事 長 中 村 敏 行

凡 例

- 1 本書は、東日本高速道路株式会社関東支社による首都圏中央連絡自動車道（大栄～横芝）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県山武郡芝山町境字上郷179-31ほかにか所在する境跡跡（遺跡コード 409-048）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、東日本高速道路株式会社関東支社の委託を受け、公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査および整理作業の実施期間、担当者は、第1章第1節に記載した。
- 5 本書の執筆は、第2章第2第1節及び第3章第1節を主任上席文化財主事 安井健一が、第2章第2第2節を主任上席文化財主事 渡邊修一が、第3章第2節を上席文化財主事 栗田則久が、それ以外及び編集を上席文化財主事 井上哲朗が担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、芝山町教育委員会の御指導、御協力を得た。また、奈良・平安時代の遺物について佐久間豊氏よりご教示いただいた。
- 7 本書では下記の地形図を合成、編集して使用した。
第1図 国土地理院発行 1/25,000地形図「多古」(NI-54-19-10-2)
第2図 芝山町発行 1/2,500地形図 19IX-LF03-4
第5図 八日市場村・多古村 明治16年測量・22年出版 大里村・芝山村（明治17年測量・20年出版）1/20,000地形図
- 8 図版1の航空写真は、国土地理院空中写真 CKT20011X-C3-17（平成13年10月撮影）を使用した。
- 9 本書で使用した座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標（国家標準直角座標第IX系）で、図面の方位は全て座標北である。
- 10 遺構図の縮尺は原則1/80としているが、必要に応じて拡大、縮小を行っている。遺物実測図の縮尺は縄文土器は1/3、石器は2/3・1/2、古墳時代以降土器・陶磁器は1/4、石製品は1/3・1/4、金属製品は1/1・1/2などで、それ以外も含め、その都度スケールを示した。
- 11 表の（ ）は推定値、[] 現存値である。
- 12 図版中には本文の挿図にないものもある。
- 13 遺物に付した番号は、遺構ごとの通し番号で、図・写真図版に共通して使用した。
- 14 遺構図および遺物実測図の凡例は下記のとおりで、これ以外は各図に示した。

遺構

 焼土

● 土器 ■ 土製品 ▲ 石製品 ★ 金属製品

遺物

 赤彩  油煙

 黒色処理（炭素吸着）

本文目次

序文

凡例

第1章	はじめに	1
第1節	調査の概要	1
1	調査の経緯と経過	1
2	調査の方法	4
第2節	遺跡の位置と環境	4
1	地理的環境	4
2	歴史的環境	4
第3節	城郭構造（地形測量調査の成果）	6
第2章	遺構と遺物	12
第1節	確認調査	12
第2節	縄文時代	20
1	遺構外出土土器・土製品	20
2	遺構外出土石器	24
第3節	古墳時代末から奈良・平安時代	29
1	竪穴住居跡	29
2	土坑等	49
3	粘土採掘跡	51
4	遺構外出土遺物	54
第4節	中・近世	56
1	地山整形区画	56
2	土坑等	56
3	溝・堀・帯曲輪等	59
4	遺構外出土遺物	67
第3章	まとめ	78
第1節	縄文時代	78
第2節	古墳時代末～奈良・平安時代	78
第3節	中・近世	81
報告書抄録		巻末

挿図目次

第1図	遺跡の位置と周辺の地形	2	第31図	SI013・SI014(2)	41
第2図	周辺の地形と調査範囲	3	第32図	SI015(2)	42
第3図	グリッド分割図	4	第33図	SI016・SI017	43
第4図	調査全体図	9	第34図	SI018	44
第5図	周辺の地形(明治期)	10	第35図	SI019	45
第6図	地形測量図	11	第36図	SI020	46
第7図	基本順序(274DS-00グリッド)	12	第37図	SI021	47
第8図	確認調査トレンチ・グリッド配置図	13	第38図	SI022・SI023	48
第9図	上層確認調査トレンチ土層断面図(1)	14	第39図	SI024	49
第10図	上層確認調査トレンチ土層断面図(2)	15	第40図	SK001・SK003	50
第11図	上層確認調査トレンチ土層断面図(3)	16	第41図	SK005・SK010	52
第12図	上層遺構全体図	17	第42図	SK011・SK015・SK032・SK035	53
第13図	縄文土器(1)	22	第43図	SX005	54
第14図	縄文土器(2)・土製品	23	第44図	SX006	55
第15図	縄文時代石器(1)	25	第45図	遺構外出土遺物	55
第16図	縄文時代石器(2)	26	第46図	SX003・SX004・SK002・SK004・ SK012・SK014・SK016・SK019	57
第17図	縄文時代石器(3)	27	第47図	SK017・SK018・SK020・SK026・SK027・SK030・ SK033・SK034・SK036・SK038・SK039	58
第18図	SI001(1)	29	第48図	SD001・SD002	61
第19図	SI001(2)・SI002	30	第49図	SD003・SD004	62
第20図	SI003	31	第50図	SD014・SD015	63
第21図	SI004(1)	31	第51図	SD005・SD008	64
第22図	SI004(2)・SI005	32	第52図	SD009・SD013・SX007	65
第23図	SI007(1)	33	第53図	SX007出土遺物	66
第24図	SI007(2)	34	第54図	遺構外出土遺物	67
第25図	SI008	34	第55図	古墳時代末～平安時代 竪穴住居跡出土土器編年図(1)	79
第26図	SI009・SI010	35	第56図	古墳時代末～平安時代 竪穴住居跡出土土器編年図(2)	80
第27図	SI011	36			
第28図	SI012(1)	37			
第29図	SI012(2)	38			
第30図	SI013・SI014・SI015(1)	40			

表目次

第1表	遺構一覧表	18・19	第6表	古墳時代末～平安時代石製品観察表	76
第2表	縄文時代石器計測表(1)・(2)	27・28	第7表	中・近世石製品観察表	76
第3表	銭貨観察表	67	第8表	古墳時代末～平安時代土製品観察表	76
第4表	古墳時代末～平安時代土器観察表	68～74	第9表	古墳時代末～平安時代金属製品観察表	77
第5表	中・近世土器等観察表	75	第10表	中・近世金属製品観察表	77

図版目次

- | | | | |
|------|-----------------|------|------------------------|
| 図版1 | 埤啓跡周辺航空写真 | 図版22 | 地山整形等(3) |
| 図版2 | 遺跡全景(1) | 図版23 | 地山整形等(4) |
| 図版3 | 遺跡全景(2) | 図版24 | 地山整形等(5) |
| 図版4 | 調査前状況(1) | 図版25 | 堀・溝等(1) |
| 図版5 | 調査前状況(2) | 図版26 | 堀・溝等(2) |
| 図版6 | 確認調査状況(1) | 図版27 | 堀・溝等(3) |
| 図版7 | 確認調査状況(2) | 図版28 | 堀・溝等(4) |
| 図版8 | 竪穴住居跡(1) | 図版29 | 縄文土器 |
| 図版9 | 竪穴住居跡(2) | 図版30 | 縄文時代石器 |
| 図版10 | 竪穴住居跡(3) | 図版31 | 竪穴住居跡出土土器(1) |
| 図版11 | 竪穴住居跡(4) | 図版32 | 竪穴住居跡出土土器(2) |
| 図版12 | 竪穴住居跡(5) | 図版33 | 竪穴住居跡出土土器(3) |
| 図版13 | 竪穴住居跡(6) | 図版34 | 竪穴住居跡出土土器(4)・土坑出土土器(1) |
| 図版14 | 竪穴住居跡(7) | 図版35 | 土坑出土土器(2)・溝等出土土器 |
| 図版15 | 竪穴住居跡(8) | 図版36 | 竪穴住居跡等出土土器(1) |
| 図版16 | 竪穴住居跡(9) | 図版37 | 竪穴住居跡等出土土器(2) |
| 図版17 | 竪穴住居跡(10)・土坑(1) | 図版38 | 墨書土器赤外線写真・中・近世土器・陶磁器 |
| 図版18 | 土坑(2) | 図版39 | 土製品・石製品(1) |
| 図版19 | 土坑(3)・調査風景 | 図版40 | 土製品・石製品(2) |
| 図版20 | 地山整形等(1) | 図版41 | 金属製品 |
| 図版21 | 地山整形等(2) | | |

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過（第1・2図）

首都圏中央連絡自動車道（圏央道）は、首都圏の道路交通の円滑化・環境改善・沿線都市間の連絡強化などを目的として、国土交通省関東地方整備局と東日本高速道路株式会社が共同で計画した、都心から半径40kmから60kmの位置の延長約300kmの環状の高規格幹線道路である。千葉県内の区間は平成4年度から事業化され、これまで神崎IC～大栄JCT、東金IC～茂原・長南ICおよび茂原・長南IC～木更津IC間の工事は既に終了・開通し、それに伴う当財団の発掘調査報告書は平成29年までに33冊刊行している¹⁾。

圏央道計画路線のうち、大栄JCTから松尾横芝ICの18.5km区間の建設事業（略称「圏央道（大栄～横芝）」）にあたっては、平成25年度に千葉県道事務所が事業地における埋蔵文化財の所在の有無およびその取扱いについて千葉県教育委員会に照会した。これに対し千葉県教育委員会は、同年3月に埋蔵文化財包蔵地の所在を回答し、取扱いについて関係諸機関で協議を重ねた結果、事業計画の変更が不可能として、やむをえず記録保存の措置を講ずることとなり、調査を公益財団法人千葉県教育振興財団が実施することになった。これに伴う発掘調査報告書は、令和3年度までに7冊刊行している²⁾。

発掘調査委託契約は、平成26年度～29年度が国土交通省関東地方整備局千葉県道事務所、平成30年度からは東日本高速道路株式会社関東支社との間で締結された。

本書で報告する調査・整理作業の期間、担当者等は下記のとおりである。

令和3年度	文化財センター長	福田 誠
	調査第一課長	加納 実
	発掘調査担当者	主任 席文化財主事 井上哲朗・沖松信隆、 席文化財主事 平野雅一
	調査期間	令和3年5月18日～令和4年2月9日
	調査面積	（確認調査）上層356㎡/9,546㎡ 下層92㎡/2,400㎡ （本調査）上層3,033㎡ 下層0㎡
	整理担当者	主任 席文化財主事 倉田義広
	整理期間	令和4年3月1日～15日
	整理内容	遺物水洗
令和4年度	文化財センター長	木原高弘
	調査第一課長	大内千年
	整理担当者	席文化財主事 井上哲朗、主任 席文化財主事 安井健一
	整理期間	令和4年4月1日～令和4年11月31日
	整理内容	注記・接合・実測・挿図・図版・原稿～報告書印刷・刊行



第2図 周辺の地形と調査範囲

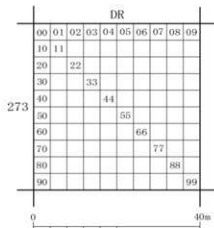
- 事業範囲
- 調査対象範囲

0 (1:2,500) 100m

2 調査の方法（第3・4図、第1表）

中世城郭境畧跡の範囲は、踏査の結果、地表でも城郭関連遺構が主郭部分の外側にも広がる事が確認されたため、発掘調査前の令和2年6月に地形測量を実施した。その結果、山全体に空堀に区画された曲輪や平場が展開していることが確認された。

発掘調査は令和3年度に実施したが、事前に基準杭設置のための基準点測量を委託した。圏央道（大栄～横芝）建設予定地内の発掘調査は、世界測地系（平面直角座標第Ⅸ系）に基づく40m×40mの区画を大グリッドとした方眼網が設定された。成田市大栄JCK付近の起点（1A-00）を $X=-20,920.000\text{m}$ ・ $Y=+50,520.000\text{m}$ に置き、この点から40mごとに南へ1・2・3・・・を、東へA・B・・・Z・AA・AB・・・を割り当て、さらに大グリッド内を一辺4mの正方形区画で100分割して小グリッドを設定し、「273DR-55」のように表記し、調査はこの方眼網を基準に測定し記録した（第3図）。また、標高は、東京湾平均海面（T.P.）からの海拔高である。



第3図 グリッド呼称例

第2節 遺跡の位置と環境

1 地理的環境（第1・2・5図、図版1）

本遺跡は、標高40m前後の台地が西側の高谷川、東側の多古橋川の両側から侵食された内部に位置し、高谷川側に開口した北東-南西方向の長さ約1kmの谷津の奥で、西方台地から南西に200m程突出する標高40m程の丘陵上に存在する。斜面は全体に急であるが、北東側の尾根間が若干緩く、南東-南側は急峻である。南側の山下には大字「境」の集落が存在する。東に接する谷津の水田面との比高は25m前後で、丘陵の北東側と南側にはこの谷津に下る小谷津の斜面が形成されているが、南側の集落のうち東側は小谷津を一部埋め立て、西側は山の斜面を崩して整地した土砂の上に形成されていることが想定できる。

2 歴史的環境（第1・2図）

第1図は、遺跡分布地図³⁾に基づいた。周辺の主な遺跡の位置・範囲と圏央道の計画位置を示したものである。おおよそ地形図の北東側が多古町、西側が芝山町、南部が横芝光町である。本遺跡では主に奈良・平安時代集落跡と中世城館跡の遺構が検出されているので、それと同様な主な遺跡名を青字及び緑字に着色したもので、本項でも主に奈良・平安時代集落と中世城館跡で発掘調査されたものを中心に概観する。

旧石器時代

石器集中地点は、本遺跡の北西500mの千田台遺跡⁴⁾、北方1km前後に位置する多古工業団地造成に伴う各遺跡（林小原子台・栗根・土持台・林中ノ台・吹入台）⁵⁾でまとめて検出されているが、北側に隣接する千田の台遺跡では検出されていない。

縄文時代

近接する境貝塚では、堅穴住居跡の他、中期（阿玉台式～加曾利E）、後期（称名寺式～堀ノ内式）、晩期（安行Ⅲ式、姥山Ⅱ・Ⅲ式、前浦式、千網式、荒海式）の土器が出土している⁶⁾が、千田の台遺跡では遺構は陥穴の他はなく、土器も少量である⁷⁾、多古工業団地関連の調査では、陥穴・炬穴が多く、土器は早

期主体に晩期まで⁸⁾、高谷川低地遺跡では縄文時代後期主体の包含層や丸木舟が出土している⁹⁾。

弥生時代

当地域では分布は少ないが、北西1km程の瓜台遺跡ではまとまった集落が検出されている¹⁰⁾。

古墳時代

多古工業団地の調査では、土持台遺跡で5世紀～7世紀の14軒の堅穴住居跡が検出され、林中ノ台遺跡では後期の堅穴住居跡2軒と円墳2基が検出された¹¹⁾。

古墳は、南東1km前後に殿部田古墳群¹²⁾、北東1.5kmに中ノ台古墳群、北西1.8kmに上吹入古墳群¹³⁾が存在し、多古台遺跡では前・中期堅穴住居跡18軒、古墳25基が調査されている¹⁴⁾。古墳群は、高谷川・多古橋川の谷津を見下ろす台地や丘陵先端部に多く分布する。

奈良・平安時代

現在の香取郡多古町と山武郡芝山町の境界が、概ね古代以降の下総国匝瑳郡と上総国武射郡の境界であることが想定されるが、本遺跡の北側の道路を隔てた千田の台遺跡は多古町であり、地名の「境」はまさに国郡の境界が意識された地名と推測される。

当該地域は、古代末期に「千田郡」、12世紀半ばには「千田庄」が記録にみえる。多古町域中心に八日市場市北部、旧佐原市南部、栗源町・山田町・山武郡北部を含む広大な領域が想定され、多古町千田に政所があったとされている。千田庄司は千葉氏第2代常長の孫常益が務めた。治承4(1180)年、源頼朝挙兵の年、中央の藤原家から判官代として派遣されていた千田親政は、千葉成胤に敗れ(結城野合戦)、以降千田庄の実権は千葉氏の宗家に近い筋に継承される。常胤の次男胤幹が千葉次郎を名乗り、その子胤氏は千田次郎太郎を称す¹⁵⁾。

千田の台遺跡¹⁶⁾や境貝塚・山の台遺跡¹⁷⁾では古墳時代から奈良・平安時代の集落が、北方の吹入台遺跡¹⁸⁾などでは方形周溝状遺構や骨蔵器が多く検出されている。また、南方1kmの折戸遺跡¹⁹⁾でも小規模調査ながら古墳時代から奈良・平安時代の住居跡が検出されている。集落は高谷川・多古橋川に囲まれた台地の内陸に多い傾向があり、谷津の奥の自然湧水に依存した生産基盤が想像できる。また、境貝塚では本遺跡と同様な粘土採掘跡が検出されている。圏央道開通では、ほかに北方3kmの大塚台遺跡で集落や骨蔵器が検出されている²⁰⁾。

中世

鎌倉時代(12世紀末～14世紀前葉)には、千葉氏第7代成胤次男の千葉次郎康胤が千田庄に居領し、第十代頼胤の子宗胤(大隅守)が千田太郎となって、子胤貞に受け継がれる。胤貞の代に鎌倉幕府が減じ、何代か子孫が継承したが、一族の大隅守が西国に移動し、欠所となる²¹⁾。

南北朝時代(14世紀)には千葉一族も分裂し、宗家千葉貞胤は南朝方、九州千葉氏系の千田胤貞は北朝方に属し、千田庄内でも千田胤貞方と千葉方との戦いが行われ、土橋城・大島城・並木城の名が史料に登場する。

15世紀の関東は鎌倉公方足利方と関東管領上杉方の対立に巻き込まれ、上杉禪秀の乱、上総本一揆、永享の乱、結城合戦・嘉吉の乱と、戦国時代に突入する。さらに15世紀半ばには足利方の馬加氏・原氏が上杉方の千葉宗家を攻撃し、宗家は千葉城から多古城・志摩城に逃げるが落城し、千葉宗家が交替し本佐倉城に移る。一方、安房国から上総国には、関東の動乱の中で、外部から里見氏・武田氏・土岐氏等が入り、16世紀には相模から関東へ領国を広げる後北条氏と対立が続き、千葉宗家は北条氏の影響下から配下に入

る。当地域を含めた山武地域は千葉氏の本拠地であり、上総・下総国境地域でもあるため、14世紀から紛争が多く、16世紀には後北条方千葉一族と里見氏方との領土紛争地域となったためであろう。例えば、井田氏は後北条氏家臣として、芝山町田向城～大台城～横芝光町坂田城と、井田氏家臣の山室氏は松尾町山室城～芝山町飯櫃城へと、谷津奥から沖積地を見下ろす地に本拠を移す等の例²³⁾があり、本来の本拠の城館の他、時期や機能で変化する分布密度は高い。16世紀末には豊臣秀吉方が後北条氏本城小田原城を落城させたため、後北条氏に従っていた下総・上総国の在地領主層は、徳川家康領国に組み込まれ、江戸時代に続く。

千田の台遺跡では区画溝や台地整形区画に関連して、15世紀～16世紀の掘立柱建物群や地下式坑群が検出されている。周辺で発掘調査された城館は、横芝光町篠本城跡²⁴⁾、多古町多古城跡²⁴⁾、芝山町飯櫃城跡²⁵⁾、同町田向城跡²⁶⁾、近接地では下吹入城跡²⁷⁾等がある。篠本城跡は城内に屋敷地が集まって生活があり、多古城は当地域の千葉氏の本拠、田向城・飯櫃城は後北条氏の影響下の在地領主本拠地である。非常時以外は山の下で生活し、下吹入城は小規模ながら沖積地を見下ろし、防御施設も境砦より充実しており、坂田城や飯櫃城の支城として機能した可能性が推測される。

南側では、谷津を一部埋め立てて大字「境」の集落が形成されている。屋号等から江戸時代まで遡ると思われるが、一部の区画等は境砦跡が機能した中世後期まで遡る可能性がある。

第3節 城郭構造（地形測量調査の成果）（第6図・図版1～5）

境砦跡は、平成2（1990）年度～平成7（1995）年度の千葉県教育委員会による千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査で発見され、その成果が平成8（1996）年に刊行された²⁸⁾が、詳細な地形図等がなかったため、令和2年度に地形測量を実施した。

西方の台地から南東方向に突出する形の丘陵全体は幅110m、長さ190m、山上の平坦面は幅20m～65m、長さ120mである。斜面の傾斜はそこに空堀・土塁や段差で複数の空間が区画され、便宜上曲輪Ⅰ～Ⅴ、腰曲輪A～Dと仮称する。その他、斜面部にも複数の平場が確認できたが、不明確な部分も多いので記号は付けずに説明する。

曲輪Ⅰは、山の西端部寄りに位置する方形の郭で、規模は28m×35mである。周囲の土塁は北東部で升状に突出し、折れ歪みが形成されている。印旛地域では四辺の各中央に造られる例が多い。周囲の土塁との比高は、南西部と北東部～南東部で2m前後、北西部と南部で1m前後である。南西部は土塁が切れ、外側との比高は1.5m、北西辺でも一部土塁が低く、狭くなり土橋状を呈する。内部の北西側の13m四方前後が周囲より1m前後凹んでいること、南西の土塁の切れ目は虎口に見えるが、外側との比高1.5mで急斜面を呈しており、近代以降の土取り跡と搬出路の可能性も考えられる。郭内が周囲より低く、土塁が低く、周囲の空堀も充実していない「台地堀込型屋敷」で戦国期より古い様相である²⁹⁾。

曲輪Ⅱは、Ⅰ郭の北西の長方形に近い形で、規模は11m×15m、標高はⅠ郭の本来の標高とほぼ同じである。仕切られる土塁との比高は0.7m～1.8mである。北東側の段上（曲輪Ⅲ）より0.5m程低い。南西部に堅堀状の掘り込みがあり、虎口の可能性がある。ここから入って右に折れて土塁の切れ目を通り曲輪Ⅰに入るルートの可能性もある。北西部での突出部の西側斜面中腹に平場があり、防御性を高めている。

曲輪Ⅲは、曲輪Ⅰの北部と曲輪Ⅱの北東部に接し、規模は10m×25mである。北東側の曲輪Ⅳとは、曲輪Ⅰの北東側から南東側を囲む深さ0.5m～0.7mの空堀で仕切られる。なお、溝のように浅いが、通常空

堀は1m～2m程の埋没が想定できる。曲輪Ⅰの北東辺の土塁から連続する曲輪Ⅱ側では平坦で、一部削平された可能性が考えられる。

曲輪Ⅳ・Ⅴは地表面では長さ90mで連続する形であるが、Ⅰ郭の東端隅近くで幅が5mと最も狭くなり、空堀の埋没も想定されたので、一応2つの曲輪として説明する。曲輪Ⅳの規模は5m～17m×35mである。北西部はやや屈曲した空堀で、比高は内側と1m程、外側と0.5m程となる。東側は西側からの空堀が不明確になり、斜面へ落ちるようである。外側に小規模な平場がみられ、北西部と北部に土橋状の段差が確認される。前者は曲輪Ⅲ側と、後者は北方向の尾根筋にあたり、虎口であろう。

曲輪Ⅴは曲輪Ⅰの南東側に位置し、曲輪Ⅳから連続して曲輪Ⅰの北東から南東側を囲む。規模は25m×56mである。曲輪Ⅰ側とは深さ0.4m程の空堀で仕切られるが、後生の攪乱等により曲輪Ⅴ側での明確な堀が見えない。北東側の縁辺には土塁や空堀等は観察できないが、南東部斜面に腰曲輪Dがある。その辺りから南東側にかけては深さ0.3m～0.8mの空堀が巡り、南部では屈曲し、西部の道につながり、帯曲輪か空堀と想定される。

また、各郭の外側と急斜面までの間の空間は、腰曲輪の機能が考えられるので、腰曲輪A～Dとする。腰曲輪Aは、曲輪Ⅳの北西側の急斜面までの4m×28mの狭い空間である。腰曲輪Bは郭Ⅴの南東部で郭Ⅴ外側の空堀から急斜面までの15m×19mの空間、腰曲輪Cは郭Ⅳの東部で空堀の外側から急斜面までの3m×12mの狭い空間、腰曲輪Dは郭Ⅴの南東部で斜面に位置する4m×12mの空間である。

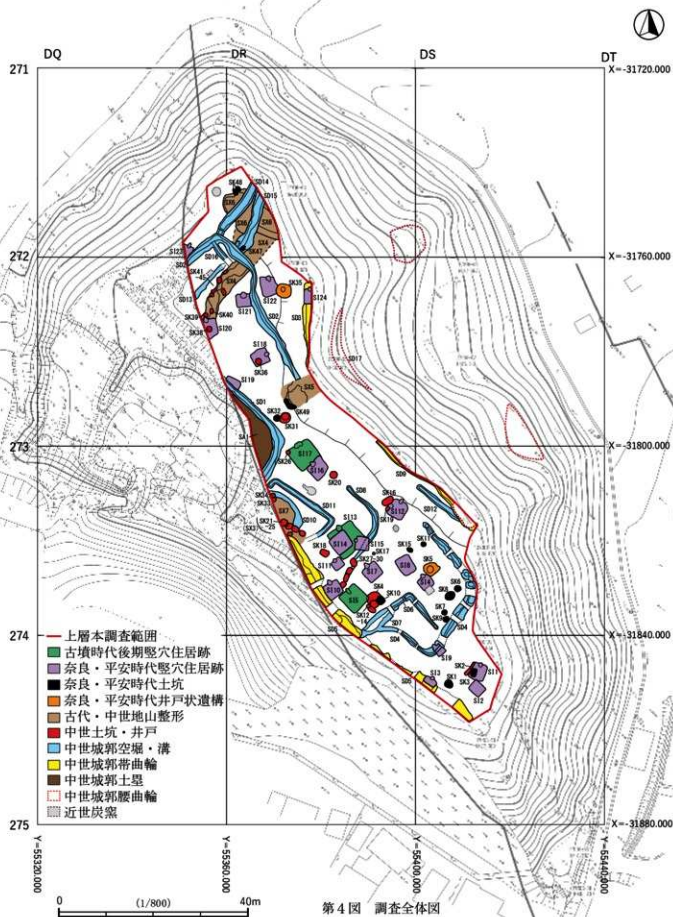
また、斜面中腹以下については、西側の台地から伸びる舌状台地の基部となる位置に切り通し状の小道があり、南北の小谷津を繋ぐと同時に西側の台地と遮断する空堀の可能性が高い。北西から南東にかけての斜面には、尾根筋やその間に平場が観察できた。南西端の民家脇の平場には井戸が確認できたが、形状から近代以降のものとして想定した。

以上、地表面観察から境砦の構造をまとめると、曲輪Ⅰが城主の屋敷のある主郭、曲輪Ⅱが主郭手前の馬出し曲輪的な郭、曲輪Ⅳ・Ⅴが兵馬駐屯地的な機能が想像され、江戸時代の城で例えれば、曲輪Ⅰ＝本丸、曲輪Ⅱ・Ⅲ郭＝二の丸、Ⅳ・Ⅴ郭＝三の丸に相当する構造かと考えられる。また、房総のこれまでの城郭の類例等から、中世前期に在地小領主の屋敷、あるいは合戦等の非常時に籠る空間（曲輪Ⅰ）があったが、戦国期に入り周囲に空堀や腰曲輪・帯曲輪を巡らし、斜面に複数の平場を造成した可能性が考えられる。通常は曲輪Ⅰの周囲を巡るはずの空堀が曲輪Ⅰ北部では土塁から離れ、曲輪Ⅲが配置されるという特異な配置はこの理由であった可能性が想定される。

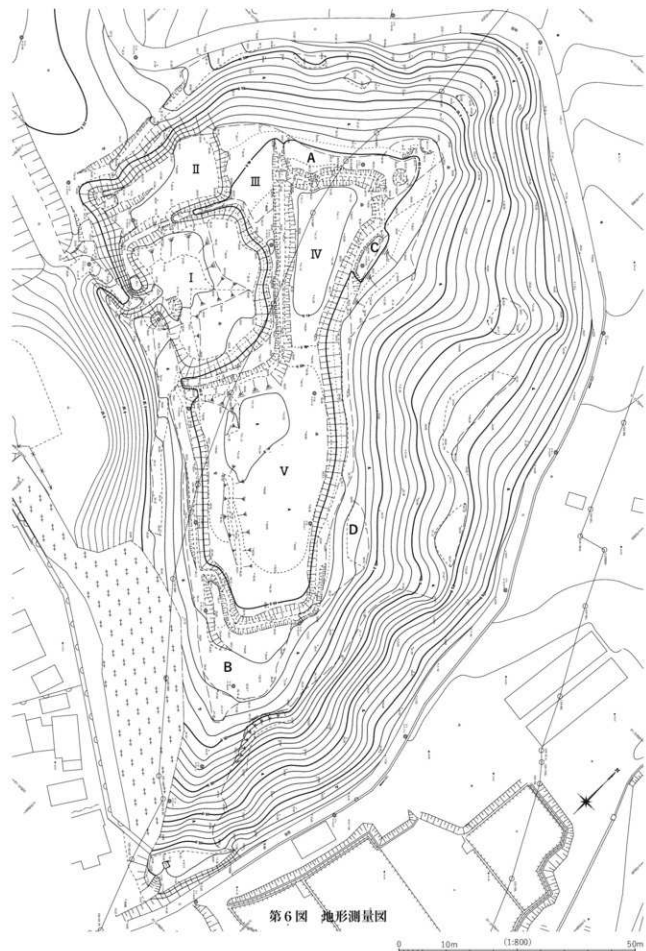
注

- 1 (財)君津都市文化財センター 2004・2005年『首都圏中央連絡自動車道(本津津～東金)埋蔵文化財調査報告書Ⅰ-2』、(公財)千葉県教育振興財団(2012年度(財)～(公財))2004年～2016年『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書』1～33
- 2 (公財)千葉県教育振興財団2019年～2022年『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書』34～40
- 3 (財)千葉県文化財センター 1998年『千葉県埋蔵文化財分布地図(2)～香取・海上・匝瑳・山武地区(改訂版)～』及び千葉県教育委員会HP内「ふさの国文化財ナビゲーション」
- 4 矢本節朗・渡辺高弘 1996年『多古町千田台遺跡-BR/W南側NDB用地(無観施設)埋蔵文化財調査報告書-』(財)千葉県文化財センター
- 5 三浦和信ほか 1986年『多古工業団地内遺跡群発掘調査報告書-林小原子台・果根・土持台・林中ノ台・吹入台-』(財)

- 6 神山崇ほか 1979年「境道路発掘調査報告書-第3・4・5地点-」芝山町教育委員会、神山崇ほか 1980年「境道路発掘調査報告書-第1・Ⅱ地点-」芝山町教育委員会、通澤明ほか 1987年「千葉県多古町境道路発掘調査報告」多古町道路調査会、椎名信也ほか 2008年「境貝塚・山ノ台遺跡・儘田台遺跡・殿部田古墳群 -芝山グリーンヒル造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-」(財)山武都市文化財センター
- 7 萩原恭一・渡邊修一・糸川道行ほか 2021年「首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書37 多古町千田の台遺跡(1)」(公財)千葉県教育振興財団
- 8 注5と同じ
- 9 (公財)千葉県教育振興財団 2019年「千葉県教育振興財団 文化財センター年報 No.44」
- 10 仲村元宏ほか 2005年「瓜台遺跡」(財)山武都市文化財センター
- 11 注5と同じ
- 12 浜名徳永ほか 1980年「上総殿部田古墳・宝馬古墳」芝山はにわ博物館
- 13 大賀健 1987年「下吹入遺跡群 I 東台遺跡 II 近谷津遺跡 III 遠谷津遺跡 発掘調査報告書」下吹入遺跡調査会・芝山町教育委員会
- 14 黒沢哲郎ほか 1992・2002・2003 年「多古台遺跡群I・Ⅱ・Ⅲ」(財)香取郡市文化財センター
- 15 多古町 1985年「多古町史 上巻」ほか
- 16 注7と同じ
- 17 注6の2008年の報告書。
- 18 注13と同じ
- 19 土屋潤一郎 2002年「折戸遺跡(高谷231-2地点)」(財)山武都市文化財センター、椎名信也 2007年「折戸遺跡(203地点)発掘調査報告書-」(財)山武都市文化財センター
- 20 萩原恭一ほか 2021年「首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書38」(公財)千葉県教育振興財団
- 21 注15と同じ
- 22 伊藤一男 1991年「戦国期土豪の所領と軍事力」「房総戦国土豪の終焉」崙書房、井上哲朗 1992年「松尾町山室城跡-急傾斜地崩壊対策事業地内埋蔵文化財調査報告書-」(財)千葉県文化財センター、西山太郎・谷 旬ほか 1995年「芝山町史 通史編 上」芝山町 ほか、佐藤敬一郎ほか 1996年「芝山町史 資料集2 中世編」
- 23 道澤 明 2000年「篠本城跡・城山遺跡」(財)東総文化財センター
- 24 注14じ
- 25 柴田龍司 1987年「千葉県中近世城跡発掘調査報告書 第7集-鎮木城跡・飯櫃城跡発掘調査報告-」千葉県教育委員会
- 26 中野修秀 1994年「田向城跡」(財)山武都市文化財センター
- 27 海保孝則 1997年「上吹入城跡」(財)山武都市文化財センター
- 28 千葉県教育委員会 1996年「千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ-旧上総・安房国地域-」
- 29 藤瀬裕一 2004年「房総の中世集落」「中世東国の世界2 南関東」高志書店



第4図 調査全体図



第6図 地形測量図

第2章 遺構と遺物

第1節 確認調査

1 下層（第7・8図、図版6）

立川ロームの残存しない斜面部を除く約2,400㎡を対象に、2.0m×2.0mのグリッドを設定して92㎡（約4%）の確認調査を実施したが、石器の出土はなかった。

Ⅲ層：ソフトローム層

Ⅳ層：軟質ハードローム層

V層：第1黒色帯

Ⅵ層：AT（始良丹沢火山灰）層

Ⅶ層：第2黒色帯上部

Ⅷ層：第2黒色帯下部

X層：立川ローム最下層

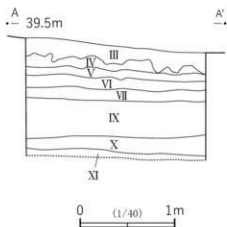
XI層：武蔵野ローム最上層

ソフトローム層上面から武蔵野ローム層上面まで約1.1mであるが、当地点は南端部に近いためやや浅くなる。

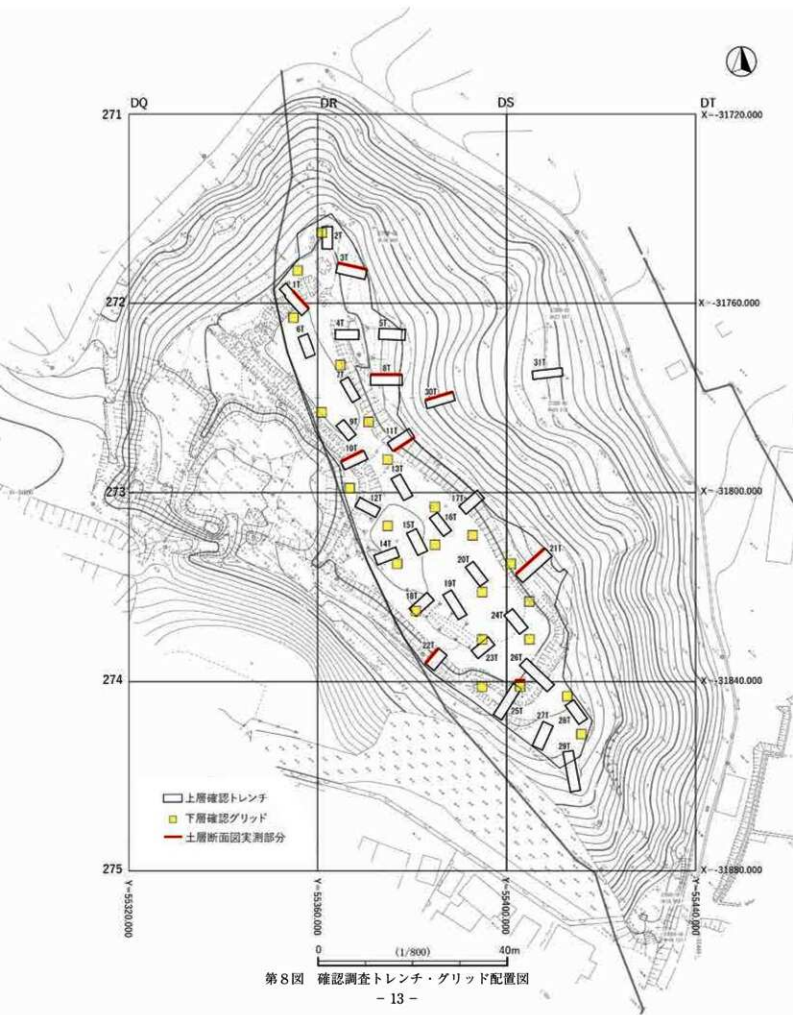
2 上層（第8～第11図、図版6～8）

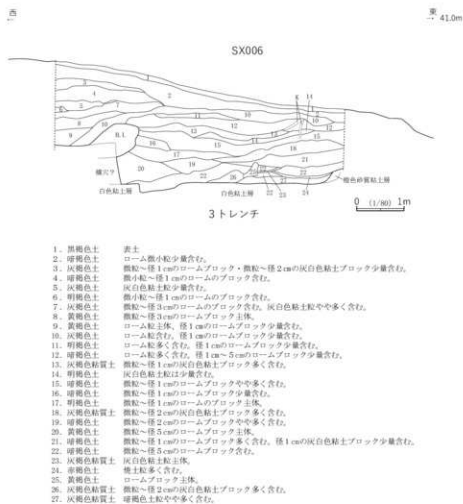
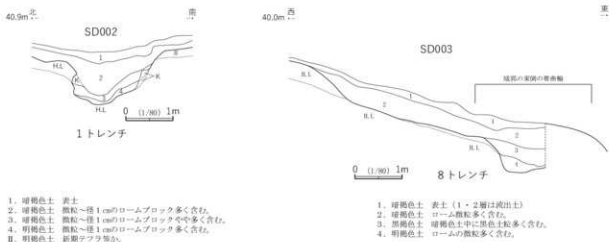
幅2.0m・長さ5.0m～8.0mのトレンチを、山上平坦部に23か所、縁辺部斜面に6か所（5T・8T・11T・17T・21T・20T）、斜面中腹に2か所（30T・31T）の計31本設置し356㎡（山上平坦部では約10%、斜面部を含む全体では37%）の調査を実施した。

トレンチで城郭関連遺構として記録したものは、1T・4T：空堀SD002、5T・8T：帯曲輪SD003、10T：空堀SD001、17T・21T：帯曲輪SD009、22T：帯曲輪SD005、25・26T：空堀SD004、30T：帯曲輪SD017等である。古墳時代末～平安時代の堅穴住居跡は、13T：SI017、19T：SI007、24T：SI004、28T：SI001等で検出された。確認調査の成果に基づき、山上平坦部から縁辺部を本調査範囲とした。

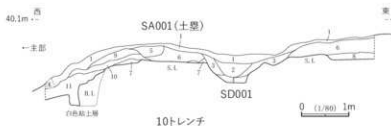


第7図 基本層序（274DS-00グリッド）

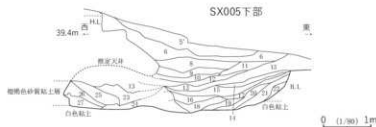
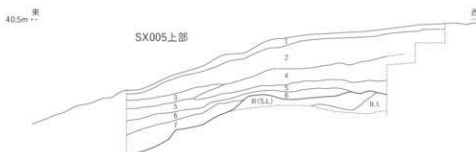




第9図 上層確認調査トレンチ土層断面図(1)

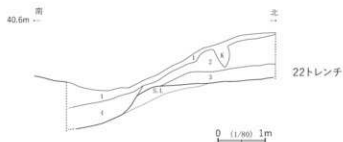


1. 暗褐色土 表土
2. 黒褐色土 2~4層は自然埋没か。
3. 暗褐色土 ローム微粒少量含む。
4. 明褐色土 ロームの微粒多く含む。
5. 黄褐色土 微粒~径5cmのロームブロック主体。
6. 暗褐色土 ローム微粒少量含む。
7. 明褐色土 微粒~径1cmのロームブロックやや多く含む。
8. 明褐色土 ローム微粒やや多く含む。
9. 暗褐色土 ローム微粒少量含む。
10. 暗褐色土 ローム微粒多く含む。
11. 明褐色土 ローム微粒少量含む。近世以降の埋没か。

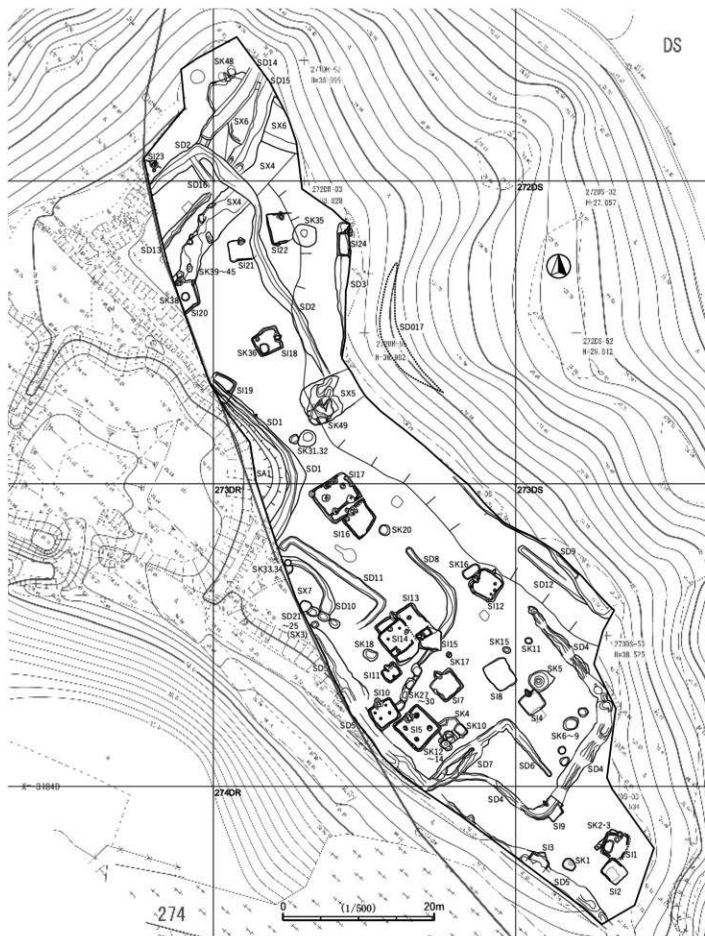


1. 黒褐色土 表土
2. 暗褐色土 微粒~径5mmのロームブロック少量含む。
3. 暗褐色土 ややローム粒多く含む。
4. 明褐色土 微粒~径1cmのロームブロック多く含む。
5. 黄褐色土 微粒~径1cmのロームブロック少量含む。
6. 黒褐色土 黒色土粒多く含む。(SX005埋没後の埋戻土か)
7. 明褐色土 微粒~径1cmのロームブロック多く含む。
8. 暗褐色土 ローム微粒少量含む。
9. 明褐色土 微粒~径1cmのロームブロック多く含む。白色粘土少量含む。
10. 明褐色土 ロームブロック多く含む。
11. 明褐色土 微粒~径5cmのロームブロック多く含む。白色粘土少量含む。
12. 黒褐色土 ローム微粒主体。径1cmのロームブロック少量含む。
13. 黄褐色土 微粒~径1cmのロームブロック主体。
14. 黒褐色土 微粒~径2cmのロームブロック少量含む。
15. 暗褐色土 微粒~径1cmのロームブロック多く含む。
16. 暗褐色土 白色粘土やや多い。
17. 暗褐色土 白色粘土少量含む。
18. 暗褐色土 径1cmの白色粘土ブロック含む。
19. 灰褐色土 微粒~径2mmの白色粘土ブロック多く含む。
20. 黄褐色土 ローム微粒主体。径1cmの白色粘土ブロック少量含む。
21. 明褐色土 微粒~径1cmのロームブロック少量含む。
22. 黄褐色土 微粒~径1cmのロームブロック主体。
23. 黄褐色土 微粒~径1cmのロームブロック主体。
24. 黄褐色土 微粒~径3cmのロームブロック主体。上位に微粒~径2cmの白色粘土ブロック多く含む。
25. 黄褐色土 微粒~径20cmのロームブロック主体。
26. 灰黄褐色土 白色粘土少量含む。
27. 暗褐色砂質粘土 微粒~径10cmの砂質粘土ブロック主体。ローム粒少量含む。

第10図 上層確認調査トレンチ土層断面図(2)



第11図 上層確認調査トレンチ土層断面図 (3)



第12図 上層遺構全体図

第1表 遺構一覧表

住居の主軸は「長軸」に入れ、カマドは含まない。

遺構番号	種類	時期	位置	主軸	規模 (m)		主な遺物	遺構等	備考
					短軸	長さ			
S8001	竪穴住居跡	前期	274D5-13地	N-20°-E	3.3	3.6	縄文時代石器・土師器・磁石		28T カマドなし
S8002	竪穴住居跡	平安時代前期	274D5-23地	N-46°-E	3.0	2.6	須恵加・土師器		
S8003	竪穴住居跡	前期	274D5-20地	N-35°-E	2.4	1.9	0.58	SD905に切られる	
S8004	竪穴住居跡	V期	273D5-70地	N-37°-W	2.9	2.7	0.32	須恵加・土師器	24T 一部改良型一直状炊爨器に切られる
S8005	竪穴住居跡	I期	273D8-86地	N-45°-W	4.6	4.7	0.44	土師器	SD06に切られる
S8006(穴倉)	竪穴住居跡	V1期	273D8-67地	N-41°-W	3.7	3.4	0.30	須恵加・土師器・鉄鏡	穴倉 SK004に変更
S8008	竪穴住居跡	奈良・平安時代	273D8-69地	N-34°-W	2.4	2.3	0.20	土師器	19T カマドなし
S8009	竪穴住居跡	奈良時代後半 奈良時代前半	274D5-01地	N-42°-W	2.1	2.5	0.28	須恵加・土師器	SD099に切られる
S8010	竪穴住居跡	V1期	273D8-73地	N-30°-W	3.7	3.2	0.40	土師器・刀子	柱穴深3.05～0.2m
S8011	竪穴住居跡	V期	273D8-65地	N-38°-W	2.4	2.1	0.28	須恵加・土師器	
S8012A	竪穴住居跡	V1期	273D8-38地	N-58°-W	3.7	3.6	0.52	須恵加・土師器・土製積持棒	新カマド 別カマド(壁にのみ残存)
S8012B	竪穴住居跡	I期	273D8-38地	N-30°-E					
S8013	竪穴住居跡	I期	273D8-46地	N-32°-W	6.0	6.5	0.34	土師器	重覆 SK012→SK014
S8014	竪穴住居跡	平安時代中期	273D8-56地	N-38°-W	4.2	4.6	0.37	須恵加・土師器	SK016に切られる
S8015	竪穴住居跡	V1期	273D8-57地	N-76°-W	2.9	2.7	0.35	須恵加・土師器・瓦片・刀子・鏃	カマド遺構
S8016	竪穴住居跡	V期	273D8-146地	N-42°-W	3.8	3.7	0.30	土師器	
S8017A	竪穴住居跡	I期	273D8-04地	N-36°-W	5.5	5.2	0.24	土師器	重覆 SK017B→新・SK016
S8017B	竪穴住居跡	I期	273D8-04地	N-36°-W	4.2	4.1	0.14	土師器	13T, 主軸は深さ0.4～0.55m
S8018	竪穴住居跡	V期	272D8-51地	N-67°-E	3.4	3.7	0.38	須恵加・土師器・刀子・釘	SK036に切られる
S8019	竪穴住居跡	V期	272D8-60地	N-62°-W	3.5	4.5	0.28	土師器	
S8020	竪穴住居跡	V1期	273D8-49地	N-15°-W	2.7	4.6	0.40	須恵加・土師器・土製粘土	
S8021	竪穴住居跡	平安時代中期	272D8-22地	N-6°-W	3.1	2.8	0.20	土師器	
S8022	竪穴住居跡	平安時代前期	272D8-31地	N-10°-W	3.5	2.9	0.13	土師器	
S8023	竪穴住居跡	平安時代前期	271DQ-97地	N-26°-E	2.2	2.7	0.25	土師器	SK001に切られる
S8024	竪穴住居跡	前期	272D8-14地	N-1°-W	1.6	3.1	0.25	土師器	SK003に切られる
SK001	土坑	奈良・平安時代	274D5-21		1.50	1.72		須恵加・土師器	
SK002	磨石削小	中世	274D5-12地	N-46°-E	0.56	1.9	0.24		SK014を切る
SK003	土坑(堀)	奈良・平安時代	274D5-13地		1.00	1.60	0.35	土師器・磁石	SK014を切る
SK004	竪穴住居跡	中世	273D8-87地		3.0	3.20	0.20	土師器	
SK005	井戸穴遺構	奈良・平安時代	273D5-66地		2.60	2.95	1.96	縄文土器・土師器	
SK006	土坑	奈良・平安時代	273D5-72		1.18	1.30	0.23	土師器・砂質粘土・焼土	縦壁したカマド材の一段階意
SK007	土坑	奈良・平安時代	273D5-81		1.00	1.05	0.34	須恵加・土師器	
SK008	土坑	奈良・平安時代	273D5-71地		1.70	1.90	0.60	土師器	
SK009	土坑	奈良・平安時代	273D5-91		1.10	2.00	0.20	土師器	
SK010	土坑	奈良・平安時代	273D8-07地		1.50	1.80	0.63	須恵加・土師器	
SK011	土坑	奈良・平安時代	273D8-50		0.80	1.00	0.15	須恵加・土師器	遺物の一段階意
SK012A	土坑	中世	273D8-87		1.0	1.50	0.52		
SK012B	土坑	中世	273D8-87		0.9	1.75	0.50	須恵加・土師器・磁石	
SK012C	土坑	中世	273D8-87		1.30	1.2	0.43		
SK013	土坑	中世	273D8-87		0.50	0.78	0.26	須恵加・土師器	
SK014	土坑	中世	273D8-87		0.65	1.00	0.26	須恵加・土師器	
SK015	土坑	奈良・平安時代	273D8-59		0.80	1.00	0.30	須恵加・土師器	
SK016	土坑	中世	273D8-28地		1.24	2.50	0.65	須恵加・土師器	
SK017	土坑	中世	273D8-57		0.72	0.78	0.10	須恵加・土師器・銅管洋	
SK018	土坑	中世	273D8-55地		1.30	1.95	0.41	土師器	SK012のカマド跡を切る
SK019	土坑	中世	273D8-38地		0.65	0.9	0.28	須恵加・土師器	壁の戻し
SK020	土坑	中世	273D8-15		1.37	1.47	0.36	須恵加・土師器	
SK021	土坑(堀小)	中世	273D8-43		0.85	0.95	0.20		
SK022	土坑(堀小)	中世	273D8-43		1.45	1.45	2.05		地形は約5000年前、下部で0.3m広がる
SK023	土坑(堀小)	中世	273D8-43		1.25	1.4	0.60		地形の上層は遺跡に削平された可能性
SK024	土坑(堀小)	中世	273D8-43		1.15	1.50	0.20		
SK025	土坑(堀小)	中世	273D8-43地		1.12	1.30	0.60	土師器	
SK026	土坑	中世	273D8-03		0.77	0.81	0.21	土師器・磁石	SK017を切る
SK027	土坑	中世	273D8-76		1.00	1.24	0.20	土師器	SK008内に掘りこまれる。堀内障壁構造らしい傾斜状小
SK028	土坑	中世	273D8-76地		0.95	1.75	0.20	土師器	焼土多く含む
SK029	土坑	中世	273D8-69		1.16	1.45	0.15	土師器	
SK030	土坑	中世	273D8-69地		1.20	1.50	0.35	土師器	
SK031	井戸穴	中世	272D8-83地		2.18	2.50	3.90		SK032を切る
SK032	土坑	奈良・平安時代	272D8-82		1.18	1.25	0.29	須恵加・土師器・刀子・釘	
SK033	土坑	中世	273D8-22		1.30	1	0.20	土師器	SK010に切られる
SK034	土坑(堀小)	中世	273D8-22		0.82	0.86	0.90	土師器	SK010に切られる
SK035	井戸穴遺構	奈良・平安時代	272D8-12地		2.80	3.25	2.70	須恵加・土師器・土製粘土	5T
SK036	土坑(堀小)	中世	272D8-51		1.20	2.36	0.70	土師器	SK018を切る
SK037(穴倉)	土坑(堀小)	中世	272DQ-29地		1.05	1.15	0.46	土師器	SK022に小さな傾斜状の積去後の積去となったので現場ではSK037としたが、SK022と統一とする
SK039	土坑	中世	272DQ-28		0.80	1.00	0.77		SK020を切る
SK040	土坑	中世	272DQ-29		0.70	1.10	1.00		
SK041	土坑	中世	272DQ-29地		0.72	0.76	1.10		SK039～043の内、039～043は
SK042	土坑	中世	272DQ-19		0.52	1.34	0.90		外は地形区画の範囲に掘り込む

遺跡番号	種類	時期	位置	主軸	規模 (m)			主な遺物	施設等	備考
					別軸	長軸	深さ			
SK043	土坑	中世	272DQ-19地		0.74	1.48	0.49			種な形不定形
SK044	土坑	中世	272DQ-19		1.00	1.1	0.52			
SK045	土坑	中世	272DQ-49地		0.60	1.16	1.03			
SK046(穴倉)	自然木穴倉跡		272DQ-19							
SK047	粘土瓦甍残少	奈良・平安時代	271DR-90		0.3+	1.10	1.30			SK006内壁を覆り込み、埋め戻され、ST01と併る
SK048A	粘土瓦甍残少	奈良・平安時代	271DR-60		0.70	1.40	0.50			SK006の幅1m・高さ0.8mの壁に覆られた横穴が奥で2基の横穴に分岐、後の壁にも小規模な横穴が2箇所あり。
SK048B	粘土瓦甍残少				1.00	1.20	0.25			
SK049A	粘土瓦甍残少				0.90	1.30	1.10			
SK049B	粘土瓦甍残少				0.74	1.20	0.90			
SK049C	粘土瓦甍残少	奈良・平安時代	272DR-73		0.80	0.92	0.50			SK005の壁の横穴が内部で5基の横穴に分岐
SK049D	粘土瓦甍残少				0.45	0.90	0.30			
SK049E	粘土瓦甍残少				0.50	0.85	0.20			
SK001	住居等確認面							道土層・土層		SK013-015他報告前の収番号
SK002	住居等確認面									SK012同定調査前の収番号
SK003	地山層形成面	中世	273DR-43地		2.0	7+	0.3	土層		内部にSK021-023
SK004	地山層形成面	中世	272DQ-19地		2.7-3.6	10+	0.7-1.2	縄文土層・道土層・土層		内部にSK009-045
SK005	粘土瓦甍残少	奈良・平安時代	272DR-73地		3.5	58.3-2.1		道土層・土層		SK049A-73の内壁を覆り込み
SK006	粘土瓦甍残少	奈良・平安時代	271DR-71地		9+	13+	7-2.6	道土層・土層	奈良三郎	SK048A・B地の内壁を覆り込み
SK007	塚(竈跡)	近世	273DR-32地		3+	8+		14T西側表上に竈石(竈等)		SD010で囲まれた部分
SA001	土塼	中世	272DR-81地	N-46°-W N-22°-E	2.0	18+	0.3-0.5			10Tでは土層側に竈穴六ヶ確認
SD001	変型	中世	272DR-92地	N-46°-W N-22°-E	1.5-2.7	25+	6-0.85	道土層・土層	中世土層・陶器層	土器を囲む変形の延長、10T
SD002	変型	中世	272DR-13地	N-36°-W N-33°-E	1.8-2.3	43+	0.8	縄文土層・土層	中世埋陶磁器・磁石・残片	1T・4T
SD003	帯曲輪	中世	272DR-34地	N-1°-W N-7°-E	2+	18+	0.6	道土層・土層		5T・8T
SD004	変型	中世	273DS-94地	N-39°-W N-52°-W N-28°-W	1-2	50+	0.2-1	道土層・土層	磁石	25T・26T
SD005	帯曲輪	中世	273DR-96地	N-55°-W N-40°-W	2+	57+	0.8	道土層・土層	磁石	22T
SD006	溝	中世	273DS-60地	N-58°-E	0.6-1.2	23.4-0.5		縄文土層・道土層・土層		
SD007	溝	中世	273DR-98地	N-43°-E N-45°-W	0.6-1.4	9	0.3	道土層・土層		SD006の分岐
SD008	溝	中世	273DR-37地	N-35°-E	0.7-1.3	26	0.2	道土層・土層	鉄片	
SD009	帯曲輪	中世	273DS-21地	N-50°-W	5+	28+	1	道土層・土層		SD003の連続か、17T・21T
SD010	堀溝	中世	273DR-33地	N-40°-W	0.8-1.90	1.2	0.25	土層	中世埋陶磁器	14T
SD011	溝	中世	273DR-23地	N-55°-W N-45°-E	1.2	22+	0.45	縄文土層・道土層・土層		
SD012	溝	中世	273DS-20地	N-52°-W	1.0	12	0.2			
SD013	溝	中世	272DQ-18地	N-37°-E	0.6-1	10+	0.25	土層		
SD014	変型	中世	271DR-70地	N-43°-E	2+	15	1.5	道土層		
SD015	変型	中世	271DR-91地	N-20°-E	2+	13	1-2			
SD016	溝	中世	271DQ-99地	N-37°-W	1.3	4.5+	0.13	土層		
SD017	帯曲輪	中世	272DR-56地	N-16°-W	1.0	20		縄文土層・土層		30T 確認調査のみ

第2節 縄文時代

1 遺構外出土土器・土製品 (第13・14図、図版29)

1～4は捻糸文土器の深鉢口縁部である。1は口唇に平行になるように原体を押圧し、下側に向かって縦位に回転施文する。口唇上と内面は横位に回転施文する。非草1式と思われる。2は弱く外反する口縁部から、縦位の捻糸文を密に施すもので、夏島式であろう。3・4は同一個体と思われるもので、やや間隔が開いた捻糸文を縦位に施文する。夏島式である。5～9は条痕文土器の深鉢である。5は口唇上に丸棒状工具でキザミを施し、胴部側は凹形刺突を伴う斜位の沈線を配し、刺突間を沈線で三角形に充填する。鶴が島台式の口縁部である。6・7は貝殻条痕のみが施される口縁部で、6は細い棒状工具、7は丸棒状工具によるキザミが口唇上に施される。9は底部直上である。15は胎土に植物繊維を多量に含む無文土器で、前期前半の深鉢口縁部と考えられる。10～12は前期後葉から末に位置づけられる深鉢である。10は口縁部を約4cm幅で折り返し、波状貝殻文を施す。11は内傾するもので、棒状工具による波状沈線を横位に巡らす。上側には平行するように結節縄文を施している。12は丸棒状工具を約1.5cm間隔で2列に刺突する。類例に乏しいが胎土が11に類似するため前期とした。

13・14・16～22は中期前葉五領ヶ台式もしくは下小野式に位置づけられる深鉢である。13・16は外側への、17は内側への折返し口縁となっているほか、14は折返しを意識したような屈曲が認められる。13は縦位の、14は横位の無節縄文が施される。16は口唇部に丸棒状工具によるキザミを施すほか、折返し部下端と、その下に貼り付けた隆起線上にもキザミを施す。17～20・22は結節縄文を横位に施文する。19・21はいずれも外反する口縁部に縦位の細沈線を密に施し、その下側は丸棒状工具による沈線を多段に巡らせる。2番目と3番目の沈線の間には交互刺突を配する。21は最上段の沈線と最下段の沈線の下に、密な凹形刺突列を巡らす。23・27は中期前葉阿玉台式の深鉢である。23は摩耗が顕著で分かりにくい、口唇部が屈曲するように外反し、その下側に半截竹管による押引文を巡らす。27はいわゆる刻目文を多段に配する。図の右上と左上、左下に断面三角形の隆起線が貼り付けられているのが確認できるが、ほとんど剥落している。胎土は暗赤褐色の砂質土で阿玉台式に特徴的な雲母片の混入がほとんど認められず、焼成が悪いためか器面の摩耗も顕著である。

24～26・28・29は中期前葉勝坂式の深鉢である。24・25は同一個体と思われるもので、断面半円形の隆起線の側縁に半截竹管による角押文を施す。26は環状を呈し、頂部が突出する把手である。縁辺にキザミを持つ隆起線を貼り付け、その内側は丸棒状工具による角押文を添わせる。左右とも弧状の隆起線で区画されており、胴部の楕円形区画を想起させる。28は波状口縁深鉢の波頂部に付けられたと思われる把手である。頂部は楕円形の皿状で、外周には尖頭状工具による三角押文を巡らせる。下側は弧状の隆起線を貼り付け、その上側に頂部と同じ三角押文、下側は丸棒状工具による角押文を施す。29は半截竹管のように見えるが、実際には三角押文を2列山形に配したものである。上側にはもう一組配されている。30～35は中期後葉加曾利E式の深鉢である。30は口縁部で、丸棒状工具による横位の刺突列を2条配し、下側は縦位の捻糸文を施す。全体に摩耗が顕著である。31は山形を呈する把手である。32は捻糸を縦位に施して地文とし、3本一組の沈線を横位及び連弧状に巡らす。33は横位の微隆起線に沿って単節縄文を横位に施文し、その下側は縦位に施文する。34は縦位の縄文帯と磨消部分の境が微妙に盛り上がっており、微隆起線を意識していると思われる。35は0段多条と思われる原体を縦位に施文しており、加曾利E式と判断した。

36～52は後期初頭から前葉にかけての深鉢である。36・37は称名寺式である。37は摩耗が顕著で、沈

線や列点状の窪みも欠損である可能性がある。38～42は東北地方の影響を受けたと思われる土器である。41・42は横位の隆起線を境に、上側口縁部は無文帯になるものである。38・39も隆起線を境に口縁部が無文帯になるものと思われるが、隆起線部分が最大径となり口縁側が内傾する。40は41と同様の口縁部無文帯となる波状口縁深鉢で、波頂部直下に縦位の刺突隆起線を貼り付ける。

43～52は堀之内式である。43・52は櫛羽状工具による条線を地文とする。46はやや強く外反する器形を呈し、横位の隆起線に丸棒状工具による連続刺突を斜め方向に施す。器面には輪積み痕跡が残る。47は内傾する器形を呈し、縦位に3か所の円形刺突を持つ隆起線を貼り付ける。注口土器の可能性もある。

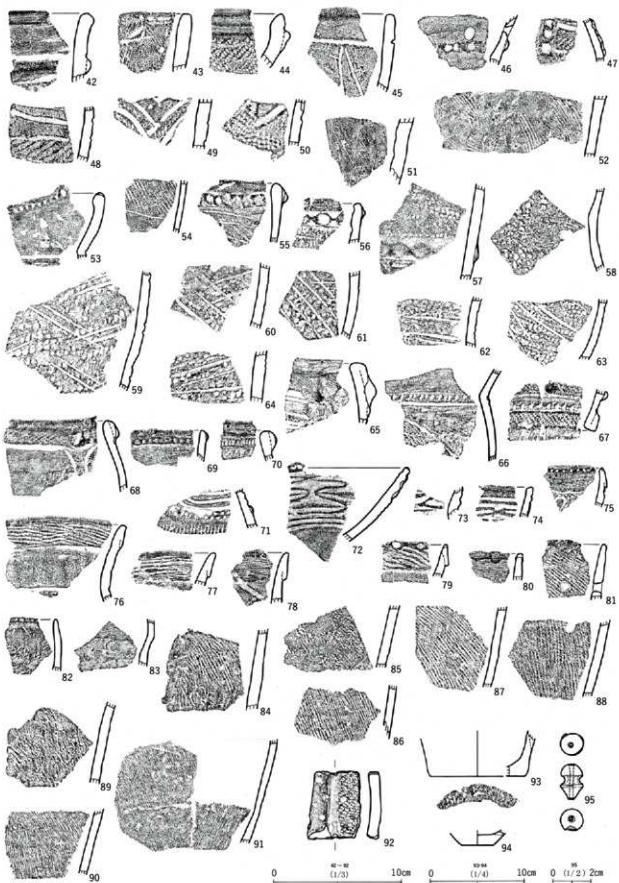
53・54・56～64は後期中葉加曾利B式の深鉢である。53は波状口縁の精製深鉢であるが、胎土は27と類似する暗赤褐色の砂質土で、口唇上など摩耗が顕著である。54は精製深鉢の胴部と思われる。56～64は粗製深鉢である。紐線文の指頭押圧が間隔をあけていることや、条線が斜格子状を呈するものが多いことから加曾利B1式～B2式を中心とすると考えられる。55・65～67は後期後葉曾谷式及び安行1式である。55は粗製土器の深鉢口縁部で、紐線文の押圧の間隔が狭く縄文は施されない。65は平口縁の精製深鉢で内傾する。66は精製深鉢の胴部である。67は台付土器の台部で、内面の調整がケズリのみでかなり粗いため台と判断した。

68～70は晩期前葉の安行3a式～3b式の深鉢である。68は枠状区画文の深鉢口縁部で、口唇部は肥厚し、縄文が施される。器面は摩耗が顕著である。69・70は粗製深鉢口縁部で、紐線文の形態などは後期的だが条線はまばらもしくは施文されないため晩期とした。71～75は晩期中葉から後葉の精製土器である。71は大洞C2式の壺形土器で、燃糸地文に横位の隆起線を貼り付け、丸棒状工具による2列の刺突列を配する。口縁部側は横位沈線を配する。72は浮線文の浅鉢で、分りにくいが口唇上には丸棒状工具が押圧される。73も浮線文で小破片のため全体形状は不明であるが、やや強く外反している。74も浮線文の鉢と思われる。75は壺形を呈する土器で、折返し口縁となり口唇上には丸棒状工具によるキザミが施される。頸部は丸棒状工具による曲線と刺突の充填が認められる。荒海式と考えられる。76～91は晩期中葉から後葉の粗製深鉢である。76～79は口縁部を折り返して燃糸文を横位に施文し、頸部は無文としている。79は口唇上に丸棒状工具を押圧している。80もおそらく折返し口縁となるもので、口唇上には原体押圧が認められる。81・82は口縁部を折り返さないもので、燃糸文は斜位に施文し、無文部はない。81は分りにくいが口唇上にも燃糸施文が認められる。83は口縁部直下に当たるもので、明白な折返し構造にはならないが、燃糸施文部と無文部との境が屈曲する。84～91は胴部破片で、84～88は原体がやや太く、89～91は細くなる。時期差を示している可能性はあるが、供件する精製土器が乏しいため明白なことは分らない。93は深鉢底部で推定底径10.0cm、残存器高4.8cmを測る。胎土は粗く雲母片を多量に含む。底面にアンペラ圧痕が認められる。中期前葉と思われる。94も深鉢底部で、底径は3.4cm（完存）、残存器高1.6cmを測る。胎土は密で内・外面とも丁寧な調整が施される。後期後葉から晩期前葉の精製深鉢と思われる。

縄文時代土製品は縮尺の都合上、土器と区別せずに掲載している。92は土器片錘である。長さ5.4cm、幅4.2cm、厚さ1.1cm、重さ38.5gを測る。加曾利E式土器の深鉢口縁部を転用しており、沈線と紐かけ溝の位置が一致する。95は晩期中葉から後葉と思われる耳飾りである。長さ1.9cm、最大径1.2cm、重さ1.8gを測る。胎土は密で焼成も良好である。括れ部に成形痕が残るが全体に丁寧な調整である。ごくわずかに赤彩が残る。



第13図 縄文土器 (1)



第14図 縄文土器 (2)・土製品

2 遺構外出土石器 (第15-17図、図版30、第2表)

1～3は石鏃である。1はガラス質黒色安山岩製で、整った二等辺三角形形状を呈し、基部は凹基をなしている。両側縁、基部ともに最終調整は表面に偏り、特に基部裏面には細かい調整が加えられていないが、側縁に対する表裏の形状バランスも比較的整っている。2もガラス質黒色安山岩製の石鏃である。全体としては三角形であるが、基部が緩やかな凹基であるとともに両側縁に緩やかな括れを形成して尖頭部がやや突出する。3は黒曜石製の石鏃で、やや扁平な三角形形状を呈し、基部は凹基をなす。最終調整は表裏ともに右側縁に集中的に加えられている。

4はチャート製の石鏃未製品である。片面に礫皮面を残すやや厚みのある剥片の末端の端部を尖頭部として利用し、打撃側を中心に基部調整を行っている段階で放棄されたものである。5はチャート製の縦型石匙である。摘み(突出部)を含めて非常に整った対称形に作られており、最終調整は不規則に見えるが、細部を整える目的でランダムに加えられたと考えられる。下端はわずかに折損している。側縁の稜が整っていることが重要であると同時に尖頭部も意識された石器であるといえよう。

6は二次加工のある剥片とする。片側に礫皮面を残す玉髓の剥片を素材とし、周縁に剥離を加えているが、そのうち主要剥離面の右側縁から下縁に加えられたものを調整剥離と考え、スクレイパーのような機能を想定する。7も二次加工のある剥片とした。やはり片面に礫皮面を残すチャート製の剥片を素材として周縁に剥離を加える。図の側縁部の剥離からすると石核としての機能も想定されるが、下端部の剥離を調整剥離と重視している。

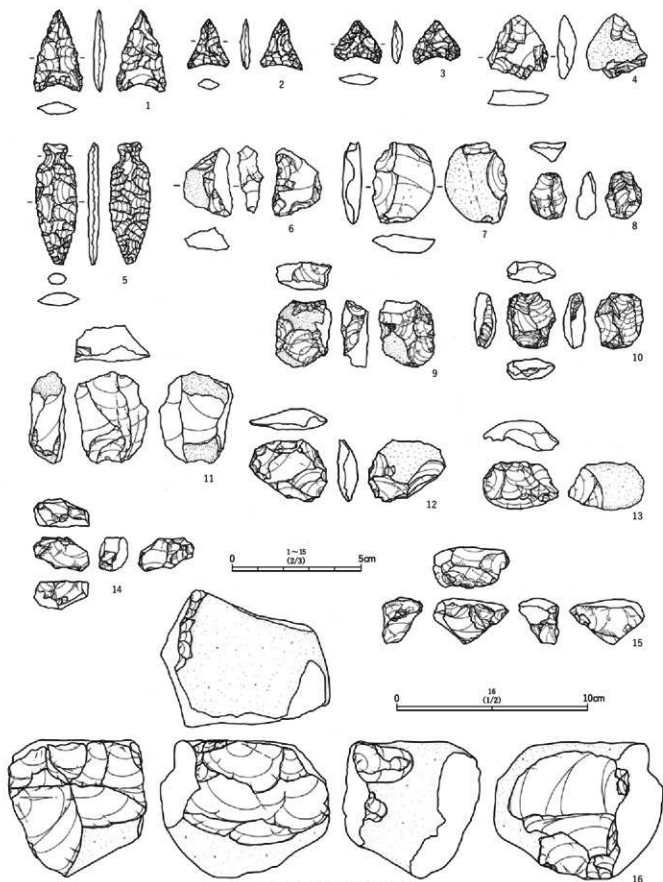
8～12は楔形石器(両極石核)である。明確に両極打法によって剥離されているものをこの範囲に含めた。8は黒曜石製の小型品で、両極打法が用いられていることは確実であるが、下端には不純物が集中するため細かい剥離面は観察できない。9は礫皮面を残したチャートの小円礫を素材とし、表面は主に上下両端から、裏面は主に左右両端からの剥離に覆われている。10も9と同種のもので、表裏とも主に上下両端からの剥離に覆われている。11は玉髓の小円礫を素材とする楔形石器である。裏面の上下端に礫皮面が残されている。両極剥離痕は概ね表面に限定されるが、左側面の下端には礫皮面を打面とする小剥離がいくつか観察される。12もチャートの小円礫を素材とする楔形石器で、裏面に礫皮面が残される。表面の上下両端、左右両端からの両極剥離痕が観察される。これらの楔形石器(両極石核)は、大きさ、形状から石鏃の素材として供される目的で製作された可能性があると思われる。

13-16は石核である。13は裏面に大きく礫皮面を残し、表面に周縁からの剥離痕が並ぶ。明確な両極打法の痕跡はないが、目的は8～12と同趣のものであった可能性が高い。14、15は黒曜石製の小ぶりな多面体石核である。打面転移を繰り返しながら小型の剥片を剥離した痕跡をもつ。16は拳大の砂岩礫を素材とするもので、礫皮面を残す部分も多いが、数回の打面転移を行い多面体を呈する石核である。

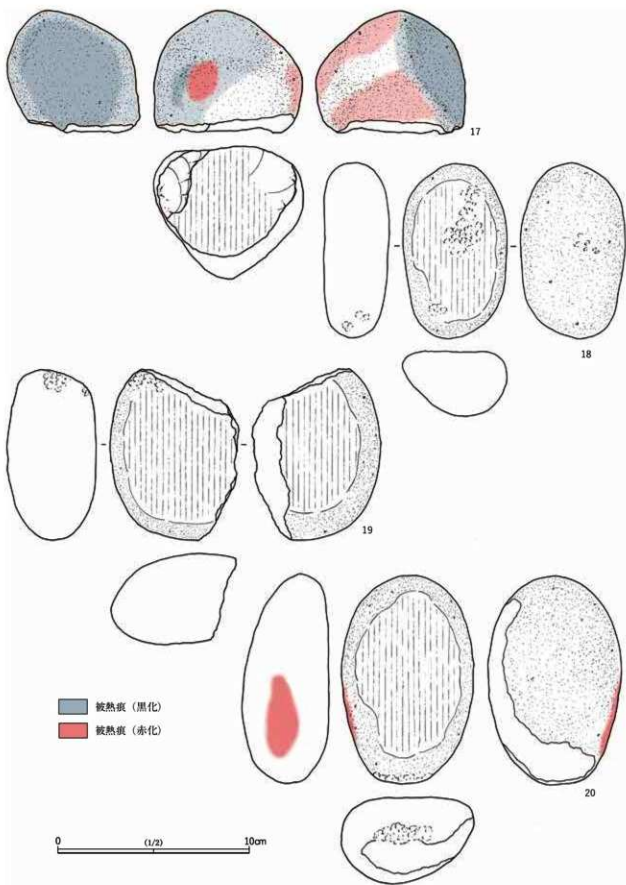
17はいわゆるスタンプ形石器である。顕著な被熱痕のある流紋岩の礫を用い、破砕面の一端を剥離により整えた上で磨りに用いている。

18、19は磨石である。18はやや扁平な流紋岩の楕円礫の一面を磨りに用い、同一面上で軽い敲きを行っている。19は安山岩のやや扁平な楕円礫を用い、表裏両面ともに磨りが行われている。また、側面の一端に敲きの使用痕がある。

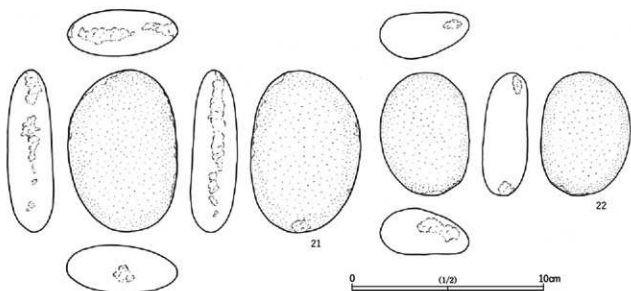
20も磨石である。砂岩の扁平楕円礫を用い、片面で磨りが、下端で敲きが行われている。また、この石器の側縁の一部には被熱痕が観察された。



第15図 縄文時代石器 (1)



第16図 縄文時代石器 (2)



第17図 縄文時代石器 (3)

第2表 縄文時代石器計測表(1)・(2)

種別	回数	番号	出土地点	遺物番号	品種	石材	計測値 (mm・g)				備考	
							最大長	最大幅	最大厚	遺存量		
				SI001	25a	割片	珉質頁岩	32.3	21.3	14.0	6.04	カマド内
				SI001	25b	礫	石英	27.5	15.0	15.0	5.10	カマド内
				SI001	26a	礫	石英	38.0	30.0	24.8	27.21	
				SI001	26b	礫	石英	24.9	25.0	17.2	13.33	
				SI001	26c	礫	石英	42.0	21.2	14.8	11.25	
				SI004	5	石核	黒曜石	10.0	9.5	7.8	0.54	実測なし
				SI006	1	礫	石英	35.1	23.0	21.3	17.69	
15	30	1		SI007	12	石礫	ガラス質黒色安山岩	32.0	19.5	4.9	2.44	カマド一拵
				SI008	5	割片	黒曜石	15.0	5.8	1.8	0.10	
				SI008	6	割片	チャート	36.0	35.5	8.6	9.90	3区
15	30	6		SI012	7	二次加工のある割片	玉髓	27.0	19.3	10.0	4.25	上層
				SI012	50	割片	黒曜石	25.5	26.0	8.0	3.30	
17	30	22		SI014	5	巖石	砂岩	64.7	47.0	24.0	106.42	
				SI018	2	礫	流紋岩	4.6	2.4	18.8	24.47	被熱破砕
				SI018	5a	礫	雲母片岩	54.0	41.3	20.2	41.57	
				SI018	5b	割片	ホルンフェルス	23.0	14.7	7.0	1.93	
				SI020	11	割片	珉質頁岩	34.0	37.7	20.9	23.16	
15	30	12		SI021	4	楔形石礫	チャート	24.6	30.6	8.2	5.16	
				SI024	1	割片	チャート	22.0	16.3	10.0	2.78	
15	30	15		SI024	2	石核	黒曜石	18.1	30.1	16.0	7.47	
				SK005	5a	礫	チャート	6.7	3.5	3.6	104.38	集団上下層一拵 被熱破砕
				SK005	5b	割片	チャート	3.6	2.8	9.6	7.49	集団上下層一拵
				SK010	1	礫	チャート	45.8	34.3	25.2	42.41	
				SK015	1	礫	珉質頁岩	41.7	29.6	6.9	7.43	被熱破砕
				SK016	1	礫	砂岩	47.0	31.5	6.2	14.80	
15	30	4		SK031	1	石礫木製品	チャート	25.5	23.7	7.0	4.17	
				SK001	1	割片	チャート	30.3	28.9	7.2	5.58	
15	30	13		SD004	2a	石核	チャート	19.0	29.9	12.0	5.63	
15	30	7		SD004	2b	二次加工のある割片	チャート	32.5	25.0	7.8	6.98	
15	30	5		SD004	3	石核	チャート	47.9	15.8	5.0	3.86	トレンチ内中層集団内一拵縄文時代
				SD001	3a	礫	頁岩	75.0	61.8	17.0	122.21	
				SD001	3b	礫	砂岩	61.7	51.8	24.0	98.49	
15	30	2		SD002	1a	石礫	ガラス質黒色安山岩	20.0	16.5	3.9	0.72	
				SD002	1b	割片	チャート	2.6	17.1	13.5	5.70	
				SD004	1a	礫	チャート	54.3	44.0	36.3	91.90	被熱破砕
				SD004	1b	礫	砂岩	53.1	37.2	26.0	69.13	被熱
				SD004	2	割片	流紋岩	13.2	17.0	4.2	0.62	

21、22は敲石である。いずれも砂岩の扁平楕円稜を用いるが、磨りの使用痕は認められない。21は周縁全体に、22は上下両端に敲きの使用痕が観察される。

種別	国版	番号	出土地点	遺物 番号	器種	石材	計測値 (mm・g)				備考	
							最大径	最大幅	最大厚	遺存重量		
				SD005	2a	礎	チャート	4.4	24.3	20.3	46.18	
				SD005	2b	礎	チャート	37.1	21.2	14.2	8.33	被熱破砕
				SD006.007	1a	礎	砂岩	105.8	57.7	37.8	211.12	被熱破砕
				SD006.007	1b	礎	チャート	67.0	48.0	33.5	127.40	被熱破砕
				SD006.007	1c	礎	チャート	59.8	24.0	18.0	23.97	被熱破砕
				SD006.007	1d	割片	石英	24.3	23.8	7.2	4.76	
				SD006.007	1e	割片	チャート	10.0	14.8	7.0	1.10	
				SD006.007	1f	割片	黒曜石	11.1	14.5	5.4	0.62	
				SD006.007	1g	割片	黒曜石	12.2	13.0	4.8	0.53	
				SD006.007	1h	割片	黒曜石	14.2	12.6	4.0	0.41	
				SD006.007	1i	割片	玉髄	13.6	7.7	4.7	0.39	
				SD006.007	1j	割片	黒曜石	7.2	11.1	3.2	0.19	
15	30	3		SD009	2	石鏃	黒曜石	16.8	17.8	4.1	0.79	
				SD010	1a	礎	砂岩	46.3	46.4	26.2	45.60	被熱破砕
				SD010	1b	礎	頁岩	25.0	19.8	18.5	9.09	
				SD011	1a	礎	砂岩	38.2	31.2	18.0	23.62	
				SD011	1b	割片	チャート	28.0	38.3	11.7	11.52	
				SD011	1c	礎	砂岩	36.0	19.5	14.5	8.84	
				272DQ-09	1	礎	頁岩	35.6	19.0	13.0	8.87	被熱破砕
				272DQ-19	2	礎	砂岩	59.1	41.8	20.3	40.19	被熱破砕
				272DR-00	1	割片	黒曜石	11.5	16.7	9.0	1.27	
15	30	11		272DR-30	1	楔形石鏃	玉髄	35.0	28.6	13.8	16.88	
				272DR-31	1	礎	チャート	42.2	34.8	32.2	38.05	被熱破砕
15	30	9		272DR-52	1a	楔形石鏃	チャート	26.8	22.0	10.8	7.37	
				272DR-52	1b	割片	黒曜石	15.0	15.2	5.5	0.59	
15	30	10		272DR-61	1	楔形石鏃	チャート	22.2	19.3	8.5	4.21	
15	30	16		272DR-62	1	石核	砂岩	72.0	85.0	72.0	581.96	
				272DR-93	1	割片	頁岩	51.2	48.4	21.0	48.24	
				272DR-96	1	礎	砂岩	45.7	44.0	13.4	29.10	被熱破砕
				273DR-37	1a	石核	黒曜石	13.8	17.0	7.1	1.65	美濃位し
				273DR-37	1b	割片	黒曜石	18.2	16.1	4.1	0.60	
				273DR-55	1	割片	黒曜石	18.5	9.8	5.7	0.52	
				273DR-57	1	礎	チャート	41.0	28.4	14.2	15.75	被熱破砕
				273DS-72	1	割片	黒曜石	18.1	21.0	7.8	2.47	
				274DS-2	1	割片	黒曜石	19.0	15.0	6.7	1.08	
15	30	8		274DS-23	1	楔形石鏃	黒曜石	18.8	14.2	7.6	1.36	
				1T	2	割片	凝灰岩	29.7	16.0	4.8	1.68	
				SX007	1a	礎	凝灰岩	63.8	52.0	35.0	132.84	被熱
17	30	21		SX007	1c	敲石	砂岩	85.5	58.0	25.0	179.27	
				SX007	1d	礎	安山岩	75.5	52.0	30.0	184.21	被熱
				SX007	1e	礎	安山岩	80.5	67.2	33.5	240.44	被熱
				SX007	1f	礎	砂岩	74.0	67.6	39.0	253.20	
16	30	18		SX007	1g	礫石	流紋岩	92.0	55.0	34.0	264.36	
16	30	17		SX007	1h	スタンプ形石鏃	流紋岩	64.0	79.0	62.0	472.48	被熱
				SX007	1i	礎	流紋岩	89.0	76.8	60.5	479.67	
16	30	20		SX007	1j	礫石	砂岩	110.0	70.0	45.5	498.45	
				SX007	1k	礎	結晶片岩	11.9	29.8	6.9	595.32	被熱
				SX007	1l	礎	安山岩	112.3	100.5	54.2	670.00	被熱
				SX007	1m	礎	チャート	112.3	92.2	64.7	950.00	
16	30	19		14T	2	礫石	安山岩	90.5	68.0	47.0	387.66	被熱
				24T	1	礎	砂岩	47.2	24.7	8.8	8.26	被熱破砕
15	30	14		表採	2a	石核	黒曜石	18.2	22.0	11.4	3.84	
				表採	2b	礎	流紋岩	59.3	52.8	35.0	159.59	被熱
				表採	2c	礎	砂岩	55.2	35.9	25.3	47.89	被熱破砕

第3節 古墳時代末から奈良・平安時代

1 竪穴住居跡

SI001 (第18・19図、図版8・31・38)

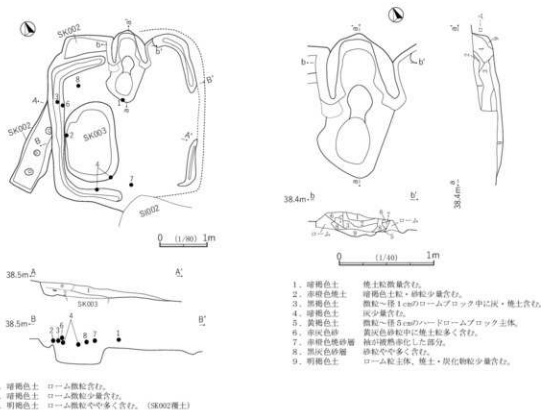
本調査区南東端の274DS-13グリッド他に位置し、主軸はN-20°-Eを指す。規模は、長軸3.6m、短軸3.3m、深さ0.25mである。南東側の緩傾斜地に掘り込まれており、攪乱も受けているため、東～南東側の壁は確認されなかった。床面の硬化面は攪乱があり明確には確認できなかった。西側には2基の土坑 (SK002・003) が掘り込まれている。SK002は中・近世のビット列を伴う布掘り状の掘り込み、SK003は平安時代の土坑である。カマドは北東辺の中央に位置する。両袖は掘り残したロームの上に黄灰色砂が積まれ、被熱赤化している。カマド手前には燃焼部に続く浅い凹みが確認される。

遺物は攪乱の少ない西側で多く出土した。1～7は土師器杯で、2～5は体部から底部全面に手持ちヘラケズリが施される。1はロクロ成形で、口径と底径の差が少ない形状である。7は須恵器模倣の高台付杯である。また、1・2・5・7は口縁部に油煙が付着しており、灯明皿として利用していたようである。6の底部外面の墨書文字は不明である。8は凝灰岩製の砥石である。出土した土器の時期は9世紀第1四半期であるが、7は8世紀第3四半期頃の様相を呈する。混入または灯明皿としての再利用であろうか。

SI002 (第19図、図版8・36)

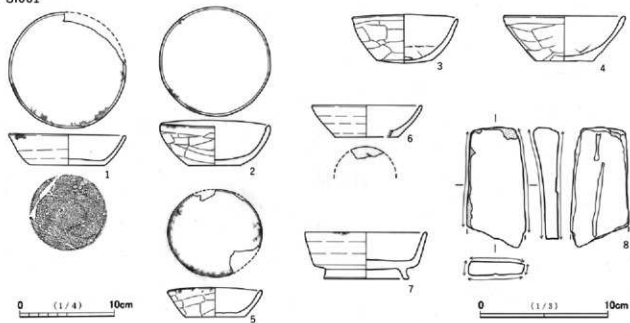
SI001の南側に位置し、主軸はN-35°-Eを指す。規模は長軸3.0m、短軸2.6m、深さ0.2mを測る。カマドは検出されなかった。SI001同様攪乱が激しく、東側の壁や周溝は明確には検出できなかった。

1は体部が大きく開く土師器杯と思われ、回転糸切り後周縁に手持ちヘラケズリを加える。2は叩きを有する須恵器甕である。3は須恵器甕の胴部と高台付杯の底部が癒着している。9世紀後半の所産であろうか。

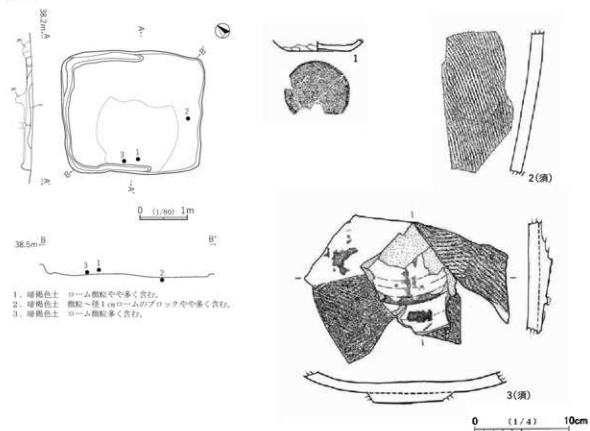


第18図 SI001 (1)

SI001



SI002



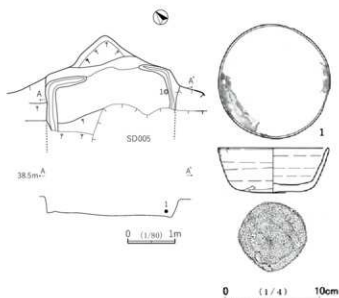
第19図 SI001 (2)・SI002

SI003 (第20図、図版8・31)

本調査区南東端の274DS-23グリッド他に位置し、中世帯曲輪SD005に南側を大きく削られている。主軸はN-35°-E、確認できる規模は東西方向で26m、深さ0.6mである。北東部に突出する掘り込みがあり、この位置で周溝が途切れていることから、カマドの堀方と思われる。

1の土師器杯が床面近くで出土した。

底部全面持ちヘラケズリで、体部内面から口縁部にかけて油煙が付着する。灯明皿として使われたようである。8世紀第4四半期の所産と考えられる。

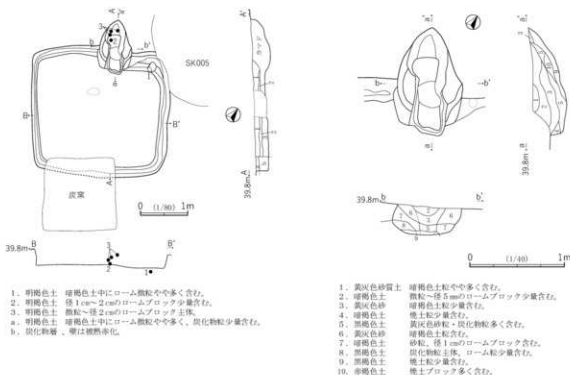


第20図 SI003

SI004 (第21・22図、図版8・9・31)

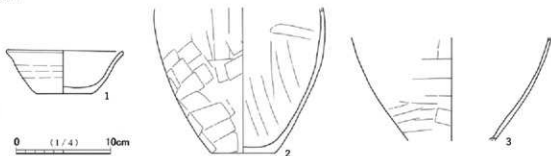
本調査区南東部273DS-70グリッド他に位置し、主軸はN-37°-W、規模は長軸2.9m、短軸2.7m、深さ0.2m程を測る。南西側は近代の炭窯に切られるが、周溝は全周するようである。カマドは北西辺の東寄りに位置し、袖は黄灰色砂主体である。

カマド内から土器が出土した。1はロクロ成形の土師器杯で、口縁部が外反する。2・3は土師器甕である。9世紀第3四半期の所産と思われる。

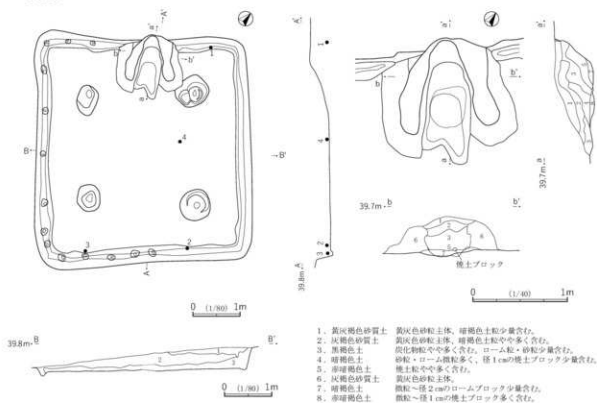


第21図 SI004 (1)

SI004

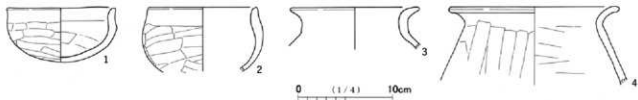


SI005



1. 暗褐色土 ローム微粒少量含む。
2. 暗褐色土 微粒～径2cmロームブロック少量含む。
3. 暗褐色土 ローム粒少量含む。

1. 黄灰色砂質土 黄灰色砂粒主体、暗褐色土粒少量含む。
2. 黄褐色砂質土 黄灰色砂粒主体、暗褐色土粒や多く含む。
3. 黒褐色土 炭化物粒や多く含む、ローム粒・砂粒少量含む。
4. 暗褐色土 砂粒・ローム微粒多く、径1cmの塊土ブロック少量含む。
5. 非暗褐色土 塊土粒や多く含む。
6. 灰褐色砂質土 塊土粒や多く含む。
7. 暗褐色土 黄灰色砂粒主体。
8. 非暗褐色土 微粒～径2cmのロームブロック少量含む、微粒～径1cmの塊土ブロック多く含む。



第22図 SI004 (2)・SI005

SI005 (第22図、図版9・31)

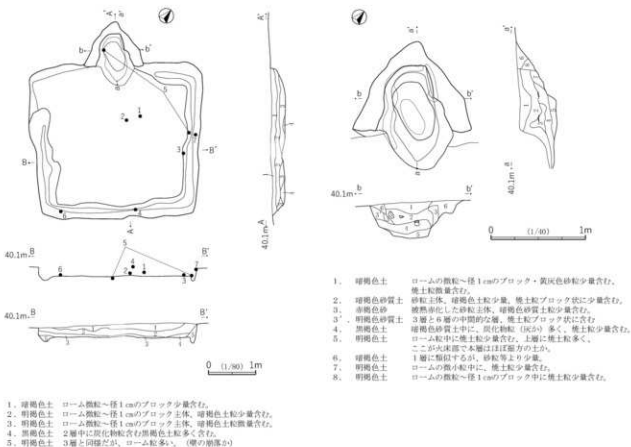
本調査区南西部273DR-86グリッド他に位置し、主軸はN-45°-W、規模は長軸4.7m、短軸4.6m、深さ0.44mである。床面には径0.5m～0.7m、深さ0.4m～0.6mの柱穴4本の他、全周する周溝の南西半分ほどに径0.15m前後、深さ0.3m前後の壁柱穴が掘り込まれる。柱穴の覆土は柱が抜かれた状況を呈する。カマドは北西辺のほぼ中央に設けられ、袖は黄灰色砂質土主体である。

図示した遺物は床面上からの出土である。1・2は体部と口縁部の境に稜を有する丸底の土師器杯、3・4は土師器甕の口縁部で、7世紀末～8世紀初頭の所産と考えられる。

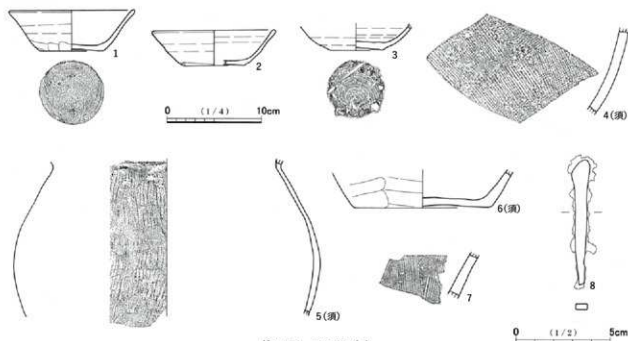
SI007 (第23・24図、図版9・10・31・36・38・41)

本調査区南東部273DR-67グリッド他に位置し、主軸はN-41°-W、規模は長軸3.7m、短軸3.4m、深さ0.3mである。床面に柱穴は確認されず、周溝はカマド左側を除き巡る。カマドは北西辺の中央に設けられる。壁を三角形に掘り込み、突出部の壁沿いに袖となる黄灰色砂質土が確認される。両袖内側は被熱赤化している。

遺物は床面上からの出土が主体である。1～3は土師器杯で、1・2は体部が直線的に大きく開く。1は回転糸切り未調整、2は糸切り後全面ヘラケズリを施す。3は体部が内湾気味に大きく開き、底部は回転糸切り未調整となる。4～6は叩きが施された須恵器甕、8は茎部を欠く鉄鉢である。9世紀第4四半期の所産であろう。7は中世志呂窟産とみられる15世紀後半の播種で、混入品である。



第23図 SI007 (1)



第24図 SI007 (2)

SI008 (第25図、図版10)

本調査区南東部273DR-69グリッド他に位置し、主軸はN-34°-Wで、規模は長軸3.9m、短軸3.4m、深さ0.2mを測る。不整長方形で、カマドも床面の硬化面も検出されず、図化できる遺物もなかったが、近接するSI007に主軸が近いので、関連する建物跡と想定した。

SI009 (第26図、図版10・36・38)

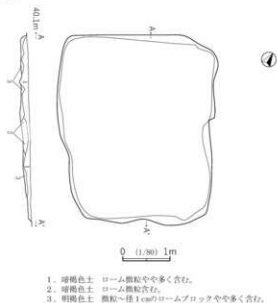
本調査区南東端274DS-01グリッド他に位置し、空堀SD004に切られる。主軸はN-41°-Wを指し、規模は東西方向で2.1m、深さ0.2mと小型となる。周溝は南東コーナーに部分的に検出され、カマドはSD004の北側斜面部に僅かに残存する。

遺物は覆土中からの出土である。1は外面赤彩の底部片で、外面に記号と思われる「○」状の墨書がみられる。2は叩きが施される須恵器甕片で、内面に当て具痕が確認される。8世紀後半の所産と考えられる。

SI010 (第26図、図版10・11・31・41)

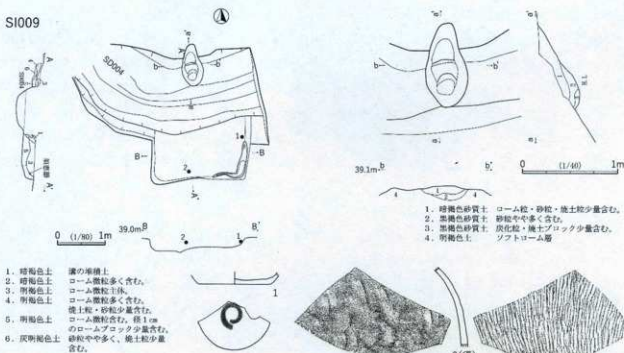
本調査区南西部273DR-75グリッド他に位置し、主軸はN-30°-W、規模は長軸3.7m、短軸3.2m、深さ0.4mである。柱穴4本はやや北側に偏在し、径0.12m～0.3m、深さ0.2m前後を測り、周溝はほぼ全周する。カマドは北辺中央に位置し、袖はロームブロック主体土で構築され、内側が被熱赤化する。

遺物の出土は少ない。1は外面赤彩された土師器杯で、体部が内湾気味に大きく開き、口唇部で若干外反する。2・3は鉄製品で、2は刀子、3は鉄鐙の茎部と思われる。9世紀第4四半期と推測される。

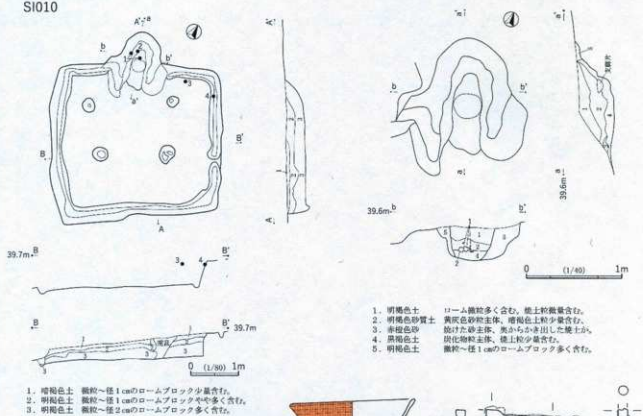


第25図 SI008

SI009



SI010



第26図 SI009・SI010

SI011 (第27図、図版11・31・36)

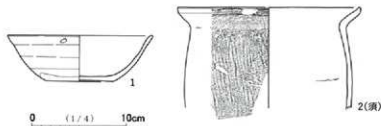
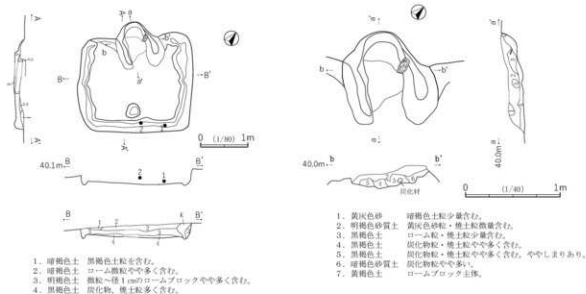
本調査区南西部273DR-65グリッド他に位置し、主軸をN-41°-Wに置く。規模は長軸2.4m、短軸2.1m、深さ0.28mと小型で、柱穴は検出されず、カマド対壁側に入出口と思われるピットが掘り込まれている。周溝は全周する。カマドは北西辺中央に設けられる。袖は暗褐色砂質土で、遺存状況はあまり良くない。右袖内側に炭化材がみられる。両袖内側は被熱赤化している。

遺物の出土は少ない。1は土師器杯で、体部が内湾気味に大きく開き、底部は回転糸切り後全面手持ちヘラケズリを施す。口縁部にモミと思われる圧痕がみられる。2は在地産の叩きの須恵器甕である。9世紀第3四半期の所産であろう。

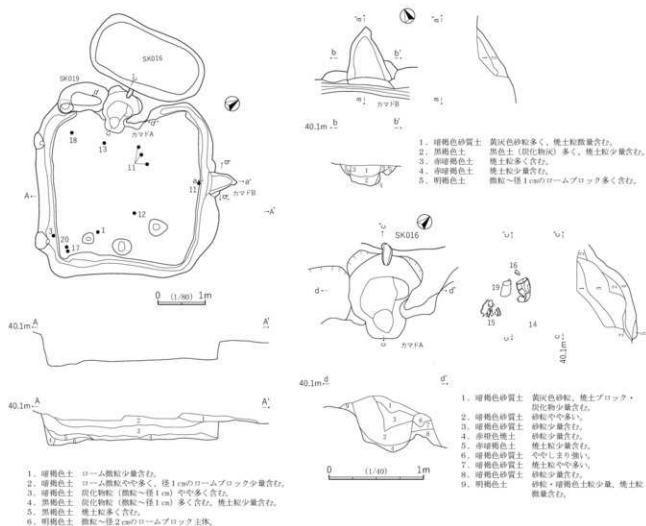
SI012 (第28・29図、図版11・12・32・37・38・39・41)

本調査区南東部273DR-38グリッド他の緩斜面に位置する。主軸はN-58°-Wで、規模は長軸3.7m、短軸3.6m、深さ0.52mを測る。周溝はカマド部分を除き全周する。カマド対壁側に径0.2m～0.3m、深さ0.1m程の浅いピットが3本検出され、中央が入出口ピットと思われる。北西壁には、深さ0.1mと浅い壁柱穴が3か所みられる。カマドは2基確認され、新旧関係はB→Aである。Aは壁を丸く掘り込み、左袖は地山であるロームを多く残し、右袖は砂質土を使用している。Bは壁外に煙道部がみられ、左右の壁が一部被熱赤化している。

遺物は床面上を中心に比較的多く出土した。1～9は土師器杯で、3～5・7の口縁部が外反気味となる。1は体部が内湾気味に大きく開き、底部は回転糸切り後部分的に手持ちヘラケズリが加えられる。2は直



第27図 SI011



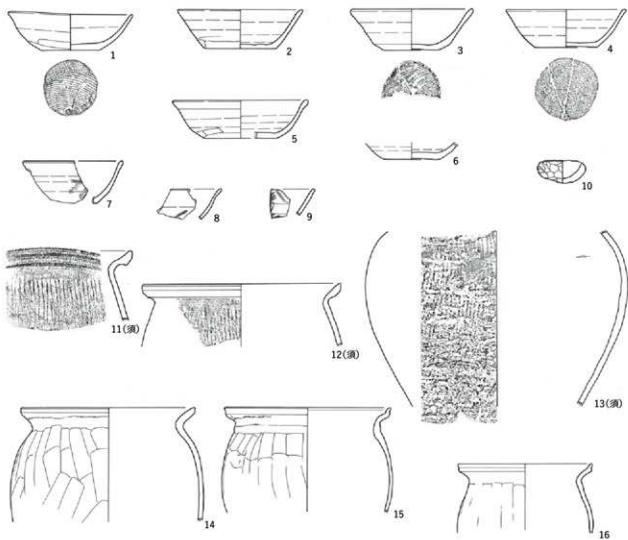
第28図 SI012 (1)

線的に体部が開くタイプで、底部は回転糸切り後全面手持ちヘラケズリとなる。7～9は体部の墨書土器片で、いずれも文字内容は不明である。10は手捏ね土器、11～13は胴部外面に叩きを施す在地産の須恵器甕である。14～16は土師器甕で、19の支脚とともにカマドA内から出土した。17・18は土製紡錘車、20は棒状鉄製品で、紡錘車の棒軸の可能性がある。

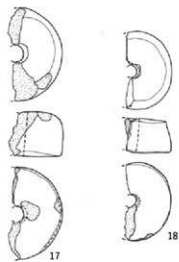
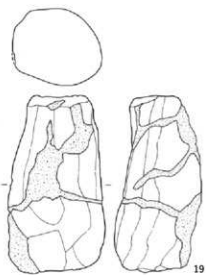
SI013・SI014・SI015 (第30～32図、図版12・13・32・37・38・39・41)

本調査区南東部273DR-46グリッド付近に位置する。3軒重複するが、SI013が最も古く、次にSI015→SI014となる。SI013の主軸はN-32°-Wで、規模は長軸6.5m、短軸6.0m、深さ0.34mと本遺跡の中では大型である。周溝はほぼ全周すると思われる。柱穴は、北東部(13-P1)の他に、SI015のカマドの位置(13-P2)、SI014の南西部(13-P3)・北西端のカマドの位置(13-P4)・北東壁沿い(13-P5)の5本が検出された。カマドは北西壁中央に位置し、砂質土を主とした袖が確認された。

遺物は少量であるが、1は皿状を呈する丸底の土師器杯、3は土師器甕である。2は筒状の胴部及び口唇部に最大径を有する形状から、甕となる可能性が高い。7世紀末～8世紀初頭の所産であろう。



0 (1/4) 10cm



0 (1/2) 5cm

第29图 SI012 (2)

SI014の主軸はN-38°-Wで、規模は長軸4.3m、短軸4.0m、深さ0.37mを測る。周溝は北東側の一部を除き検出され、小規模な柱穴が北西壁寄りに2本確認された。カマドの痕跡がSI013のP4の位置にある。

遺物は覆土中出土が主体である。1～5は土師器杯で、1は底部がやや突出し、体部が内湾気味に大きく開く。1・2とも底部回転糸切り未調整である。3・4は判読不能の墨書土器片、5は記号のような線刻がみられる。6は外面赤彩、内面黒色処理の古墳時代後期の高杯杯部で、混入品であろう。7は叩きが施された須恵器甕、8は口縁部に弱い稜を残す土師器甕である。9は土師器甕と考えられる。10は支脚である。10世紀前半の所産と考えられる。

SI015の主軸はN-76°-W、規模は長軸2.9m、短軸2.7m、深さ0.37mで小型となる。周溝は南壁と西壁にみられる。柱穴は検出されなかった。カマドは西壁の中央に位置し、袖の砂質粘土が部分的に残る。右袖から燃焼部にかけて土師器甕が複数並んだ状態で置かれていた。

遺物は、カマド及び壁側を中心に多く出土した。1～6は土師器杯である。1・5は直線的に体部が開くが、1は底部が若干突出し、体部が内湾気味となる。2・4は体部が内湾気味に開き、外面全体に手持ちヘラケズリ調整がみられる。4の底部は焼成後に意図的に穿孔された可能性が高い。3は内面黒色処理された高台付杯である。7は灰軸陶器の長頸壺で、軸が胴部外面及び底部見込み部に観察される。8～12は土師器甕で、9・12の口唇部は強くつまみ出され、沈線状の凹みが形成される。13は五孔となる甕の底部片である。14は石製紡錘車、15は馬具と思われる銅製帯先金具の裏金であろうか。16は刀子の刃部、17は基部である。18は明確ではないが、鉄鎌の基部の可能性もある。9世紀第4四半期の所産であろう。

SI016・SI017 (第33図、図版13・14・33・36・38)

本調査区中央部273DR-14グリッド他に位置し、SI016がSI017を切る。SI016の主軸はN-42°-Wで、規模は長軸3.8m、短軸3.7m、深さ0.3mを測り、やや不整な方形を呈する。柱穴は検出されなかったが、周溝はほぼ全周する。カマド左側のコーナー部に掘り込まれた径0.6m、深さ0.2mのピットは貯蔵穴となる可能性がある。カマドは北西壁の中央に位置し、砂質土を含んだ袖の内側が被熱赤化する。

遺物の出土は少ない。1は体部が直線的に大きく開き、底部回転糸切り未調整の土師器杯である。2は口唇部をつまみ上げる土師器甕である。9世紀第4四半期の所産と考えられる。

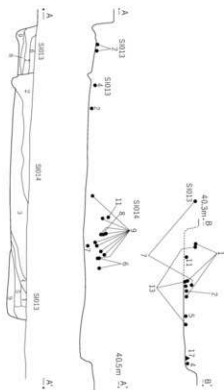
SI017は南側に拡張した竪穴住居跡で、主軸はN-36°-Wを指す。拡張後の規模は、長軸5.5m、短軸5.2m、深さ0.24mと比較的大型である。径1.0m前後、深さ0.5mほどの比較的大きな柱穴が4本検出され、いずれも抜き取られた痕跡がみられる。南東壁近くに出入口と思われるピットが掘り込まれる。周溝は、拡張前後ともほぼ全周する。カマドは2本確認され、遺存状況からB→Aへと移っているようである。Aは砂質粘土を含む袖の内側が被熱赤化している。右側のBは堀方のみで検出で、焼土が確認される。

遺物は少なく、3の土師器杯のみを図示した。カマド脇からの出土で、丸底を呈すると思われる。7世紀末～8世紀初頭の所産であろう。

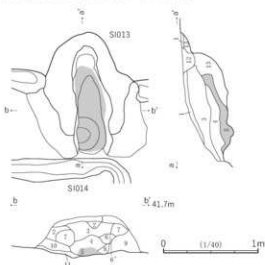
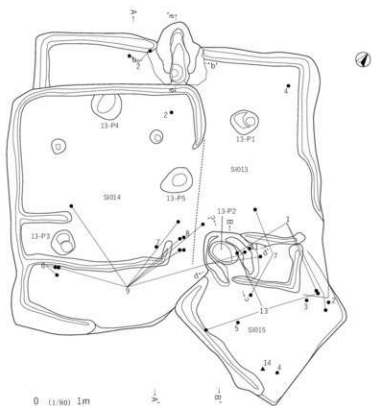
SI018 (第34図、図版14・15・33・37・41)

本調査区北東部272DR-51グリッド他に位置し、中世土坑SK036に切られる。主軸はN-67°-E、規模は長軸3.7m、短軸3.4m、深さ0.38mを測る。柱穴は検出されなかったが、北西コーナーにピットが掘り込まれる。カマドは東壁中央に位置し、袖は砂粒を少量含む暗褐色土の上に砂質粘土を積んでいる。

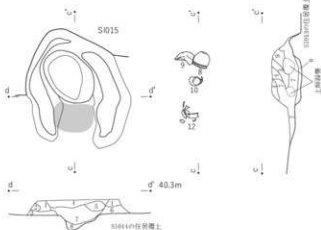
遺物はカマド内及び床面上に比較的多く出土する。1～6は土師器杯で、1・2は口縁部がやや外反し、3・4・6は体部が内湾気味に開く。3の底部は若干突出する。7・8は在地産の須恵器甕で、7の胴部



1. 明褐色土 ローム散粒・ロームブロックやや多く含む。
2. 暗褐色土 ローム微小粒少量含む。
3. 暗褐色土 ロームブロックやや多く含む。
4. 黒褐色土 炭化物粘多量含む。
5. 明褐色土 ロームブロックやや多く含む。
6. 明褐色土 ローム散粒主体、暗褐色土粒少量含む。
7. 明褐色土 暗褐色土粒やや多く含む。
8. 暗褐色土 炭化物粘多量、焼土粒少量含む。
9. 明褐色土 散粒～粒1cmの焼土ブロック少量含む。



1. 明褐色砂質土 黄灰色砂粒多量、焼土粒少量含む。
2. 明褐色砂質土 砂粒含む。
3. 暗褐色土 黒色土粒（炭化物粘小）やや多く含む。
4. 黒褐色土 黒色土粒（炭化物粘小）主体、砂粒・焼土粒少量含む。
5. 黒色土 焼土粒中にロームブロック・暗褐色土粒少量含む。
6. 赤灰色砂質土 砂粒中に焼土粒多量含む。
7. 暗褐色砂質土 暗褐色土中に砂粒・焼土粒多量含む。
8. 暗褐色砂質土 砂粒・焼土粒多量含む。
9. 明褐色砂質土 砂粒主体、暗褐色土粒少量含む。
10. 暗褐色土 砂粒少量含む。
11. 明褐色砂質土 焼土粒少量含む。
12. 黒褐色土 ローム微小粒少量含む。
13. 暗褐色土 ロームブロック・砂粒含む。



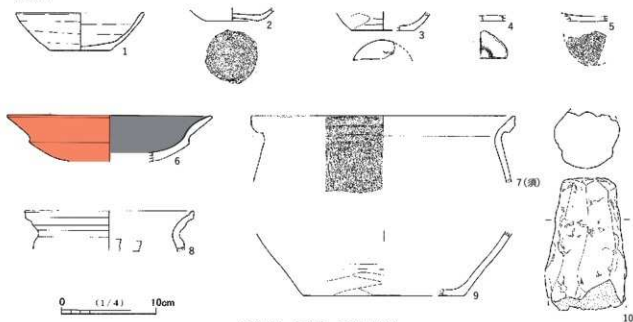
1. 赤暗褐色土 黄灰色砂粒少量、焼土の微粒ブロックやや多く含む。
2. 赤暗褐色土 微粒の焼土ブロック主体、砂粒少量含む。
3. 暗褐色土 焼土微粒少量含む。
4. 暗褐色土 炭化物粘やや多い。
5. 赤暗褐色砂質土 砂粒主体、焼土粒多量含む。
6. 暗褐色土 ローム粒少量含む。
7. 赤暗褐色土 焼土塊。
8. 暗褐色土 焼土粒少量含む。
9. 黒色土 炭化物粘（炭小）主体、焼土粒少量含む。

第30図 SI013・SI014・SI015 (1)

SI013



SI014



第31図 SI013・SI014 (2)

下位に幅広のヘラケズリ、8には叩きが施される。9・10は土師器甕で、9の口唇部がつまみ上げられる。11・12は刀子、13は小刀の可能性がある。9世紀第3四半期の所産と考えられる。

SI019 (第35図、図版15・38)

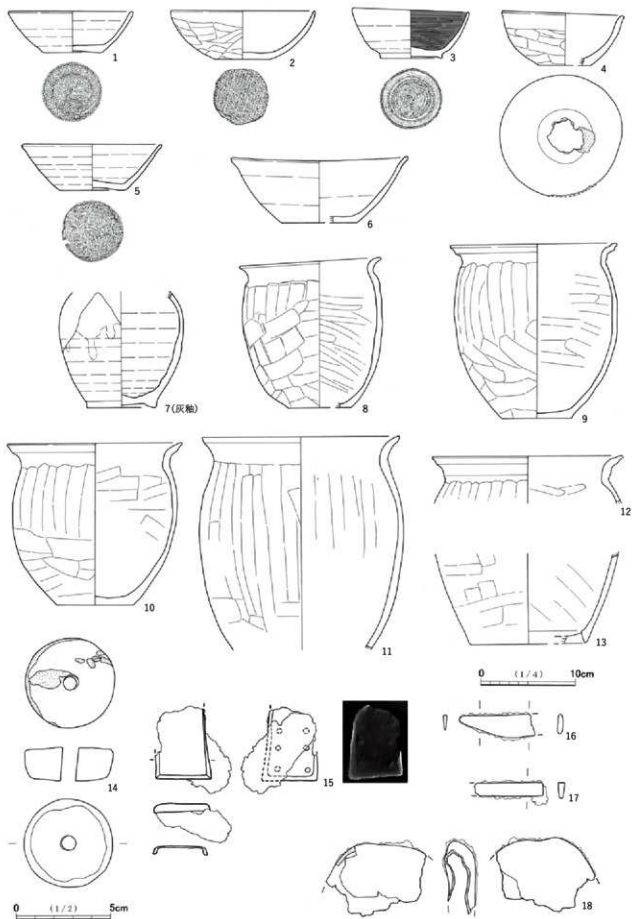
本調査区西部端の272DR-60グリッド他に位置し、中央部を中世の空堀SD001に切られる。主軸はN-62°-W、規模は長軸4.5m、短軸3.3m、深さ0.28mを測る。柱穴は検出されなかったが、周溝はほぼ全周すると思われる。南東壁際に入出口のピットが確認された。カマドは北西壁に存在していたようである。

遺物は少ない。1は土師器杯で、体部が直線的に開き、口縁部が若干外反する。2・3は判読不能の墨書土器片である。9世紀第3四半期の所産であろう。

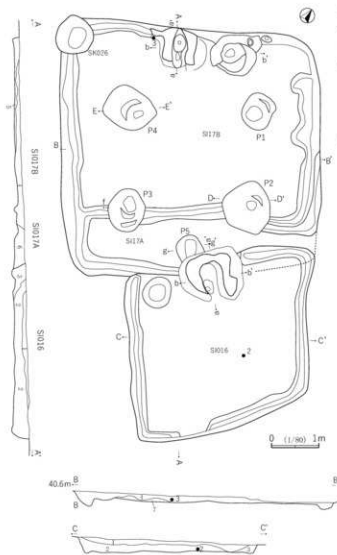
SI020 (第36図、図版15・36・37・39)

本調査区西部端の272DS-49グリッド他に位置し、西側は調査区外、中央部が中世土坑SK038に切られる。主軸はN-15°-Wを指す。規模は南北方向で4.0mほど、深さ0.4mを測るが、南辺が大きく歪む。周溝は2辺にみられるが、柱穴は検出されなかった。カマドは北壁中央に位置し、煙道部が中世土坑SK039に切られる。軸は砂質土主体で、内側が被熱赤化している。

遺物は床面付近が多く、7の支脚はカマド内から検出された。1・2・4は土師器杯で、1のロクロ目



第32圖 SI015 (2)



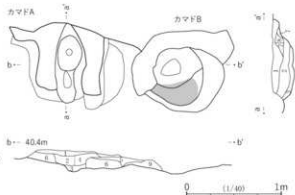
1. 暗褐色土 ローム微粒少量含む。
2. 暗褐色土 微粒～径1cmのロームブロックやや多く含む。
3. 明褐色土 微粒～径1cmのロームブロック主体、暗褐色土少量含む。
4. 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。
5. 明褐色土 ローム粒やや多く含む。
6. 暗褐色土 ローム粒多く含む。
7. 暗褐色土 微粒～径4cmのロームブロック主体、暗褐色土少量含む。



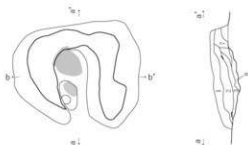
1. 明褐色土 微粒～径1cmのロームブロック含む。
2. 暗褐色土 ロームの微粒少量含む。
3. 暗褐色土 しまり弱い、微粒～径5cmのロームブロック多く含む。



0 (1/4) 10cm



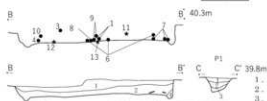
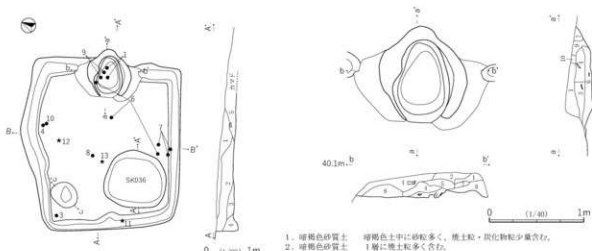
1. 明灰褐色砂質土 黄灰色砂粒～暗褐色土粒、焼土粒少量含む。
2. 赤暗褐色土 焼土粒多く含む。
3. 黄褐色土 微粒～径1cmのロームブロック主体。
4. 暗褐色土 焼土粒少量含む。
5. 灰褐色土 暗褐色土粒少量含む。
6. 明褐色土 微粒～径1cmのロームブロック多く含む。
7. 明褐色土 ローム微粒主体、暗褐色土粒少量含む。
8. 暗褐色土 ローム微粒少量含む。
9. 暗褐色砂質土 焼土粒やや多く含む。



0 (1/40) 1m

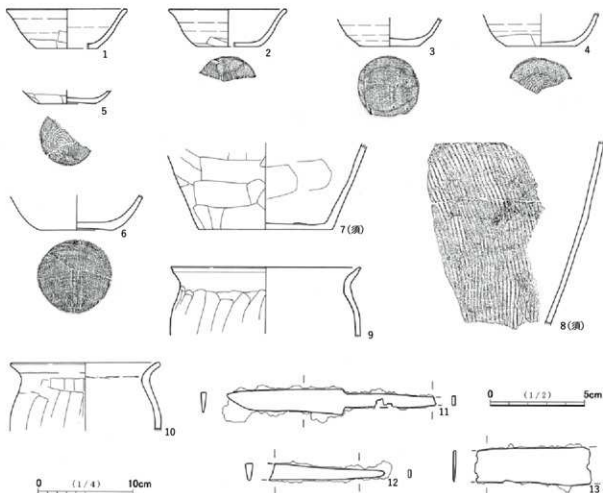
1. 暗褐色砂質土 黄灰色砂粒含む。
2. 黒褐色砂質土 黒色土(灰)主体、焼土粒少量含む。
3. 黒色土 炭化物・灰主体。
4. 暗褐色砂質土 黒褐色土粒やや多く含む。
5. 暗褐色土 焼土粒少量含む。
6. 明褐色土 微粒～径1cmのロームブロック中に暗褐色土少量含む。
7. 暗褐色土 ローム微粒少量含む。
8. 黄褐色土 微粒～径1cmのロームブロック主体。

第33図 SI016-SI017

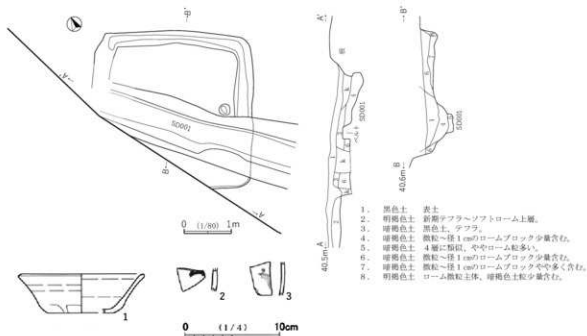


1. 暗褐色砂質土 暗褐色土中に砂粒多く、焼土粒・炭化物粒少量含む。
2. 暗褐色砂質土 1層に焼土粒多く含む。
3. 赤黒褐色土 黒褐色土(暗褐色土→灰赤)中に焼土粒多く含む。
4. 赤黒褐色砂質土 砂粒+黒褐色土中に焼土粒多く含む。
5. 灰褐色砂質土 砂粒+黒褐色土中に焼土粒少量含む。
6. 黒褐色土 細粒～径1cmのロームブロックやや多く含む。
7. 灰褐色砂質土 細粒+白色粘土。
8. 暗褐色土 細粒～径5mmのロームブロック少量含む。炭化物粒・砂粒少量含む。
9. 明褐色土 細粒～径1cmのロームブロック+暗褐色土層、焼土粒少量含む。
10. 赤褐色土 暗褐色土中に焼土粒多く含む。

1. 暗褐色土 ローム粒小粒少量含む。炭化物粒少量含む。
2. 暗褐色土 ロームの細粒～径1cmのブロック少量含む。炭化物粒少量含む。
3. 暗褐色土 2層に類似するが、ややローム多い。炭化物粒やや多く含む。
4. 黒褐色土 ローム粒・焼土粒少量含む。
5. 暗褐色土 2層に類似するが、炭化物量・焼土粒やや多く、砂粒少量含む。



第34図 SI018



第35図 SI019

が細かく残る。2は体部が直線的に開き、口縁部でやや外反する。4は内面黒色処理される。3は土師器皿と思われ、体部外面に「子」の文字が斜位に書かれる。5は叩きが施される須恵器甕で、下端がヘラケズリされる。6は比較的丁寧に成形された土製勾玉である。9世紀第2四半期の所産であろう。

SI021 (第37図、図版15・16・34・37)

本調査区北東部272DR-22グリッド他に位置するが、東側が中世の空堀SD002に切られる。主軸はN-6°-W、規模は南北方向で2.8m、深さ0.2mを測る。周溝は南辺の一部にみられるが、柱穴は検出されなかった。カマドは北壁に位置し、袖は白色粘土と砂質土主体で、内側が被熱赤化している。

遺物はカマド内からの出土が多い。1～6は底部回転糸切り後未調整の土師器杯で、体部が直線的あるいは内湾気味に大きく開く。1・2・6は底部がやや突出する。3は器高が浅い小皿状を呈する。7～9は土師器甕、10は甑となる可能性がある。焼成前の口縁部の補修が観察される。本遺跡では最も新しい10世紀中葉の所産であろう。

SI022 (第38図、図版16・38)

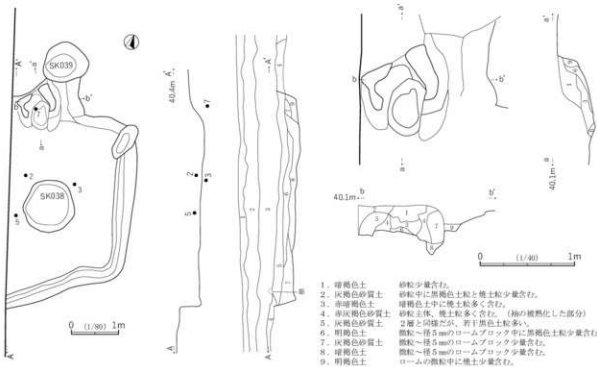
SI021の北東に近接するが、東側は斜面のため壁等は確認されなかった。主軸はN-10°-Wを指し、規模は南北方向で4.1m、深さ0.13mを測る。周溝は西辺及び南辺にみられるが、柱穴は検出されなかった。カマドは北壁に位置し、袖はローム粒を含む明褐色土主体である。

出土した遺物は少ない。1は文字不明の墨書土器片である。

SI023 (第38図、図版16・33・34・39・41)

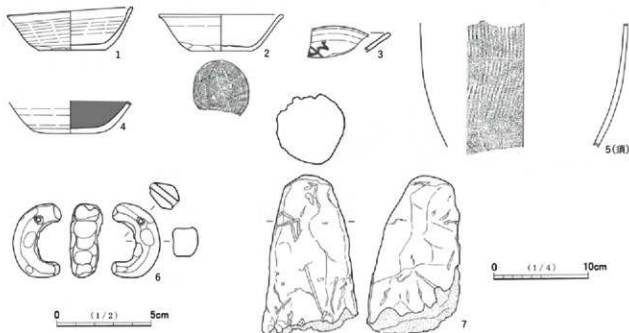
本調査区北東端271DQ-97グリッド他に位置するが、東側が中世の空堀SD002に切れ、西側は調査区外となり、カマド付近の検出にとどまった。主軸はN-26°-E、深さは0.25mを測る。カマドは北東壁に位置し、砂質土を含む袖の内側が被熱赤化している。

遺物はカマド内からの出土である。1は回転糸切り後未調整の土師器杯で、体部が内湾気味に大きく開

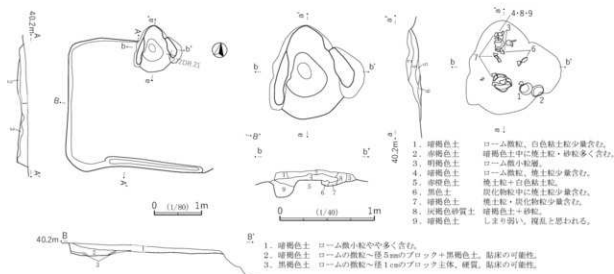


1. 黒褐色土 表土
2. 暗褐色土 ロームの微粒～径1cmのブロック少量含む。
3. 黒褐色土 黒色土・暗褐色土、全や粘質あり。
4. 明褐色土 新築フタラフットローム層上層。
5. 暗褐色土 黒褐色土中にロームの微粒～径5mmのブロック少量含む。
6. 明褐色土 黒褐色土中にロームの微粒～径3～5cmのブロック多く含む。
7. 暗褐色土 黒褐色土中にロームの微粒少量含む。
8. 明褐色土 黒褐色土中にロームの微粒～径3～5cmのブロック少量含む。
9. 暗褐色土 カマドの砂粒、焼土粒少量含む。

1. 暗褐色土 砂粒少量含む。
2. 灰褐色砂質土 砂粒中に黒褐色土粒と焼土粒少量含む。
3. 非暗褐色土 暗褐色土中に焼土粒多く含む。
4. 赤灰褐色砂質土 砂粒主体、焼土粒多く含む。(抄の焼熟化した部分)
5. 灰褐色砂質土 2層と同等だが、若干黒色土粒多い。
6. 明褐色土 微粒～径5mmのロームブロック中に黒褐色土粒少量含む。
7. 灰褐色砂質土 微粒～径5mmのロームブロック少量含む。
8. 暗褐色土 微粒～径5mmのロームブロック少量含む。
9. 明褐色土 ロームの微粒中に焼土少量含む。

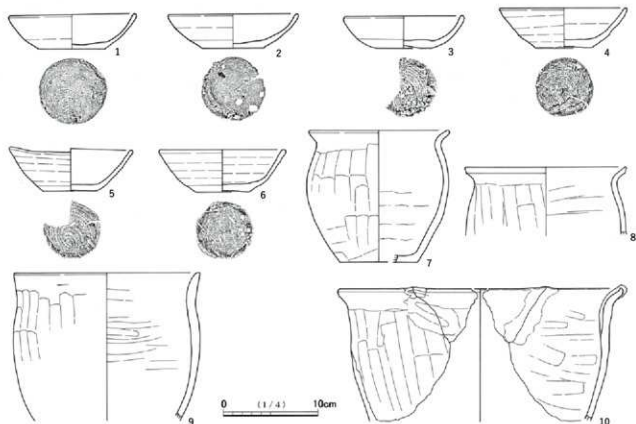


第36図 SI020



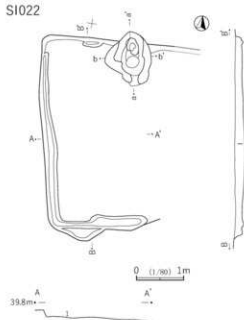
1. 埴輪色土 ローム細粒、白色粘土粒少量含む。
2. 赤褐色土 埴輪色土中に焼土粒・砂粒多く含む。
3. 明褐色土 ローム微粒層。
4. 埴輪色土 ローム微粒、焼土粒少量含む。
5. 赤褐色土 焼土粒+白色粘土粒。
6. 黒色土 炭化物粒中に焼土粒少量含む。
7. 埴輪色土 焼土粒+炭化物粒少量含む。
8. 灰褐色砂質土 埴輪色土+砂粒。
9. 埴輪色土 しまり弱い、覆瓦と思われる。

1. 埴輪色土 ローム微小粒や多く含む。
2. 埴輪色土 ロームの微粒～径5mmのアロップ+黒褐色土。貼床の可能性。
3. 黒褐色土 ロームの微粒～径1cmのアロップ主体。硬質。貼床の可能性。

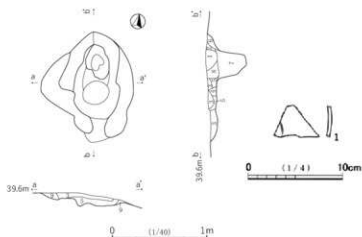


第37図 SI021

SI022

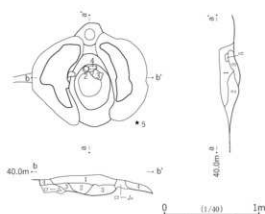
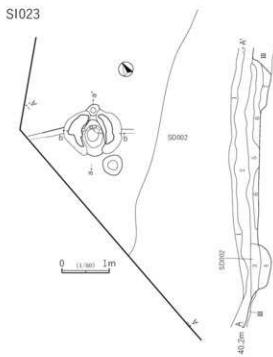


1. 埴間色土 微粒～径5mmのロームブロックやや多く、炭化物粒散在含む。



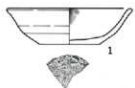
1. 埴間色土 ロームの微粒～径5mmのブロック多く、焼土粒少量含む。
2. 赤褐色土 埴間色土中に焼土粒多く含む。
3. 灰褐色土 ロームの微粒～埴間色土中に焼土粒多く含む。
4. 灰褐色土 2層と同様だが焼土粒少ない。
5. 黒色土 炭化物粒・焼土粒少量含む。
6. 灰褐色土 ロームの微粒～埴間色土中に焼土粒少量含む。
7. 埴間色土 ロームの微粒～径5mmのブロック多く含む。しまり強い。(焼土)系。
8. 赤褐色土 ロームの微粒～径5mmのブロック多く、焼土粒多く含む。
9. 明褐色土 ロームの微小粒中に埴間色土粒少量含む。

SI023

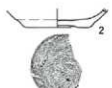


1. 埴間色土 黒色土(炭化物)粒・焼土粒やや多く含む。
2. 埴間色砂質土 黒褐色土・砂粒やや多く、焼土粒少量含む。
3. 赤褐色土 1層と同様だが、黒色土粒多い。
4. 埴間色土 ローム微小粒少量含む。
5. 焼土ブロック

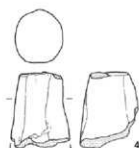
1. 黒褐色土 表土
2. 埴間色土 表土(テフラ粒少量含む。)
3. 埴間色土 テフラ・ローム粒少量含む。SI002覆土。
4. 埴間色土 ローム粒(径3～4mm)やや多く含む。SI002覆土。
5. 黒褐色土 微粒～径1cmのロームブロック・埴間色土粒少量含む。
6. 黒褐色土 黒褐色土粒やや多い。
7. 黒褐色土 微粒～径1cmのロームブロックやや多く含む。



0 (1/4) 10cm



0 (1/2) 5cm



第38図 SI022・SI023

き、底部がやや突出する。口縁部に油煙が付着する。2も同タイプの底部片である。3は口唇部がつまみ上げられる土師器甕である。4は支脚、5は小刀片と思われる。10世紀前半の所産であろう。

SI024 (第39図、図版17・34)

本調査区北東端272DR-14グリッド他に位置するが、北側が中世のSD002に切られる。主軸はN-1°-W、規模は南北方向で3.1m、深さ0.25mを測る。周溝は現存範囲で確認されるが、柱穴は検出されなかった。カマドは北壁に位置する。

遺物はカマド内及び周辺からの出土である。1・2は土師器杯で、体部が直線的に開く。9世紀第1四半期の所産であろう。3は足高台の付く杯で、混入品と思われる

2 土坑等

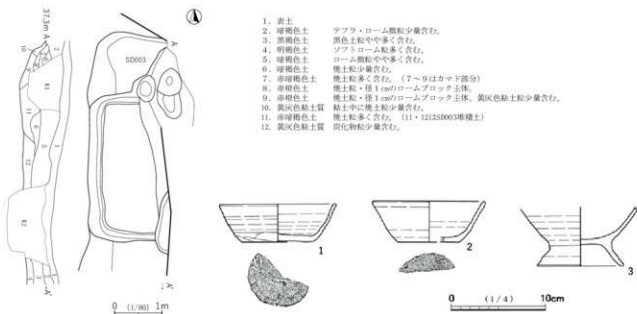
SK001 (第40図、図版17・34・38)

本調査区南東端の274DS-21グリッドに位置し、短軸1.50m、長軸1.72m、深さ0.60mの不整形円形を呈する。覆土はロームブロックをやや多く含み、埋め戻された可能性が高い。底面に炭化物が薄く堆積していた。図化した土器は覆土上層からの出土である。1は体部が直線的に開く土師器杯で、口縁部に油煙が付着する。2は墨書土器片で、「+」であろうか。3は須恵器の台付杯の底部片である。9世紀第2四半期と推定される。

SK003 (第40図、図版17・34・36・39)

本調査区南東端のSI001と重複し、SI001を切る。短軸1.08m、長軸1.68m、深さ0.35mの不整形丸長方形を呈する。

遺物は覆土下層から出土する。1～3は土師器杯である。1は体部が直線気味に開き、体部外面に「人」のような墨書がみられる。2は上げ底で、体部が内湾気味に開く。回転糸切り後周縁をヘラケズリする。口縁部に油煙が付着する。3は大型で口縁目が細かく残る。4は凝灰岩製砥石である。9世紀後半の所産である。



第39図 SI024

SK005 (第41図、図版17)

本調査区南東部の273DS-60グリッド他に位置する。短軸2.60m、長軸2.95m、深さ1.96mの不整形円形を呈し、断面は楕鉢状となる。覆土はロームブロックが多く含まれており、意図的に埋め戻された可能性が高い。奈良・平安時代の井戸状遺構とみられる。

SK006 (第41図、図版18)

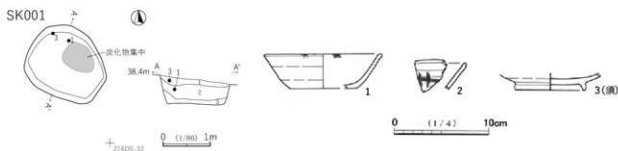
本調査区南東部の273DS-72グリッド他に位置し、短軸1.18m、長軸1.34m、深さ0.23mの不整形円形を呈する。覆土中に黄灰色砂や焼土・土師器小片が多く出土していることから、周辺の竪穴住居のカマド材等を廃棄した土坑と思われる。

SK007 (第41図、図版18)

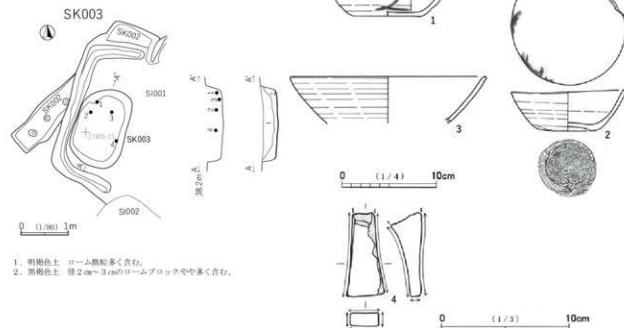
本調査区南東部の273DS-81グリッドに位置し、短軸1.00m、長軸1.05m、深さ0.34mの円形を呈する。遺物の出土はなかった。

SK008 (第41図、図版18)

SK007の北側に位置し、短軸1.70m、長軸1.90m、深さ0.60mの楕円形を呈する。覆土は人為的に埋め戻



1. 暗褐色土 ローム微粒少量含む。
2. 暗褐色土 ローム微粒やや多く、径1cmのロームブロック少量含む。
3. 暗褐色土 径1.5cmのロームブロック多く含む。



1. 明褐色土 ローム微粒多く含む。
2. 黒褐色土 径2cm～3cmのロームブロックやや多く含む。

第40図 SK001・SK003

される。土師器小片の出土はあるが、図示できる遺物はなかった。

SK009 (第41図、図版18・34)

本調査区南東部の273DS-91グリッドに位置し、短軸1.10m、長軸1.20m、深さ0.30mの不整形を呈する。1は土師器杯で、体部が内湾気味に開き、ロクロ目が細かく観察される。底部は全面手持ちヘラケズリが施される。体部に横位で「忠」が墨書される。9世紀第3四半期の所産である。

SK010 (第41図、図版18・19・34・36・38)

本調査区南西部の273DR-89グリッド他に位置し、多くの土坑が集中する。短軸1.50m、長軸1.80m、深さ0.63mの隅丸長方形形状を呈する。覆土はロームブロックを多く含み、人為的に埋め戻された可能性が高い。土器は覆土上層からの出土である。1・2が土師器杯で、1は体部が直線的に開き、回転糸切りされる。2の底部外面には「丈」が墨書される。3・4は土師器甕の口縁部で、口唇部がつまみ上げられる。9世紀後半のものと推定される。

SK011 (第42図、図版18・37)

本調査区南東部の273DR-50グリッドに位置し、短軸0.80m、長軸1.00m、深さ0.15mを測る楕円形を呈する。1は須恵器甕の口頸部で、口縁部が台形状に肥厚する。

SK015 (第42図、図版19・38)

本調査区南東部の273DR-59グリッドに位置し、短軸0.80m、長軸1.08m、深さ0.30mの楕円形を呈する。1は底部外面に「入」と思われる文字が墨書された土師器杯である。

SK032 (第42図、図版18)

本調査区中央部の272DR-82グリッドに位置し、中世井戸と推定されるSK031に切られる。短軸1.18m、長軸1.25m、深さ0.29mの不整な楕円形を呈する。遺物は比較的多く出土した。1は底部が突出し、体部が内湾気味に大きく開く土師器杯で、小皿に近いものである。3は灰釉陶器の壺で、胴部外面に軸が観察される。2は大型と思われる須恵器の甕、4は刀子、5は鉄釘である。

SK035 (第42図、図版19・39)

本調査区北部の東側緩斜面の272DR-12グリッド他に位置し、短軸2.80m、長軸3.25m、深さ2.25mの不整形を呈し、断面は擋鉢状である。覆土全体にロームブロックやローム粒を多く含み、埋め戻されたような状況である。遺物は土師器や須恵器の小片が多いが、図化できるものは1の滑石製勾玉のみである。比較的丁寧な作りで、両側穿孔となる。

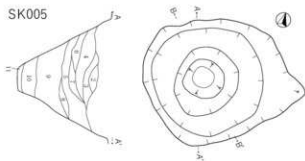
3 粘土採掘跡

SX005 (第43図、図版20・21・35)

本調査区中央部の東側緩斜面の272DR-73グリッド他に位置し、規模は短軸5.0m、長軸5.5m、深さ1.3m～2.1mである。緩斜面の北東側に開口し、南西側に壁が残る擋鉢状の落ち込みの底面は白色粘土層まで達する。南西壁には複数の横孔(SK049A～E)が検出された。各横孔の覆土は、SX005同様、白色粘土やロームブロックにより人為的に埋め戻されていたものが多い。SK049Cは底面に焼土と炭化物の堆積が確認された。

図化した土器は覆土上層からの出土である。1・2は土師器杯で、1は体部から底部全面に手持ちヘラケズリが施される。2は体部が直線的に開き、体部下端と底部周縁にヘラケズリが加えられる。底部外面

SK005



1. 暗褐色土 微粒～径1cmのロームブロック少量含む。
2. 明褐色土 ローム微粒主体。
3. 赤褐色土 粘土微粒全体に少量含む。
4. 暗褐色土 ローム微粒多く、径1cmのロームブロック少量含む。
5. 明褐色土 ローム微粒主体。
6. 暗褐色土 ややローム粒多く含む。
7. 暗褐色土 黒褐色土粒多く含む。
8. 暗褐色土 ローム微粒含む。
9. 明褐色土 微粒～径2cmのロームブロック主体。
10. 明褐色土 微粒～径5cmのロームのブロック主体。
11. 暗褐色土 ロームブロック主体。

SK006



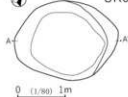
1. 赤褐色土 粘土粒・砂粒多く含む。
2. 黄灰色砂 微粒～径3cmの準化砂粒ブロックやや多く含む。
3. 赤褐色砂質土 準化砂粒主体。
4. 暗褐色土 微粒～径3cmの準化砂粒ブロックやや多く含む。
5. 暗褐色土 ローム微粒含む。

SK007



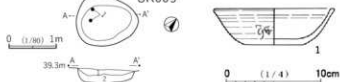
1. 明褐色土 ローム微粒やや多く含む。
2. 暗褐色土 ローム微粒含む。

SK008



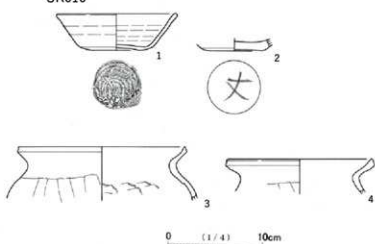
1. 暗褐色土 ローム微粒少量含む。
2. 明褐色土 ローム微粒多く含む。
3. 明褐色土 微粒～径1cmのロームブロック主体。
4. 明褐色土 微粒～径2cmのロームブロック主体。
5. 明褐色土 微粒～径2cmのロームブロック少量含む。
6. 暗褐色土 炭化物粒・ローム微粒少量含む。

SK009



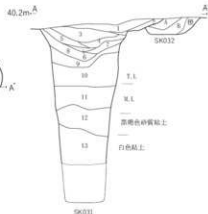
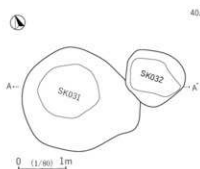
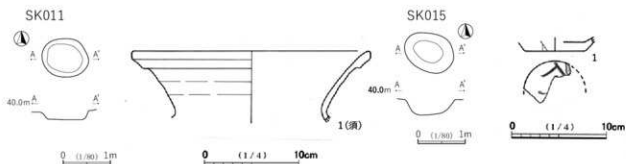
1. 暗褐色土 ローム微粒やや多く、粘土粒少量含む。
2. 暗褐色土 微粒～径1cmのロームブロックやや多く含む。

SK010



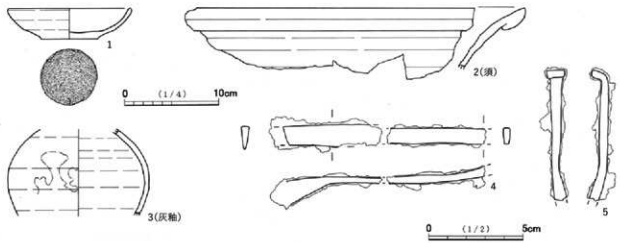
1. 黒褐色土 炭化物粒多く含む。
2. 暗褐色土 微粒～径1cmのロームブロック少量含む。
3. 明褐色土 ローム粒やや多く含む。
4. 暗褐色土 ローム粒含む。

第41図 SK005～SK010

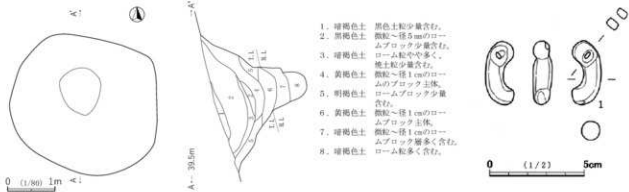


- A. 暗褐色土 微粒～径5mmのロームブロック少量含む。
- B. 暗褐色土 炭化物少量含む。
- 1. 暗褐色土 微粒～径1cmのロームブロック少量含む。
- 2. 灰褐色土 明褐色砂質粘土・ローム粒やや多く含む。
- 3. 暗褐色土 ローム粒やや多く含む。
- 4. 暗褐色土 ローム粒多く含む。
- 5. 明褐色土 微粒～径3cmのロームブロック多く含む。
- 6. 暗褐色土 ローム粒やや少ない。
- 7. 灰褐色土 やや細かいローム粒を含む。
- 8. 暗褐色土 ローム粒やや少ない。
- 9. 暗褐色土 ローム粒微塵を含む。
- 10. 明褐色土 微粒～径5cmのロームブロック多く含む。
- 11. 暗褐色土 微粒～径1cmのロームのブロック含む。
- 12. 暗褐色土 微粒～径1cmのロームブロック少量含む。
- 13. 灰褐色土 ロームブロック中に白色粘土粒少量含む。

SK032



SK035



- 1. 暗褐色土 褐色土粒少量含む。
- 2. 暗褐色土 微粒～径5mmのロームブロック少量含む。
- 3. 暗褐色土 ローム粒やや多く、ローム粒少量含む。
- 4. 黄褐色土 微粒～径1cmのロームのブロック主体。
- 5. 明褐色土 ロームブロック少量含む。
- 6. 暗褐色土 微粒～径1cmのロームブロック主体。
- 7. 暗褐色土 微粒～径1cmのロームブロック層多く含む。
- 8. 暗褐色土 ローム粒多く含む。

第42図 SK011・SK015・SK032・SK035

に「×」の線划がみられる。3は胴部に最大径を有する土師器甕である。

SX006 (第44図、図版21・36)

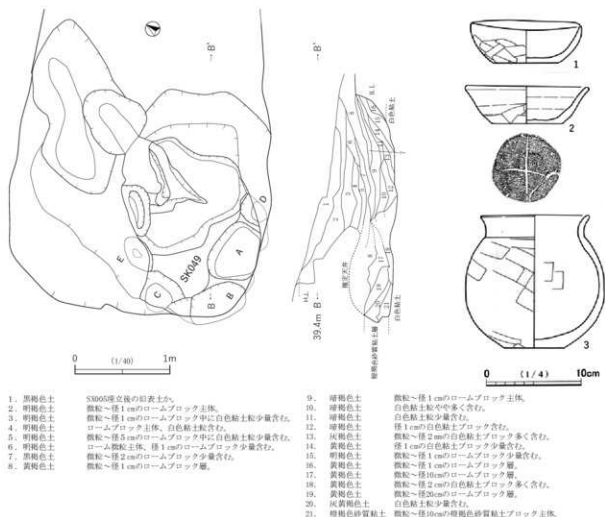
本調査区北東端の271DR-71グリッド他に位置し、規模は短軸9.0m以上、長軸13.0m以上、深さ1.7m～2.6mで、SX005同様、白色粘土層まで掘り下げられ、人為的な埋戻しと思われる。北端と南端の壁面に横孔(SK047、SK048A・B)が検出された。SD014・015は中世の空堀である。

1・2は覆土中からの出土である。1は体部が内湾気味に大きく開き、突出する底部が付くタイプであろう。2は二彩の小壺である。

4 遺構外出土遺物 (第45図、図版35)

1は口縁部が内屈する古墳時代後期の土師器杯、2はほぼ同時期の高杯脚部である。3は体部と底部の境に弱い稜が形成される盤状の杯である。内面にミガキが施され、内外面とも赤彩される。4は体部外面ヘラケズリ調整の杯で、底部外面に「大」の墨書がみられる。5はロクロ成形で、口径の底径の差が少ない杯である。3は8世紀初頭、4・5は8世紀後半と思われる。6・7は体部下端に手持ちヘラケズリが施される杯で、9世紀後半の所産であろう。8は体部がやや突出し、体部が直線的に開く杯で10世紀代、9は体部が内湾気味に開く。11世紀代に入る可能性もある。10・11は手捏ね土器である。

他に「矢」と係れた墨書土器が出土している。図版35に掲載した。



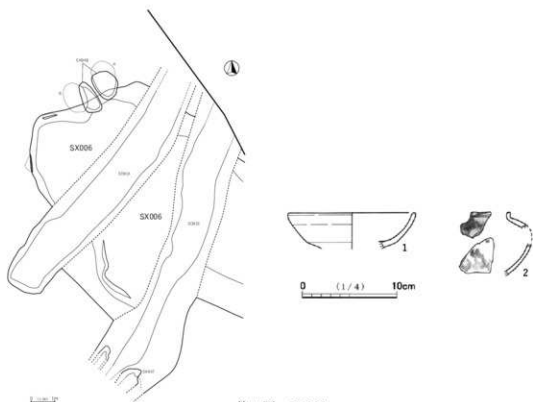
1. 黒褐色土
2. 明褐色土
3. 明褐色土
4. 明褐色土
5. 明褐色土
6. 明褐色土
7. 黒褐色土
8. 黄褐色土

SX005埋立後の印表士か。

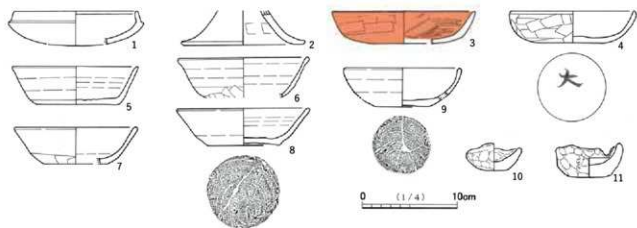
9. 明褐色土
10. 明褐色土
11. 明褐色土
12. 明褐色土
13. 灰褐色土
14. 黄褐色土
15. 明褐色土
16. 黄褐色土
17. 黄褐色土
18. 黄褐色土
19. 黄褐色土
20. 灰黄褐色土
21. 暗褐色砂質粘土

9. 微粒～径1cmのロームブロック主体。
10. 微粒～径1cmのロームブロック主体、白色粘土較りや多く含む。
11. 微粒～径1cmのロームブロック中に白色粘土較りや多く含む。
12. 微粒～径5cmのロームブロック中に白色粘土較りや多く含む。
13. 微粒～径2cmの白色粘土ブロック多く含む。
14. 微粒～径1cmの白色粘土ブロック少量含む。
15. 微粒～径1cmのロームブロック少量含む。
16. 微粒～径1cmのロームブロック層。
17. 微粒～径10cmのロームブロック層。
18. 微粒～径2cmの白色粘土ブロック多く含む。
19. 微粒～径20cmのロームブロック層。
20. 微粒～径1cmの白色粘土較りや多く含む。
21. 微粒～径10cmの暗褐色砂質粘土ブロック主体。

第43図 SX005



第44図 SX006



第45図 遺構外出土遺物

第4節 中世・近世

1 地山整形区画

いわゆる台地整形区画に類する区画であるが、本遺跡では斜面地も含むので、地山整形区画とした。これに伴う土坑についても本項で説明することとする。

SX003 (SK021～SK025) (第46図、図版22)

本調査区中央南西部の273DR-43グリッド他に位置する。短軸2.0m・長軸7.0m以上で、0.3m程の段差で南西部が低くなる。内部に5基の土坑(SK021～SK025)が検出された。

SK021は短軸0.85m、長軸0.93m、深さ0.30mの不整形円形を呈する。SK022は短軸1.42m、長軸1.45m以上、深さ2.05mで、南側に0.5m程オーバーハングする。覆土はロームブロック等主体で、ややしまりが弱い。遺物は出土しなかったが、中・近世土坑墓の可能性が考えられる。SK023～SK025は長軸1.5m前後の楕円形状を呈し、覆土はロームブロック主体である。

SX004 (SK039～SK045) (第46図、図版22・23・38)

本調査区北西部の272DQ-19グリッド他に位置し、幅2.7m～3.6m、長さ15m以上、深さ0.7m～1.2mの溝状の整形区画である。覆土はロームブロックや白色粘土を多く含み、埋め戻された状況である。深さは調査区境では1.2m以上あるが、中央部分では0.6m程と浅く、北東側では再び1.2mと深くなる。

SK039はSI020のカマド先端部を切る。規模は短軸0.80m、長軸1.00m、深さ0.77mの不整形円形を呈する。SK040はSK039の北東に近接する。規模は短軸0.70m、長軸1.10m、深さ1.00mを測る。SK041はSK040の北4m程に位置する。規模は短軸0.72m、長軸0.76m、深さ1.10mである。覆土はSX004覆土よりしまりが弱い。SK042はSK041の北側に接する。規模は短軸0.52m、長軸1.34m、深さ0.90mである。SK043はSK042の東側に位置し、規模は短軸0.74m、長軸1.48m、深さ0.49mの不整形円形を呈する。SK044はSX004の北西側肩部にかかる。短軸1.00m、長軸1.1m以上、深さ0.52mを測る。覆土はロームブロック主体である。SK045はSK044の1.0m程北東に位置する。短軸0.60m、長軸1.16m、深さ1.03mである。

SX004は広い溝状を呈しながら、北東のSX006に連続するようにみえる。

2 土坑等

SK002 (第46図、図版8)

本調査区南西端のSI001を切る。幅0.6m、長さ1.9m以上、深さ0.24m程の溝状で、底面にピットが並ぶ。南東尾根筋から山上の出入口施設の櫓の布掘りの可能性も考えられる。

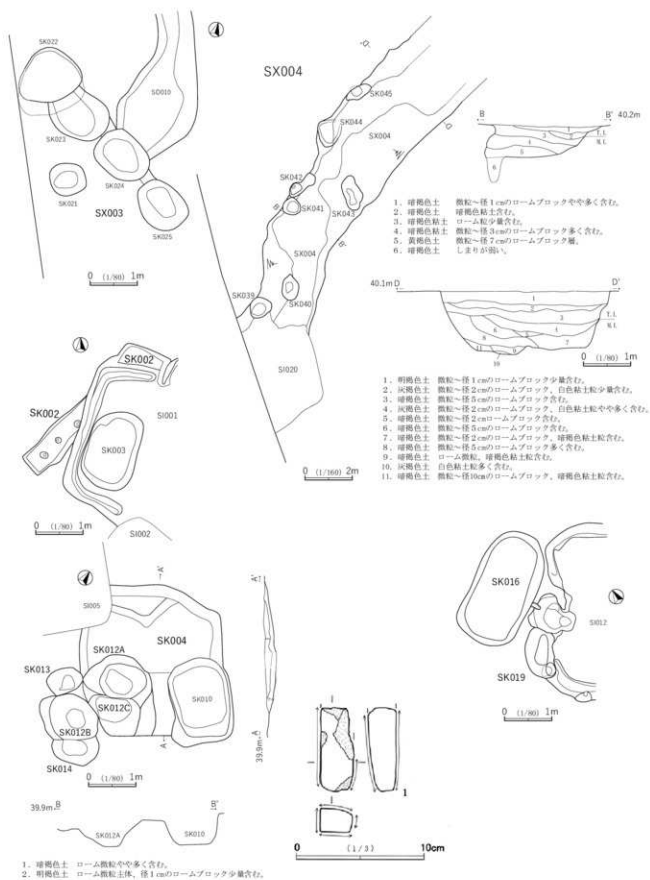
SK004・SK012 (A,B,C)・SK013・SK014 (第46図、図版23)

SK004は本調査区南西部の273DR-87グリッド他の位置し、短軸3.04m、長軸3.20m、深さ0.20mの不整形方形の浅い掘り込みである。奈良・平安時代の土坑SK010を切り、中世土坑SK012に切られる。SK012は重複する3基の土坑である。Aは短軸1.0m以上、長軸1.50m、深さ0.52m、Bは短軸0.9m以上、長軸1.75m、深さ0.50m、Cは短軸1.30m、長軸1.2m以上、深さ0.43mを測る。Iは砂岩製砥石である。

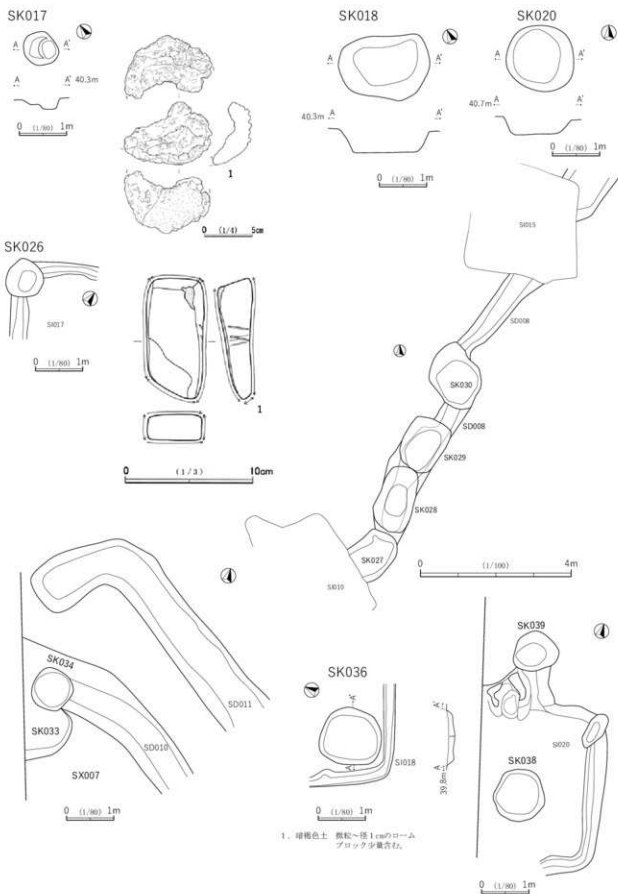
SK013は短軸0.50m、長軸0.78m、深さ0.26mの不整形円形、SK012と重複するSK014は、短軸0.65m以上、長軸1.00m、深さ0.26mを測る。

SK016・SK019 (第46図、図版23・37・38)

本調査区中央部の273DR-38他に位置し、SI012の西側に近接する。SK016は短軸1.24m、長軸2.50m、深さ0.65mの長楕円形を呈する。覆土はロームブロック・ローム粒を多く含む。細片のため写真のみの掲載



第46図 SX003・SX004・SK002・SK004・SK012～SK014・SK016・SK019



第47図 SK017・SK018・SK020・SK026・SK027—SK030・SK033・SK034・SK036・SK038・SK039

であるが、中・近世天目茶碗片（2）が出土した。SK019はSI012のカマド脇に掘られ、短軸0.65m、長軸0.9m、深さ0.28mと小型である。

SK017・SK018（第47図、図版24・41）

本調査区中央部南寄りに位置する。SK017は短軸0.72m、長軸0.78m、深さ0.10mの不整形円形を呈し、中・近世と思われる1の椀型滓が出土した。SK018は短軸1.30m、長軸1.95m、深さ0.41mの不整形円形を呈する。覆土は比較的しまりのないローム粒・ロームブロック主体で、人為的に埋められている。

SK020（第47図、図版24・36）

本調査区中央部273DR-15グリッドに位置する短軸1.37m、長軸1.47m、深さ0.36mの円形土坑である。

SK026（第47図、図版24・39）

本調査区中央部のSI017の北西隅を切る。短軸0.77m、長軸0.81m、深さ0.21mの略円形を呈する。覆土には焼土が多く含まれる。1は凝灰岩製の砥石である。

SK027・SK028・SK029・SK030（第47図、図版27）

本調査区南西部の緩斜面の273DR-69・76グリッドに位置し、SD008の溝に沿う形で4基の土坑が検出された。SK027～029は連続し、SK030は溝SD008がやや屈折する地点に掘り込まれる。4基の土坑の規模は、短軸1.0m前後、長軸1.5m前後、深さ0.2m程である。

SK031（第42図、図版24）

本調査区中央部のSD001とSX005の間に位置し、SK032を切る。短軸2.18m、長軸2.50m、深さ3.90mの略円形を呈し、壁は垂直に近い。覆土は下層がロームブロック主体、上層が暗褐色土主体で、人為的に埋められたようである。形状・深さ等から中・近世の井戸と想定した。

SK033・SK034（第51図、図版22）

本調査区中央部の西側境界で、SX007及びSD010の北西部に重複する。SK033は長軸1.30m以上、短軸0.20mの浅い不整形を呈し、北側はSK034に切られる。SK034は短軸0.82m、長軸0.86m、深さ0.90mの円形で、中・近世土坑墓の可能性があろう。

SK036（第47図、図版15）

本調査区北東部のSI018を切る。短軸1.20m、長軸1.26m、深さ0.70mの不整形円形を呈し、形状等から土坑墓の可能性が考えられる。

SK038・SK039（第47図、図版24）

奈良・平安時代のSI020を切る。SK038は短軸1.05m、長軸1.13m、深さ0.46mの不整形円形を呈する。形状等から土坑墓と考えられる。SK039は短軸0.80m、長軸1.00m、深さ0.77mの不整形円形である。SI020の北東コーナーに掘り込みがあり、北東に続く中世地山整形区画SX0044に関連する土坑と考えられる。

3 溝・堀・帯曲輪等

SD001（第48図、図版25・38）

本調査区中央部に位置し、SI019を切る。調査区外の曲輪Ⅰ・Ⅲを巡り、曲輪Ⅳを区画する空堀の一部で、規模は長さ25m以上、上面1.5m～2.7m、底面0.3m～0.8m、深さ0.6m～0.85mである。覆土は下層がロームブロック主体、上層は暗褐色土主体である。1は近世後期瀬戸美濃陶器灰軸小皿、2は中世末～近世初頭の瀬戸美濃陶器灰軸鉢である。

SA001（第48図）

曲輪Ⅰの東側を巡る土塁で、規模は幅20m、長さ18m以上、高さ0.4m～0.5mである。上層確認調査の10トレンチで断面を確認した(第 図)。土塁部分はソフトローム層まで、曲輪Ⅰ内は白色粘土層以下まで掘り下げ、現状では0.4m程を盛り上げて土塁としているが、後世に削平された可能性が高い。

SD002 (第48図、図版25)

本調査区北東部271DQ・271DR・272DRグリッドに位置し、調査区外でSD001とつながり、曲輪Ⅳと腰曲輪Aを区画するものと思われる。北東側で一部形状に突出する。規模は長さ45m以上、上面1.8m～2.3m、底面0.5m、深さ0.8mを測る。覆土はローム粒・ロームブロックを多く含む暗褐色土で埋め戻されている。1は凝灰岩製砥石、2は寛永通宝で、18世紀前半初鑄のものと思われる。

SD003 (第49図、図版25・38)

本調査区北東境界に沿う272DRグリッドに位置し、規模は幅2.0m以上・長さ18m以上・深さ0.6mである。確認トレンチの5T・8Tで、連続する平場が確認できたため、帯曲輪状のものと推測した。築城時に緩斜面に段差を付け、さらにその外側を急傾斜に造成したことが推測される。写真のみだが2の中・近世天目茶碗破片を掲載した。

SD004・SD006・SD007 (第49図、図版25～27・39)

本調査区南東部273DR・DS、274DR・DSグリッドに位置し、コの字状に屈曲する。規模は長さ50m以上、上面1.0m～2.0m・底面0.3m～0.5m、深さ0.2m～1.0mである。南西側のSD007との接合部での屈曲は折り歪みを呈し、東側の屈曲部では、径1.0m～2.0m、深さ1.0m程の3基以上の穴が連続しており、堀内障壁の可能性も考えられる。遺物は、縄文土器片や土師器片が多く出土したが、図化した1は凝灰岩製砥石片である。

SD006は直角に折れ、南西側でSD007が分岐し、SD004に合流する。規模は長さ23m、上幅0.6m～1.2m・底幅0.4m～0.5m、深さ0.4m～0.5mである。SD007は、SD006から分岐してSD004に合流する。規模は長さ9.0m程、上幅0.6m～1.4m・底幅0.5m程、深さ0.3mである。SD006・007は排水溝的な機能が想定され、近世以降の畑に伴う溝の可能性もある。

SD005 (第51図、図版26・27・35・38・39)

本調査区南西境界沿い、273DR・274DR・274DSグリッドに位置し、規模は長さ57m以上、上幅2.0m以上、底幅1.0m以上、深さ0.8m前後である。底面は随所に段差がみられる。覆土はローム粒を多く含み、表土と覆土の間には宝永テフラ層が確認されたことから、18世紀初めには埋め戻されていたことが確認できる。地表面観察では、曲輪Ⅰの南部から曲輪Ⅴの南西部に帯曲輪状の平場が存在しており、その延長とみられる。

図示した遺物は、凝灰岩製の砥石である。

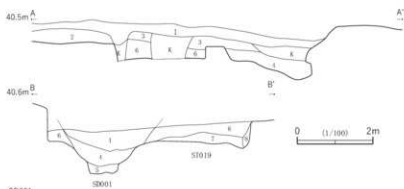
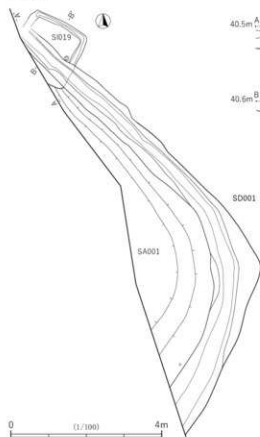
SD008 (第51図、図版25・37・41)

273DRグリッドに位置し、台地中央部から屈曲して南西緩斜面を下り、SD005に至る。規模は長さ26m、上幅0.7m～1.3m、下幅0.3m～0.8m、深さ0.2mである。南側でSI015を切り、SK027～30が掘り込まれる。これらの土坑群はSD004同様、堀内障壁の可能性がある。図示した遺物は塀型滓である。

SD009・SD012 (第51図、図版28・35)

SD009は腰曲輪Dの上の西側斜面上位に位置し、規模は長さ28m以上、幅4.0m以上である。SD012はの規模は、長さ12m、上幅1.0m・底幅0.7m、深さ0.2mである。山上と腰曲輪Dを繋ぐ道の可能性が考えられる。

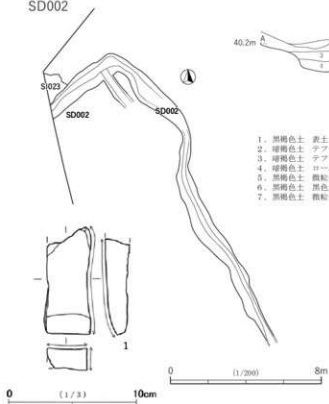
SD001



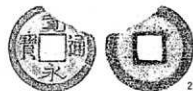
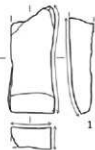
1. 黒色土 表土
2. 明褐色土 新期テフラ層
3. 暗褐色土 黒色土、テフラ含む
4. 暗褐色土 微粒～径1cmのロームブロック少量含む
5. 暗褐色土 ローム多く含む
6. 暗褐色土 微粒～径1cmのロームブロック少量含む。(6×7はS1019覆土)
7. 暗褐色土 微粒～径1cmのロームブロックやや多く含む
8. 明褐色土 ローム微粒主体



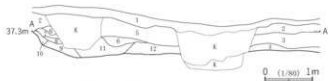
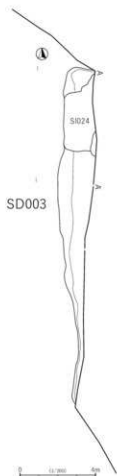
SD002



1. 黒褐色土 表土
2. 暗褐色土 テフラ粒少量含む
3. 暗褐色土 テフラ・ローム粒少量含む
4. 暗褐色土 ローム粒 (径3～4mm) やや多く含む
5. 黒褐色土 微粒～径1cmロームブロック少量含む
6. 黒褐色土 黒色土粒やや多い
7. 黒褐色土 微粒～径1cmのロームブロックやや多く含む



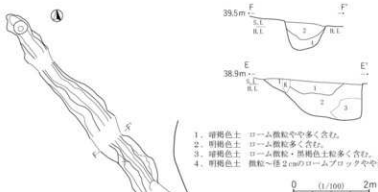
第48図 SD001・SD002



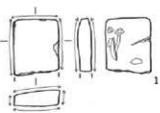
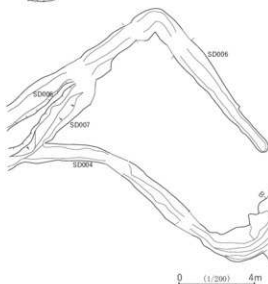
1. 黒褐色土 表土
2. 暗褐色土 テフラ・ローム微小粒少量含む。
3. 暗褐色土 黒色土粒やや多く含む。
4. 明褐色土 ソフトローム粒含む。
5. 暗褐色土 ローム微粒やや多く含む。
6. 暗褐色土 焼土粒少量含む。
7. 赤褐色土 焼土粒含む。
8. 赤褐色土 焼土粒・焼土ブロック含む。
9. 赤褐色土 焼土粒・焼土ブロック・黄灰色粘土粒少量含む。
10. 黄灰色粘土質 粘土中に焼土粒少量含む。
11. 赤褐色土 黄灰色粘土粒・焼土粒多く含む。炭化物粒少量含む。
12. 黄灰色粘土質 炭化物粒少量含む。



1. 暗褐色土 ローム微粒多く含む。
2. 明褐色土 ローム粒多く含む。
3. 明褐色土 径1cmのロームブロック少量含む。



1. 暗褐色土 ローム微粒やや多く含む。
2. 明褐色土 ローム微粒多く含む。
3. 暗褐色土 ローム微粒・黒褐色土粒多く含む。
4. 明褐色土 微粒～径2cmのロームブロックやや多く含む。



1. 暗褐色土 炭化物粒多く含む。
2. 暗褐色土 炭化物粒少量含む。
3. 暗褐色土 炭化物粒微量含む。
4. 明褐色土 ローム微粒主体。
5. 明褐色土 径1～2cmのロームブロックやや多く含む。

第49図 SD003・SD004・SD006・SD007

SD010・SD011 (第51図、図版28・35・38)

本調査区南西部境界付近の273DRグリッドに位置する。SD010はSX007の東側を弧状に囲み、SX003に切られる。規模は長さ12m以上、上幅0.8m～1.95m、底幅0.4m～1.4m、深さ0.25mを測る。1は覆土上層で出土した塚産播鉢で、19世紀代とみられる。SD011はSD010の東側をコの字状に囲むように掘り込まれ、SX003に切られる。規模は上幅1.2m、底幅0.8m前後、深さ0.45mである。

SD013 (第51図、図版23)

272DQ-18グリッド他に位置し、規模は長さ10m以上、上幅0.6m～1m、底幅0.25m、深さ0.25mである。SX006が埋められた後に掘られた空堀SD015に連続する溝の可能性はある。

SD014・SD015 (第50図、図版28)

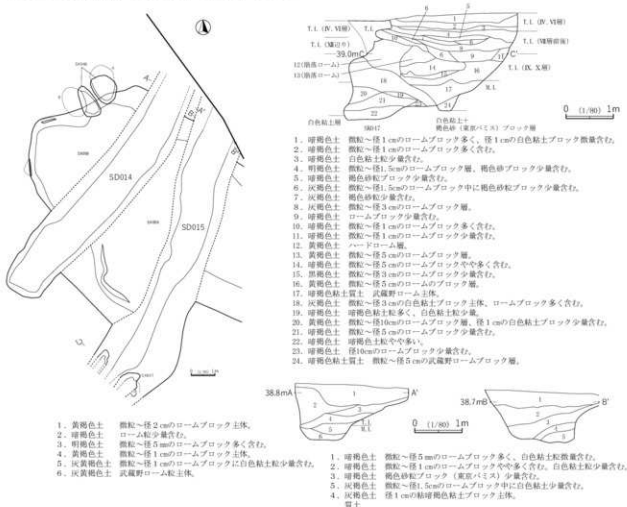
本調査区北東端の271DR・DSグリッドに位置する。SD014の規模は長さ12m、幅2.0m以上、深さ1.2mである。SD015はSD014の南東側に平行する溝で、長さ13m、幅2.0m以上・深さ1.0m～2.0mを測る。

SD017 (第11図、図版7)

本調査区中央部北寄りの東側斜面上位の平場である。30トレンチで確認された。

SX007 (第51図、図版28)

SD010の内側の若干の高まりで、規模は短軸3.0m以上・長軸8.0m以上である。14トレンチ西側の現地表面に砥石・茶臼・五輪塔・経石などが集積されていた。1～4は石硯、5は砥石、6は茶臼の上白部片、7は固定式研磨台、8は五輪塔の水輪片である。

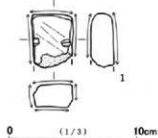


第50図 SD014・SD015

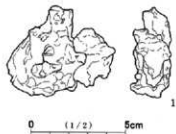
SD008



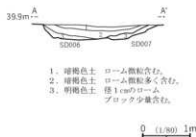
SD005



SD008



SD006

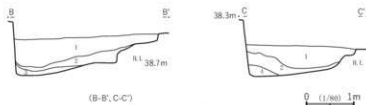


SD005



1. 暗褐色土 ローム散粒主体。
2. 暗褐色土 ローム散粒やや多く含む。
3. 暗褐色土 散粒～径1cmのロームブロック多く含む。

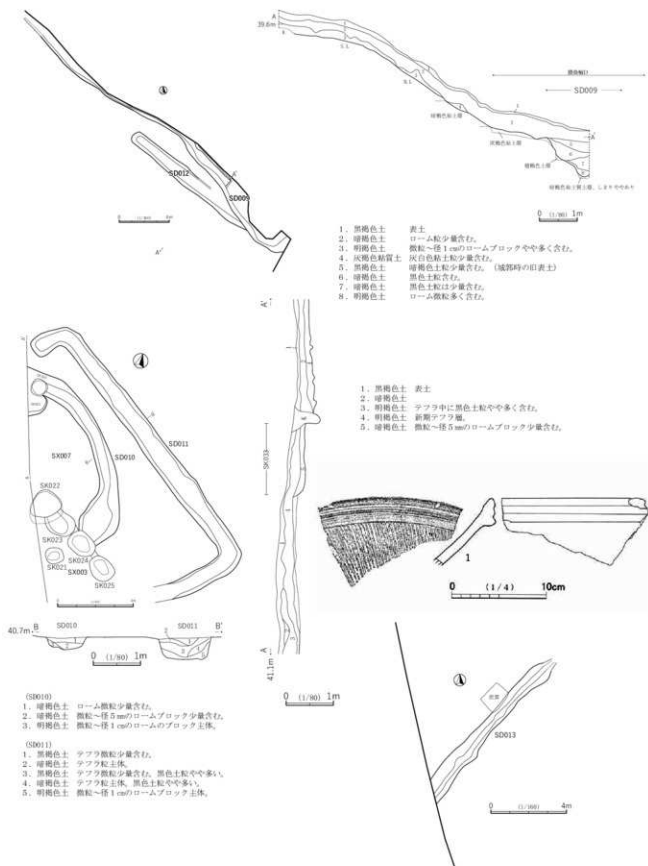
SD005



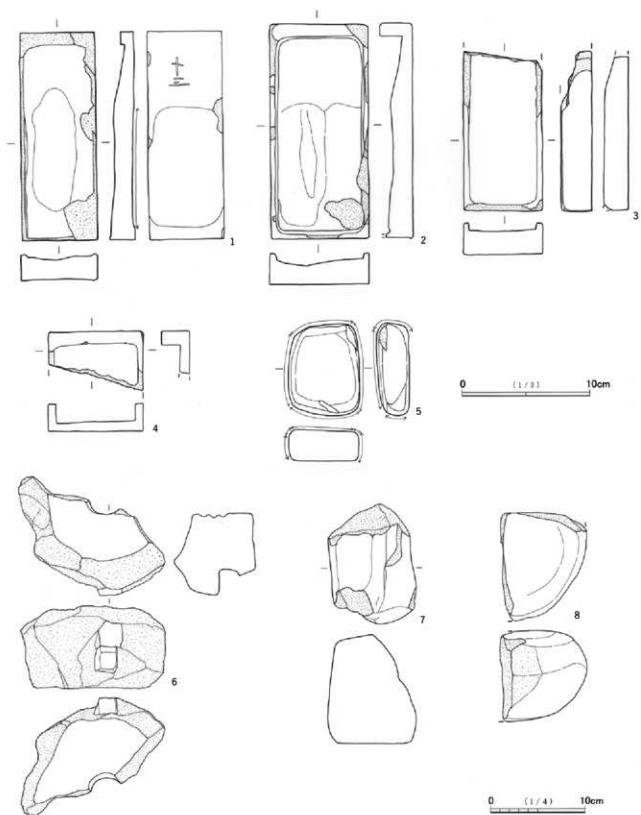
(B-B', C-C')

1. 暗褐色土 ローム散粒主体。
2. 暗褐色土 ローム散粒やや多く含む。
3. 灰暗褐色土 武蔵野ローム主体、ローム粒少量含む。
4. 灰褐色粘質土 武蔵野ローム。

第51図 SD005・SD008



第52図 SD009～SD013・SX007



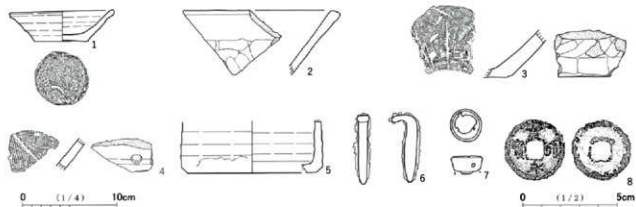
第53図 SX007出土遺物

4 遺構外出土遺物

1はカワラケの小皿で、体部が外反気味に開く。2は内耳鍋または播鉢の体部片、3は常滑系の片口鉢と思われる。4は瀬戸美濃の鉄軸播鉢、5は瀬戸美濃の灰軸筒形香炉である。1～4は15世紀後半～16世紀代、5は17世紀～18世紀頃であろう。

6は鉄釘、7はキセル火皿部、8は17世紀後半初鑄の寛永通宝である。

外に、表面採集や上層確認調査時の表土中や表土除去後に、瀬戸美濃灰軸碗・皿類や肥前染付碗など、18世紀代主体の陶磁器破片が少数出土している。



第54図 遺構外出土遺物

第3表 銭貨観察表

出土遺構等	棟号	図版	番号	銭貨名	書体	初鑄年		計測値 (単位: mm)						重量 (g)	備考
						和暦	西暦	縁外径	縁内径	郭外径	郭内径	縁厚	肌厚		
SD002	48	41	1	寛永通寶	真	元文3	1738	27.35	18.00	7.40	6.20	1.00	0.75	1.57	出羽国秋田川尻村上野鑄造か
遺構外	54	41	8	寛永通寶	真	寛永14	1673	24.50	19.50	7.80	6.30	1.30	0.80	2.75	272DQ-49。表面・縁とも腐食顯著、越後国高田鑄造か。

鑄造比定地は、小川浩編 1972「寛永通寶錢譜」日本古銭研究会 を主に参考とした。

第4表 古墳時代末～平安時代土器観察表

通標番号	神田	図順	図順番号	種類	形状	計測値(cm)		適存率(%)	色 調		胎成	調 査		備 考	
						口径	底径		高さ	内面		外面	内面		外面
SH001	19	31	1	土師器	杯	12.4	8.0	3.2	褐色	褐色	良好	ナデ	ナデ	同軸赤切り、短縁 手持ちヘラケズリ	口縁部施磨片着 灯明皿
SH001	19	31	2	土師器	杯	11.3	5.5	4.3	褐色	褐色	良好	ナデ	ナデ	ナデ	口縁部施磨片着 灯明皿
SH001	19	31	3	土師器	杯	11.2	6.0	5.1	におい褐色	におい褐色	良好	ナデ	ナデ	ナデ	口縁部施磨片着 灯明皿
SH001	19	31	4	土師器	杯	(12.8)	(6.0)	(4.8)	におい黄褐色	におい黄褐色	良好	ナデ	ナデ	ナデ	口縁部施磨片着 灯明皿
SH001	19	31	5	土師器	杯	9.9	6.3	3.1	褐色	褐色	良好	ナデ	ナデ	ナデ	底蓋黒書 文字不明、内面施磨
SH001	19	38	6	土師器	杯	(11.5)	(6.6)	(3.4)	におい黄褐色	におい黄褐色	良好	ナデ	ナデ	ナデ	口縁部施磨片着
SH001	19	31	7	土師器	高台付杯	12.8	9.0	4.9	におい褐色	におい褐色	良好	ナデ	ナデ	ナデ	口縁部施磨片着
SH002	19	36	1	土師器	杯	-	6.5	11.3	褐色	におい黄褐色	良好	ナデ	ナデ	ナデ	
SH002	19	36	2	須恵器	甕	-	-	-	灰青色	灰青色	良好	ナデ	ナデ	ナデ	
SH002	19	36	3	須恵器	甕	-	-	-	におい黄褐色	灰青色	良好	ナデ	ナデ	ナデ	須恵器染の磨片着と須恵器台付 杯の底蓋が施磨
SH003	20	31	1	土師器	杯	11.6	7.0	4.7	褐色	明赤褐色	良好	ナデ	ナデ	ナデ	口縁部施磨片着 灯明皿
SH004	22	31	1	土師器	杯	12.4	5.6	4.6	90	明赤褐色	良好	ナデ	ナデ	ナデ	
SH004	22	31	2	土師器	甕	-	6.6	(15.3)	60	明赤褐色	良好	ナデ	ナデ	ナデ	
SH004	22	-	3	土師器	甕	-	-	(10.9)	10	褐色	良好	ナデ	ナデ	ナデ	
SH005	22	31	1	土師器	杯	11.5	-	5.7	100	におい褐色	良好	ナデ	ナデ	ナデ	
SH005	22	31	2	土師器	杯	(11.4)	-	(6.8)	40	におい褐色	良好	ナデ	ナデ	ナデ	
SH005	22	31	3	土師器	甕	13.6	-	(4.4)	20	暗褐色	良好	ナデ	ナデ	ナデ	
SH005	22	31	4	土師器	甕	(18.0)	-	(6.3)	20	灰褐色	良好	ナデ	ナデ	ナデ	
SH007	24	31	1	土師器	杯	(13.2)	6.7	4.3	60	におい黄褐色	良好	ナデ	ナデ	ナデ	同軸赤切り、短縁 手持ちヘラケズリ
SH007	24	31	2	土師器	杯	(13.0)	(6.4)	3.7	40	明赤褐色	良好	ナデ	ナデ	ナデ	手持ちヘラケズリ
SH007	24	31	3	土師器	杯	-	5.8	(2.9)	20	におい黄褐色	良好	ナデ	ナデ	ナデ	同軸赤切り、短縁
SH007	24	36	4	須恵器	甕	-	-	-	-	黄灰色	良好	ナデ	ナデ	ナデ	内面施磨片着
SH007	24	36	5	須恵器	甕	-	-	(16.6)	10	におい黄褐色	良好	ナデ	ナデ	ナデ	内面施磨片着
SH007	24	31	6	須恵器	甕	-	14.4	(4.0)	10	明赤褐色	良好	ナデ	ナデ	ナデ	内面施磨片着

産地番号	検出回数	検出箇所	種類	形状	計測値(mm)			保存率(%)	色調		断片(含有物)	構成	調整			備考	
					口径	底径	高さ		内面	外面			内面	外面	底面		
S013	31	36	2	土師器	甕	(21.3)	-	[12.5]	20	黒褐色	内面	良好	ヨコナズリ ナデ	ヨコナズリ ヘラケズリ	-	-	
S013	31	32	3	土師器	甕	(19.4)	-	[6.5]	20	褐色	褐色	良好	ナデ	ヘラケズリ	-	内面黒色剥離	
S014	31	32	1	土師器	杯	(13.5)	6.5	4.0	50	赤褐色	赤褐色	良好	ナデ	同軸糸切り、黒調 ヘラケズリ	-	砂粒等の混入増多	
S014	31	-	2	土師器	杯	-	5.5	[1.4]	30	赤褐色	赤褐色	良好	ナデ	ナデ	-		
S014	31	38	3	土師器	杯	-	(6.6)	[2.0]	20	赤褐色	赤褐色	良好	ナデ	ナデ	-	底面外周黒書「〇」の二部小	
S014	31	38	4	土師器	杯	-	-	-	-	褐色	褐色	良好	-	-	-	底面外周黒書「一」	
S014	31	36	5	土師器	杯	-	-	-	20	黒色	黒色	良好	-	-	-	底面外周黒書「一」 混入	
S014	31	36	6	土師器	高杯	(21.6)	-	[4.9]	20	黒色	赤褐色	良好	ナデ	ナデ	-	内面黒色剥離	
S014	31	37	7	須恵器	甕	(28.0)	-	[7.2]	20	灰褐色	灰褐色	良好	ヨコナズリ ヨコナズリ	ヨコナズリ ヨコナズリ	-	底面黒色剥離	
S014	31	36	8	土師器	甕	(17.9)	-	[4.3]	20	赤褐色	赤褐色	良好	ナデ	ナデ	-	底面外周赤系、内面黒色剥離	
S014	31	-	9	土師器	甕	-	(17.0)	[6.8]	10	黒赤褐色	黒赤褐色	良好	ナデ	ナデ	-	黒色	
S015	32	32	1	土師器	杯	13.2	7.0	4.3	90	褐色	褐色	良好	ナデ	ナデ	黒調	内面黒色剥離	
S015	32	32	2	土師器	杯	15.3	5.6	5.1	90	赤褐色	赤褐色	良好	ナデ	ナデ	黒調	内面黒色剥離	
S015	32	32	3	土師器	高台付杯	12.4	6.5	5.1	100	黒色	黒色	良好	ナデ	ナデ	黒調	内面黒色剥離	
S015	32	32	4	土師器	杯	12.8	6.6	5.5	80	明赤褐色	明赤褐色	良好	ナデ	ナデ	黒調	内面黒色剥離	
S015	32	32	5	土師器	杯	14.7	6.6	4.9	60	褐色	褐色	良好	ナデ	ナデ	黒調	内面黒色剥離	
S015	32	32	6	土師器	杯	(18.6)	(8.0)	7.0	20	赤褐色	赤褐色	良好	ナデ	ナデ	黒調	自然黒/内面、底面内面見込み	
S015	32	32	7	須恵器	長頸瓶	-	7.2	(12.3)	50	灰白色	灰白色	良好	ナデ	ナデ	黒調	自然黒/内面、底面内面見込み	
S015	32	33	8	土師器	甕	15.0	(6.6)	15.0	90	明赤褐色	明赤褐色	良好	ナデ	ナデ	黒調	内面黒色剥離	
S015	32	33	9	土師器	甕	17.6	7.4	18.4	95	赤褐色	赤褐色	良好	ナデ	ナデ	黒調	内面黒色剥離	
S015	32	33	10	土師器	甕	18.4	8.0	17.1	90	赤褐色	赤褐色	良好	ナデ	ナデ	黒調	内面黒色剥離	
S015	32	33	11	土師器	甕	20.8	-	[22.5]	30	灰褐色	灰褐色	良好	ナデ	ナデ	黒調	内面黒色剥離	

産地番号	林分	調査	樹高	樹形	幹周(㎝)		腐朽度(%)	色調		断片(含有物)	調整		備考	
					口径	直径		内面	外面		内面	外面		底節
S015	32	33	12	土俵型	22.0	-	[5.9]	赤褐色	赤褐色	石灰・長石・砂粒	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ヘラナズリ	-	外面炭化剥離
S015	32	33	13	土俵型	-	(12.4)	[9.6]	赤褐色	赤褐色	石灰・長石・砂粒	ナデ	ナデ	-	五孔、底部内面炭化剥離
S016	33	33	1	土俵型	-	(12.0)	[6.2]	赤褐色	赤褐色	石灰・長石・砂粒	ナデ	ナデ	石灰・赤切り	内面一部炭化剥離
S016	33	33	2	土俵型	15.4	-	[4.9]	赤褐色	赤褐色	石灰・長石・砂粒	ナデ	ナデ	-	
S017	33	36	3	土俵型	(10.9)	-	[4.2]	赤褐色	赤褐色	石灰・長石・砂粒	ナデ	ナデ	-	
S018	34	33	1	土俵型	(12.7)	(6.4)	4.1	赤褐色	赤褐色	石灰・長石・砂粒	ナデ	ナデ	手持ちヘラナズリ	内外炭化剥離
S018	34	33	2	土俵型	(12.3)	6.5	3.9	赤褐色	赤褐色	石灰・長石・スコリア・砂粒	ナデ	ナデ	静止赤切り、炭化	
S018	34	33	3	土俵型	-	6.3	[2.9]	赤褐色	赤褐色	石灰・長石・砂粒	ナデ	ナデ	手持ちヘラナズリ	
S018	34	33	4	土俵型	-	7.5	[3.4]	赤褐色	赤褐色	石灰・長石・スコリア・砂粒	ナデ	ナデ	全面手持ちヘラナズリ	
S018	34	-	5	土俵型	-	5.8	[1.4]	赤褐色	赤褐色	石灰・長石・スコリア・砂粒	ナデ	ナデ	石灰・赤切り、炭化	
S018	34	33	6	土俵型	-	7.5	[3.8]	赤褐色	赤褐色	石灰・長石・スコリア・砂粒	ナデ	ナデ	石灰・赤切り、炭化	
S018	34	33	7	頭蓋型	-	14.1	[9.0]	赤褐色	赤褐色	石灰・長石・砂粒	ナデ	ナデ	石灰・赤切り、炭化	
S018	34	37	8	頭蓋型	-	-	-	赤褐色	赤褐色	石灰・長石・砂粒	ナデ	ナデ	石灰・赤切り、炭化	
S018	34	33	9	土俵型	20.0	-	[7.2]	赤褐色	赤褐色	石灰・長石・スコリア・砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ	-	
S018	34	33	10	土俵型	(15.5)	-	[7.1]	赤褐色	赤褐色	石灰・長石・スコリア・砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ	-	
S019	35	-	1	土俵型	(13.0)	(7.0)	4.1	赤褐色	赤褐色	石灰・長石・スコリア・砂粒	ナデ	ナデ	ヘラナズリ	
S019	35	38	2	土俵型	-	-	-	赤褐色	赤褐色	石灰・長石・スコリア・砂粒	ナデ	ナデ	-	体部外炭化、文字不明
S019	35	38	3	土俵型	-	-	-	赤褐色	赤褐色	石灰・長石・スコリア・砂粒	ナデ	ナデ	-	体部外炭化、文字不明
S020	36	33	1	土俵型	(13.0)	6.9	4.5	赤褐色	赤褐色	石灰・長石・スコリア・砂粒	ナデ	ナデ	全面手持ちヘラナズリ	
S020	36	33	2	土俵型	(12.8)	6.0	3.9	赤褐色	赤褐色	石灰・長石・スコリア・砂粒	ナデ	ナデ	石灰・赤切り、炭化剥離	
S020	36	33	3	土俵型	-	-	-	赤褐色	赤褐色	石灰・長石・スコリア・砂粒	ナデ	ナデ	石灰・赤切り、炭化剥離	

産地番号	神田 図説	番号	種類	形状	計測値(cm)		保存率(%)	色調		断土(含有物)	構成	調整		備考
					口径	底径		内面	外面			内面	外面	
S020	36	-	3	土師器	杯	-	-	内面 -	外面 -	石灰・長石・スコリア・砂粒	良好	ナデ	-	体部外底面滑「子」
S020	36	37	4	土師器	杯	(7.0)	[3.5]	黒色	内面 -	石灰・スコリア・砂粒	良好	ナデ	手持ちヘラケズリ	内面黒色処理、底面磨減
S020	36	37	5	須恵器	羹	-	[13.1]	灰褐色	内面 -	石灰・長石・砂粒	良好	ヘラケズリ	-	-
S021	37	34	1	土師器	杯	13.4	7.0	3.0	明褐色	内面 -	石灰・長石・砂粒	良好	ナデ	内面黒色処理
S021	37	34	2	土師器	杯	(13.9)	6.5	3.6	灰褐色	内面 -	石灰・長石・砂粒	良好	ナデ	内外底面熱処理
S021	37	34	3	土師器	杯	12.8	6.0	3.4	褐色	内面 -	長石・砂粒	良好	ナデ	内外底面熱処理
S021	37	34	4	土師器	杯	13.5	6.0	4.2	明褐色	内面 -	石灰・スコリア・砂粒	良好	ナデ	内外底面熱処理
S021	37	34	5	土師器	杯	13.0	5.7	4.5	明褐色	内面 -	石灰・長石・砂粒	良好	ナデ	内外底面熱処理
S021	37	34	6	土師器	杯	(13.4)	5.6	4.5	明褐色	内面 -	石灰・スコリア・砂粒	良好	ナデ	内外底面熱処理
S021	37	34	7	土師器	羹	(14.8)	(8.2)	13.9	褐色	内面 -	スコリア・砂粒	良好	ナデ	-
S021	37	34	8	土師器	羹	(17.0)	-	[7.2]	明褐色	内面 -	石灰・長石・砂粒	良好	ナデ	内面部分的熱処理
S021	37	34	9	土師器	羹	19.6	-	[15.6]	灰褐色	内面 -	石灰・長石・スコリア・砂粒	良好	ヘラケズリ	内外底面熱処理
S021	37	37	10	土師器	瓢小	(30.0)	-	[14.0]	明褐色	内面 -	石灰・長石・スコリア・砂粒	良好	ヘラケズリ	地成前の口縁部の損傷
S022	38	38	1	土師器	杯	-	-	-	褐色	内面 -	石灰・長石・スコリア・砂粒	良好	ナデ	体部外底面滑、文字不明
S023	38	34	1	土師器	杯	(13.2)	(6.3)	3.8	褐色	内面 -	石灰・長石・スコリア・砂粒	良好	ナデ	口縁部磨減付着
S023	38	-	2	土師器	杯	-	6.9	[2.0]	内面 -	石灰・長石・スコリア・砂粒	良好	ナデ	内外底面熱処理	-
S023	38	34	3	土師器	羹	(19.0)	-	[7.0]	赤褐色	内面 -	石灰・長石・スコリア・砂粒	良好	ナデ	内外底面熱処理
S024	39	34	1	土師器	杯	12.4	(7.6)	-	褐色	内面 -	石灰・長石・スコリア・砂粒	良好	ナデ	内外底面熱処理
S024	39	34	2	土師器	杯	(11.8)	(6.4)	[4.3]	内面 -	石灰・スコリア・砂粒	良好	ナデ	手持ちヘラケズリ	内面及び底部点状加飾
S024	39	34	3	土師器	足高蓋白杯	-	9.1	[6.3]	内面 -	石灰・長石・スコリア・砂粒	良好	ナデ	ナデ	-
SK001	40	34	1	土師器	杯	(12.4)	(7.6)	[3.6]	明褐色	内面 -	石灰・長石・スコリア・砂粒	良好	ナデ	内外底面熱処理

取壊番号	種別	図説番号	種類	形状	計測値(cm)		遺存率(%)	色調		断石(含有物)	地底	調整		備考		
					口径	底径		内面	外面			内面	外面		地底	
SK001	土師器	40_38	2	土師器	杯	-	-	内面 におい、黄褐色	外面 におい、黄褐色	石英・長石・砂粒	良好	ナデ	内面 ナデ	調整 底面	体部外面「上」か	
SK001	土師器	40_34	3	須恵器 高台付杯	杯	-	7.2	[1.8]	黄灰色	石英・長石・スコリア・砂粒	良好	ナデ	ナデ	調整 口縁部	体部外面「上」か	
SK003	土師器	40_34	1	土師器	杯	13.0	3.6	7.0	70	におい、黄褐色	良好	ナデ	ナデ	調整 口縁部	体部外面「上」か	
SK003	土師器	40_34	2	土師器	杯	11.9	5.8	4.4	90	明赤褐色	良好	ナデ	ナデ	調整 口縁部	口縁部外面「上」か	
SK003	土師器	40_36	3	土師器	杯	(20.7)	-	[4.9]	70	灰黄色	良好	ナデ	ナデ	調整 口縁部	外面調整部	
SK009	土師器	41_34	1	土師器	杯	12.5	6.1	3.8	60	褐色	石英・長石・スコリア・砂粒	良好	ナデ	ナデ	調整 口縁部	体部外面「上」か
SK010	土師器	41_34	1	土師器	杯	(12.8)	6.2	3.9	40	におい、黄褐色	石英・長石・スコリア・砂粒	良好	ナデ	ナデ	調整 口縁部	体部外面「上」か
SK010	土師器	41_38	2	土師器	杯	-	5.8	[1.3]	20	におい、黄褐色	良好	ナデ	ナデ	調整 口縁部	体部外面「上」か	
SK010	土師器	41_36	3	土師器	甕	(17.6)	-	[5.7]	10	灰黄褐色	良好	ナデ	ナデ	調整 口縁部	内外面調整部	
SK010	土師器	41_36	4	土師器	甕	(15.4)	-	[3.7]	20	灰黄褐色	良好	ナデ	ナデ	調整 口縁部	内外面調整部	
SK011	土師器	42_37	1	須恵器	甕	(25.2)	-	[7.6]	20	明黄褐色	良好	ナデ	ナデ	調整 口縁部	内面調整部	
SK015	土師器	42_38	1	土師器	杯	-	(6.3)	[1.4]	20	明褐色	石英・長石・スコリア・砂粒	良好	ナデ	ナデ	調整 口縁部	体部外面「上」か
SK032	土師器	42_35	1	土師器	杯	13.1	6.0	3.2	60	明黄褐色	石英・長石・スコリア・砂粒	良好	ナデ	ナデ	調整 口縁部	体部外面「上」か
SK032	土師器	42_37	2	須恵器	甕	(50.6)	-	[7.4]	20	灰褐色	良好	ナデ	ナデ	調整 口縁部	内外面調整部	
SK032	土師器	42_37	3	須恵器	甕	-	-	[9.1]	20	灰黄色	良好	ナデ	ナデ	調整 口縁部	内外面調整部	
SK005	土師器	43_35	1	土師器	杯	11.5	6.9	4.5	90	灰褐色	石英・長石・スコリア・砂粒	良好	ナデ	ナデ	調整 口縁部	体部外面「上」か
SK005	土師器	43_35	2	土師器	杯	12.7	7.2	4.0	90	褐色	明赤褐色	良好	ナデ	ナデ	調整 口縁部	体部外面「上」か
SK005	土師器	43_35	3	土師器	甕	11.3	6.3	14.0	50	明赤褐色	明赤褐色	良好	ナデ	ナデ	調整 口縁部	体部外面「上」か
SK006	土師器	44_36	1	土師器	杯	(13.4)	-	[3.8]	30	灰黄褐色	灰黄色	良好	ナデ	ナデ	調整 口縁部	体部外面「上」か
SK006	土師器	44_36	2	二彩	小壺	-	-	-	20	緑色	良好	ナデ	ナデ	調整 口縁部	体部外面「上」か	
SK006	土師器	45_35	1	土師器	杯	(12.9)	-	[3.5]	20	主明赤褐色 黄褐色	良好	ナデ	ナデ	調整 口縁部	体部外面「上」か	

道標番号	神岡	図説	番号	種類	形状	設置高(m)			遺存率(%)	色調		耐久(含有物)	調整			備考
						口径	底径	脇高		内面	外面		内面	外面	底面	
遺構外	45	35	2	土師器	高杯	-	(13.1)	[3.7]	20	明褐色	暗赤褐色	石灰・長石・スコリア・砂粒	ナデ ヘラナデ	ナデ ヘラナデ	-	273DS-2
遺構外	45	35	3	土師器	杯	14.4	11.8	3.2	30	赤褐色	赤褐色	砂粒	ナデ ミガキ	ナデ ヘラナデ	-	SD011、内外面赤彩
遺構外	45	35	4	土師器	杯	13.0	6.8	3.4	80	褐色	褐色	石灰・長石・スコリア・砂粒	ナデ	ナデ ヘラナデ	全面手持ちヘラケ スリ	SD008、底面外面黒書「大」
遺構外	45	35	5	土師器	杯	13.1	8.4	4.0	50	明赤褐色	明赤褐色	石灰・長石・スコリア・砂粒	ナデ	ナデ ヘラナデ	全面手持ちヘラケ スリ	SD005、内外面被熱黒書
遺構外	45	36	6	土師器	杯	(13.2)	-	[4.0]	30	褐色	褐色	石灰・長石・砂粒	ナデ	ナデ ヘラナデ	-	18T
遺構外	45	35	7	土師器	杯	(13.0)	(6.8)	3.9	30	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	石灰・長石・砂粒	ナデ	ナデ ヘラナデ	手持ちヘラケスリ	273DR-13
遺構外	45	35	8	土師器	杯	(13.4)	7.3	3.8	20	濁灰色	にぶい黄褐色	石灰・長石・スコリア・砂粒	ナデ	ナデ	同体糸切り、黒書	3T
遺構外	45	36	9	土師器	杯	(12.3)	6.0	[4.1]	40	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	石灰・長石・スコリア・砂粒	ナデ	ナデ	同体糸切り、黒書	SK020
遺構外	45	35	10	土師器	手捏ね	5.8	-	2.8	100	明褐色	明褐色	石灰・長石・スコリア・砂粒	ナデ	ナデ	-	273DS-21
遺構外	45	35	11	土師器	手捏ね	6.3	-	3.4	60	明褐色	明褐色	石灰・長石・砂粒	ナデ	ナデ	-	273DS-21

第5表 中・近世土器等観察表

遺物番号	韓国 図版番号	種類	形状	計測値(cm)		遺存率(%)	色 調			胎土(含有物)	焼成	調 整			備 考
				口径	底径		高さ	内面	外面			底面	内面	外面	
SI001	48 38 1	陶器	椀	-	4.0	[4.5]	底面100	内面	外面	胎土(含有物)	良好	ナデ	ナデ	底面	瀬戸・美濃民権器(15c後半~16c前半)
SI001	48 38 2	陶器	鉢	-	-	-	-	内面	外面	胎土(含有物)	良好	ナデ	ナデ	-	瀬戸・美濃民権器(17c~18c中)
SI010	51 35 1	陶器	部鉢	-	-	-	-	内面	外面	胎土(含有物)	良好	ナデ	ナデ	-	伊豆15c代
遺物外	53 35 1	カワラテ	小皿	11.1	5.5	3.1	100	内面	外面	胎土(含有物)	良好	ナデ	ナデ	-	伊豆15c代
遺物外	53 38 2	土器	内耳土器上 土は隠鉢	-	-	-	-	内面	外面	胎土(含有物)	良好	ナデ	ナデ	-	伊豆16c中前半
遺物外	53 38 3	陶器	部鉢	-	-	-	-	内面	外面	胎土(含有物)	良好	ナデ	ナデ	-	10T
遺物外	53 38 4	陶器	部鉢	-	-	-	-	内面	外面	胎土(含有物)	良好	ナデ	ナデ	-	表鉢、香滑系片口鉢(15c後半)
遺物外	53 38 5	陶器	煎茶香炉	-	13.0	[5.3]	-	内面	外面	胎土(含有物)	良好	ナデ	ナデ	-	20T、瀬戸・美濃民権器鉢、古瀬戸(後期IV期前期(15c後半))
SK016	- 38 2	陶器	水日本碗	-	-	-	-	内面	外面	胎土(含有物)	良好	ナデ	ナデ	-	10T、瀬戸・美濃民権器鉢(17c後半~18c前半)
SI003	- 38 2	陶器	水日本碗	-	-	-	-	内面	外面	胎土(含有物)	良好	ナデ	ナデ	-	中世15c後半~近世15c前半
272DQ-29	- 38 1	陶器	小皿	-	-	-	-	内面	外面	胎土(含有物)	良好	ナデ	ナデ	-	中世15c後半~近世15c前半
6T	- 38 1	陶器	部鉢	-	-	-	-	内面	外面	胎土(含有物)	良好	ナデ	ナデ	-	志野小皿、登雲初期(17c初期前)
16T	- 38 1	陶器	大皿	-	-	-	-	内面	外面	胎土(含有物)	良好	ナデ	ナデ	-	瀬戸・美濃民権器鉢、大塚湖(16c代)か
17T	- 38 1	陶器	小皿	-	-	-	-	内面	外面	胎土(含有物)	良好	ナデ	ナデ	-	瀬戸・美濃民権器大皿、古瀬戸(後期IV期前期(15c後半))
表鉢	- 38 4	瓦質土器	火鉢	-	-	-	-	内面	外面	胎土(含有物)	不良	ナデ	ナデ	-	1 瀬戸・美濃民権器反面、大塚湖(15c末~16c初)か、中世(15c代)、内外面とも表面の黒色の酸化が顕著しい。

第6表 古墳時代末～平安時代石製品観察表

遺構番号	埴 田 版	番号	種類	石材	色調	最大長・	最大幅	最大厚	重量 (g)	備考	
						高 (mm)	(mm)	(mm)			
SI001	19	39	8	砥石	擬灰岩	灰白色	105	46	20	93.0	
SI015	32	39	13	石製紡錘車	擬灰岩(泥岩?)	黄灰色	—	47	17	67.9	孔径8mm
SK003	40	39	3	砥石	擬灰岩	灰白色	66	30	25	37.8	
SK035	42	39	1	勾玉	滑石	緑灰色	34	10	14	6.7	孔径2mm×4mm

第7表 中・近世石製品観察表

遺構番号	埴 田 版	番号	種類	石材	色調	最大長・	最大幅	最大厚	重量 (g)	備考	
						高 (mm)	(mm)	(mm)			
SK012	76	39	4	砥石	砂岩	灰色	66	26	22	53.1	
SK026	47	39	1	砥石	擬灰岩	灰白色・褐	95	45	23	161.0	
SD002	48	39	1	砥石	擬灰岩	灰白色～褐	84	37	20	79.3	
SD004	49	39	1	砥石	擬灰岩	灰白色～褐	44	35	12	30.9	
SD005	51	39	1	砥石	擬灰岩?	灰白色	43	32	18	44.5	
SX007	53	40	1	石硯	泥岩	灰白色	164	60	20	402.8	
SX007	53	40	2	石硯	砂岩	青灰色	170	78	25	403.2	
SX007	53	40	3	石硯	泥岩	灰褐色	125	63	19	310.5	
SX007	53	40	4	石硯	砂岩	灰色	47	75	22	60.8	
SX007	53	40	5	砥石	砂岩	灰黄褐色	73	55	26	178.2	自然石利用
SX007	53	40	6	茶白(上白)	安山岩	灰色	85	90	175	1,350.0	手回し棒莖着 穴あり
SX007	53	40	7	研磨台か	雲母含有砂岩	灰色	114	89	123	1,830.0	
SX007	53	40	8	五輪塔(水輪か)	泥岩	灰白色	96	90	115	1,150.0	
SX007	—	40	9	板碑か	雲母片岩	暗緑灰色・ にぶい・橙色	137	135	28	760.0	写真のみ掲載
SX007	—	40	10	碇石か	泥岩	灰白色	108	88	23	290.7	
SX007	—	40	11	碇石か	泥岩	灰白色	92	84	22	228.1	表面溶解のため 墨書等有無 不明
SX007	—	40	12	碇石か	泥岩	灰白色	98	78	27	302.0	
SX007	—	40	13	碇石か	泥岩	灰白色	78	76	18	197.8	

第8表 古墳時代末～平安時代土製品観察表

遺構番号	埴 田 版	番号	種類	計測値(mm)				重量 (g)	火跡	色調	胎土 (含有物)	焼成	調整	備考		
				最大長 (高)	最大厚	最大幅	最大径								孔径	
SI012	29	39	17	紡錘車	—	24.0	—	4.9	9.0~ 10.0	34.5	有	にぶい・黄橙色	長石・スコ リア・砂粒 石英・長 石・スコ リア・明褐色	良好	ヘラケズ リ、ヘラナ リ、側面磨 ナデ	
SI012	29	39	18	紡錘車	—	19.0	—	4.1	7.1	22.5	有	外面：灰褐色 胎土：明褐色	石英・長 石・スコ リア・砂粒 石英・長 石・砂粒	良好	ヘラケズ リ、側面磨 ナデ	
SI012	29	39	19	支脚	[188]	70	—	102	—	1,340	有	にぶい・橙色	石英・長 石・砂粒	不良	ヘラケズリ	
SI013	—	39	4	支脚	[68]	[22]	[44]	40	—	72	—	にぶい・褐色	石英・長 石・砂粒	良好	指ナデ	同一個体の 可能性
SI014	—	39	11	支脚	[47]	[25]	[46]	—	—	52	—	にぶい・褐色	石英・長 石・砂粒	良好	指ナデ	
SI014	—	39	—	支脚	[138]	86	—	—	—	550	有	にぶい・褐色	長石・砂粒 石英・長 石・砂粒	不良	ヘラケズリ	
SI020	36	39	6	勾玉	39.0	—	25	—	2.0 ~3.0	13.0	無	赤褐色	石英・長 石・砂粒	良好	ヘラケズ リ、指ナデ	
SI020	36	39	7	支脚	[169] [63]	101	—	—	—	1,050	有	にぶい・褐色	石英・長 石・砂粒	不良	ヘラケズリ	
SI023	38	39	4	支脚	[79]	—	62	—	—	170	有	にぶい・褐色	石英・長 石・砂粒	不良	ヘラケズリ	

第9表 古墳時代末～平安時代金属製品観察表

遺構	挿 図	図版	番号	種類	部位	材質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
SI007	24	41	8	鉄鏃	茎	鉄	[66]	9	3	5.3	
SI010	26	41	2	刀子	茎～刃部	鉄	[35]	20	5	4.4	
SI010	26	41	3	鉄鏃	茎	鉄	[32]	5	4	2.5	
SI012	29	41	20	鉄鏃	茎	鉄	[53]	4	4	3.8	
SI015	32	41	15	帯先金具	裏金	銅	[38]	30	1	23.6	馬具か、不明鉄製品と融着
SI015	32	41	16	刀子	切先	鉄	[40]	12	3	3.3	
SI015	32	41	17	刀子	茎	鉄	[31]	7.5	4	3.0	
SI015	32	41	18	鎌か	基部	鉄	[52]	38	2	25.6	
SI018	34	41	11	刀子		鉄	[111]	13	4	12.9	ほぼ完形
SI018	34	41	12	刀子	茎	鉄	[60]	9	4	7.8	
SI018	34	41	13	小刀か	刃部	鉄	[61]	19.5	2	5.5	
SI023	38	41	5	小刀か	刃部	鉄	[30]	20	3	3.7	
SK032	42	41	4	刀子	茎～刃部	鉄	[104]	11	4	14.3	
SK032	42	41	5	釘		鉄	[68]	6	5	9.5	

第10表 中・近世金属製品観察表

遺構	挿 図	図版	番号	種類	部位	材質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
SK017	47	41	1	腕形滓		鉄	[90]	[66]	[65]	171.6	
SD008	—	41	2	腕形滓		鉄	[57]	[47]	16	45.9	
遺構外	54	41	6	鉄釘		鉄	35	5	6.5	4.7	272DR-96
遺構外	54	41	7	キセル	火皿部	銅	径16～17		高[9]	2.0	273DR-64

第3章 まとめ

第1節 縄文時代

今回の調査では縄文時代の遺構は検出されず、後世の土地改変が著しかったためか遺物包含層もほとんど残存していなかった。出土した縄文土器・土製品・石器は確認トレンチや後世の遺構中から出土したものが主体で、総量でも整理箱3箱であり調査面積を考慮すると多いとは言えない。縄文時代の状況を推測するには材料が乏しいといわざるを得ないが、ここでは時期別の遺物出土量の遷変から簡単にまとめたい。

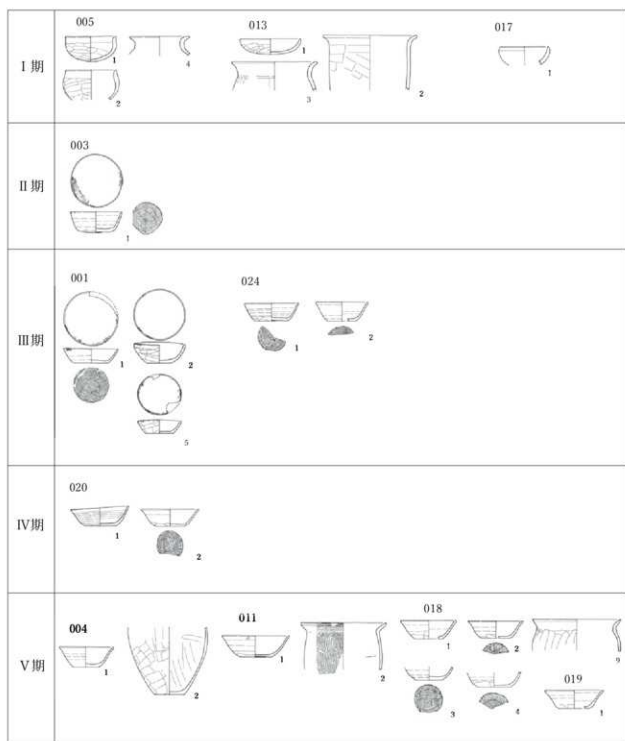
出土土器について、図では晩期中葉までは概ね掲載点数が出土割合を反映するようにした。非掲載の資料も小破片や摩耗しているものが多い。早期から前期中葉まではごく少なく、特に前期は図示したものがほぼ全てである。前期末から中期前葉までは出土量の増加が認められ、特に折返し口縁に縄文施文のみのいわゆる下小野式とされる一群が目立つ。中期中葉以降減少に転じ、中期後葉から後期初頭はごく少なく図示したものがほぼ全てとなる。後期前葉になると再び増加に転じるが、出土量は図示したもの+ a 程度である。そうした中で東北地方の影響を受けた資料が一定数出土しており、高谷川対岸に所在する鴻ノ巣貝塚の事例などでも示されているとおり、地域的な特徴として捉えられる。後期中葉はまとまった出土が認められるが、後期末から晩期前葉は再度減少する。晩期後葉は全時期通じて最も遺物量が多く、出土土器の過半数を占める。精製土器が少ないため時期について断定的なことは言えないが、千網式を中心とした時期であろうと推測される。調査区南側に位置する古代のSK005土坑からは該期の遺物がまとまって出土しており、付近に遺構が存在した可能性が想定される。一方で前浦式や安行3d式など、先行する晩期中葉の資料はほぼ欠落している。

当地の状況を考える上で手がかりとなるのは近接する境貝塚であろう。遺物は縄文中期から出土しているが、中期前葉から竪穴住居や土坑の構築が開始され、晩期後葉まで継続する。現在のところ確認されている竪穴住居跡の時期は中期中葉から後葉と晩期初頭であるが、他の時期も存在する可能性が高い。また、阿玉台式期と堀之内式期には斜面貝層が形成される。痩せ尾根上に立地するものの遺構の密度は濃く、出土遺物は縄文早期から弥生中期まで継続するなど、拠点的な地位を占めると考えられる。こうした状況を踏まえて当地を見ると、縄文時代晩期中葉までは積極的に土地利用されたとは言いがたい。しかし晩期後葉になると遺物量も豊富であり、様相は一変すると言ってよい。縄文時代から弥生時代への転換に関わるものかまでは判断できないが、社会構造の変化を表している可能性は指摘できるだろう。

第2節 古墳時代～奈良・平安時代

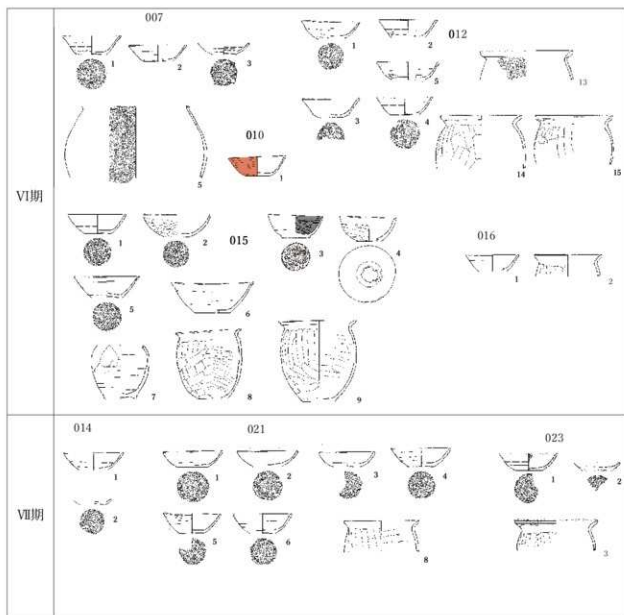
南北に長い細尾根状の狭い台地上に、竪穴住居跡23軒、土坑10基の他、井戸状遺構や粘土採掘坑などが検出された。ここでは、遺構出土の土器の年代及びそれに基づく集落の動向を提示し、周辺の遺跡を加味して当該地区の特徴を検討してみた。

集落の出現はI期とした7世紀末葉～8世紀初頭で、主軸方向をほぼ同じにするSI005・SI013・SI017が相当する。本集落の中では大型の竪穴住居跡で、最大は面積39㎡を測るSI013である。出土土器はそれほど多くないが、SI005及びSI007の杯類は古墳時代から続く器形で、SI013の盤状の杯は当期の特徴的な形態を示す。



第55図 古墳時代末～平安時代堅穴住居跡出土土器編年図 (1)

II期は前期から空白期間をおいた8世紀第4四半期で、この時期以降住居規模は小さくなる。SI0031軒のみでロクロ整形の箱形の杯をメルクマールとする。III期は9世紀第1四半期で、SI001・SI024の2軒である。SI001は体部全面手持ちヘラケズリ及び油煙が付着する杯が多いのが特徴的である。IV期は9世紀第2四半期で、SI0201軒のみが確認される。杯は口径13cm前後で、底径が口径の半分程となる。V期はSI004・SI011・SI018・SI019の4軒で、集落規模が拡大する時期である。9世紀第3四半期に想定される。



第56図 古墳時代末～平安時代堅穴住居跡出土土器編年図(2)

口径と底径の差が前期より大きくなる器形の杯が含まれるようになるが、体部下端及び底部にヘラケズリ調整が加えられる点ではIV期と類似する。VI期は9世紀第4四半期に相当し、SI007・SI010・SI012・SI015・SI016の5軒とV期を継承するように堅穴軒数は多い。底径が口径の半分以下になるものが増え、底部切り離し無調整の新しい要素が加わるようになる。この中では、SI012の土器群の中にV期のタイプの杯が含まれていることから古相を呈すると思われる。

VII期はSI014・SI021・SI023の3軒である。杯の体部下端のヘラケズリは施されず、底部も切り離し無調整がほとんどとなる。前期に比して器高が低くなり、体部が内湾気味に開き、底部がやや突出するような特徴を有する。実年代としては、VI期との間にやや空白があるようで、10世紀第2四半期～第3四半期頃に想定される。

以上のように、今回の調査では7世紀末葉頃から10世紀中葉頃までの集落が確認されたが、特に9世紀

後半にピークを迎え、10世紀中頃まで竪穴住居が営まれていることが本遺跡の大きな特徴と考えられる。本遺跡周辺では、近年の調査により奈良・平安時代の集落が検出され、様相が徐々に明らかとなっている。圏央道の調査では、本遺跡北側の小支谷を挟んだ台地上に位置する多古町千田の台遺跡第1次調査で、7世紀後半～10世紀後半頃までの竪穴住居跡35軒、現在整理中の千田の台遺跡第2地点でもほぼ同じ時期の集落が検出されている。この両地点は9世紀後半～10世紀中葉に集落のピークがある点で、境砦跡と共通する。浅い谷を挟んで千田の台遺跡の西側に隣接する境貝塚は、110軒の竪穴住居跡と数棟の掘立柱建物跡などで構成される大集落で、7世紀中葉～11世紀代まで継続する。集落のピークは7世紀末で17軒、8世紀第1四半期に9軒を数える。以降は、8世紀第2四半期に6軒、8世紀第3四半期～9世紀第2四半期は四半世紀ごとに2軒～4軒と小規模となる。その後、9世紀第3四半期に13軒、9世紀第4四半期に7軒と再び増加し、10世紀段階にも4軒前後の竪穴住居跡が四半世紀ごとに確認され、10世紀第4四半期以降縮小し、11世紀中頃を最後に竪穴住居跡は消滅している。境貝塚や千田ノ台遺跡の集落変遷には2つ画期が想定され、7世紀末～8世紀初頭頃に突如として集落が出現する時期と、9世紀後半の再び大きな集落が形成される時期である。このような状況は開発集落の様相を示しているが、一般的には集落が拡大する9世紀前半が閑散とした景観となる現象は、境砦跡を含めた当該地域の特徴と考えられる。

第3節 中・近世

本節では、中世城館境砦跡の機能前後も含めて、調査対象範囲外も含めた遺構の造成・廃棄の過程と時期を推測し、本遺跡の中・近世調査成果のまとめとしたい。

I期 古代以来の粘土採掘場SX005・006は中世前期まで継続されたかは不明ながら、埋め戻しされていない。

II期 地山を掘り窪めた屋敷区画（曲輪I部分）や地山整形区画SX004・溝SD013が掘削され、廃土はSX005・006に廃棄される。曲輪I部分も当初は古代以来の粘土採掘場であった可能性もある。

III期 地山整形区画SX004の埋め戻し。SD013の延長に空堀SD015の掘削。城郭化の初期段階か。

IV期 屋敷周囲の城郭化。空堀SD015の埋め戻し。曲輪I周囲の空堀（SD001・002・004・014）、溝・道（SD008・012）、曲輪II～V、帯曲輪（SD003・005・009・017）、腰曲輪D、崖面造成等の造成。折り歪み構造は直線的ではなく、空堀は浅く、土塁は低いこと等から戦国時代前半の様相である。

V期 戦国時代後半、当地域（大字境相当）の小領主層の城主はより広域領主層（おそらく井田氏）の配下に入り、谷津奥の沖積地を見下ろすことのない当城は、地域の合戦時の一時的避難所としての機能はあった可能性はあるが、拡大した曲輪で恒常的に居住することも支城としても機能することもなく、廃城を迎えた可能性が高いと考えられる。

VI期 廃城後、曲輪I南東部の空堀の一部を破壊し、塚と周溝（SX007・SD010・011）を造成し、上に祠等が設置されたことが想像される。塚は既に中世前期に造られ城機能時でも使われた可能性もある。

VII期 塚SX007上の祠に集石されるが、その一部を削平した地山整形SX003と土坑墓で霊地場となる。山上平坦部は、耕地化や炭窯の随時操業に伴う溝・道（SD006・007・016）が造られ、陶磁器類が若干廃棄されている。その後現代では山全体が杉植林化され、曲輪I内の一部は土砂採取で削平されたことがうかがえる。

境砦の発掘調査対象範囲は主郭をかすめる外郭部であるが、中・近世遺物は上層確認トレンチや表土中

から少量ながら出土しており、当時の地表面は現在の表土中にあった筈だが明確な面は検出できず、古代遺構調査のためのソフトローム層上面までの表土除去で失われていることなどから不確実であるが、各時期の年代は、Ⅰ期：鎌倉期（12世紀末～14世紀初頭）、Ⅱ期：南北朝期（14世紀代）、Ⅲ期：戦国時代初期（15世紀前半）、Ⅳ期：戦国時代前半（15世紀後半）、Ⅴ期：戦国時代後半（16世紀代）、Ⅵ期：中世末～近世前期（16世紀末～17世紀）、Ⅶ期：江戸時代中期以降（18世紀以降）に推定される。

なお、中・近世陶磁器類の時期判定に関する主な参考文献は以下のとおりである。

- ・藤澤良祐 1991「古瀬戸古窯址群Ⅱ－古瀬戸後期様式の編年－」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』X
- ・藤澤良祐 1998『瀬戸市史 陶磁編6』瀬戸市
- ・水本和美 1998「豊島区遺跡調査会 陶磁器・土器 分類・計数基準」『伝鑄・上藤前Ⅱ』豊島区教育委員会
- ・藤澤良祐 2002「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『（財）瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』10
- ・中野晴久 2005「常滑・渥美」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～発表要旨集』
科研費・「中世土器・陶器の生産技術及び全国編年研究と流通様相の解明」班
- ・菱瀬裕一 2005「房総における15・16世紀の土器・陶磁器研究の現状」『関東、東海における中世土器（煮炊具）の最近における研究成果』科研費・「中世土器・陶器の生産技術及び全国編年研究と流通様相の解明」班

写真図版





北東から



南東から



北から



北東から

図版 4



遠景 南から



遠景 南西から



山下北東部通路 北西から



西側堀切 南から



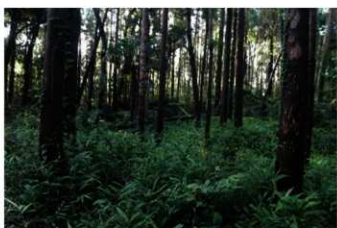
大手道（仮）南から



大手口（仮）西から



主郭内 大手口（仮）北から



主郭内 南東隅から



南端部 南から



南部 北東から



中央部 北東から



北部 東から



北東斜面 北から



南東斜面・腰曲輪 南から



山上 北から



南西部帯曲輪 南から

図版 6



下層土層 274DS-00 グリッド 南から



1T 北東から



3T サブトレ 南東から



5T 西から



8T 南西から



10T 拡張部 南西から



10T 東から



11T 西から

確認調査状況 (1)



11T 北西から



14T 西 中近世集石 (高田掘り下げ) 西から



17T 西から



21T 南西から



22T 南東から



30T・31T 東下から



30T 東から (SD017)



31T 東から

図版 8



SI001 他 全景 南から



SI001 遺物分布 南から



SI001 カマド 全景 南西から



SI001 カマド 掘方 南から



SI002 遺物出土状況 南東から



SI003 全景 南から



SI004 全景 南東から



SI004 カマド 遺物 東から



SI004 カマド 全景 南東から



SI004 カマド 掘方・貼床除去後 東から



SI005 全景 南東から



SI005 遺物出土状況 南東から



SI005 カマド 全景 南東から



SI005 カマド 掘方 南東から



SI007 全景 南東から



SI007 遺物分布 南東から



SI007 カマド 遺物出土状況 南東から



SI007 カマド 全景 南東から



SI007 カマド 掘方 東から



SI008 全景 南東から



SI009 全景 南東から



SI009 カマド 全景 南東から



SI009 カマド 掘方 東から



SI010 全景 南東から



SI010 カマド 全景 南東から



SI010 カマド 掘方 南東から



SI011 全景 南東から



SI011 遺物出土状況 南から



SI011 焼土・炭化物出土状況 南東から



SI011 カマド 全景 南東から



SI011 カマド 掘方 東から



SI012 全景 南東から



SI012 遺物出土状況 南から



SI012 カマド A 遺物出土状況 南東から



SI012 カマド A 全景 南東から



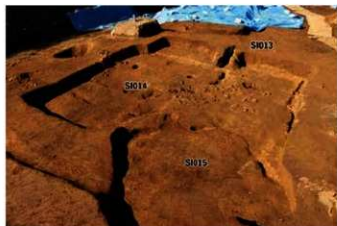
SI012 カマド A 掘方 南東から



SI012 カマド B 全景 南西から



SI012 カマド B 掘方 南から



SI013 ~ SI015 全景 東から



SI013 ~ SI015 他 遺物出土状況 南東から



SI013 カマド 全景 東から



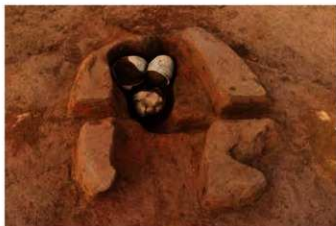
SI013 カマド 攝方 東から



SI015 炭化物等出土状況 東から



SI015 遺物出土状況 南東から



SI015 カマド 遺物出土状況 南東から



SI015 カマド 全景 南東から



SI016・SI017A・B 全景 南東から



SI016 カマド 全景 南東から



SI016 カマド 掘方 東から



SI017A・B 全景 東から



SI017 カマド 全景 南東から



SI017 カマド A・B 掘方 東から



SI018 他 全景 南西から



SI018 遺物出土状況 南から



SI018 カマド 遺物出土状況 南西から



SI018 カマド 全景 南西から



SI018 カマド 攝方 南西から



SI018・SK036 全景 南西から



SI019・SD001 全景 南東から



SI019・SD001 遺物出土状況 東から



SI020 遺物出土状況 東から



SI020 カマド 全景 南東から



SI021 全景 南から



SI021 カマド 遺物出土状況 南東から



SI021 カマド 全景 南から



SI021 カマド 掘方 南東から



SI022 全景 南から



SI022 カマド 全景 南東から



SI023 全景 南から



SI023 土層状況 東から



SI023 カマド 全景 南から



SI023 カマド 掘方 南から



SI024 全景 南から



SI024 全景 西から



SI024 カマド 遺物出土状況 西から



SK001 全景 南から



SK003 遺物 出土状況 北から



SK003 土層状況 南東から



SK005 全景 南から



SK005 土層状況 南西から



SK006 遺物出土状況 南から



SK006 山砂・焼土出土状況 南から



SK007 全景 南から



SK008 全景 南から



SK008 土層状況 南から



SK009 遺物出土状況 南から



SK011 遺物出土状況 南東から



SK010・中世土坑 012ABC ~ 014 北から



SK010 遺物出土状況 東から



SK015 全景 南から



SK015 土層状況 南から



SK032 遺物出土状況 北西から



SK035 全景 南から



SK035 土層状況 北西から



調査風景



調査風景



SX005・SK049 全景 北東から



SX005・SK049 全景 北西から



SX005・SK049 全景 東から



SX005・SK049 全景 南西から



SX005 西側壁手前土層 東から



SX005 横穴 (SK049) 検出状況 東から



SX005 横穴 検出状況 東から



SX005 横穴 検出状況 東から



SX005 横穴 土層等 東から



SX005 横穴 土層等 東から



SX006 全景 南東から



SX006 全景 南から



SX006 全景 北西から



SX006 前景 北から



SX006 全景 北東から



SK047 土層 北から



SX006 内 SK048 天井除去後 南東から



SX006 内 SK048 天井除去後 南東から



SX006 内 SK048 天井除去後 南東から



SX003 他 全景 東から



SX003 他 全景 南から



SX003 他 全景 北から



SK022・23 北東から



SK038・SI020・SX004 南部 南東から



SI020 北側・SX004 南側 東から



SX004 中央部 南東から



SX004内SK045 南西から



SX004 南東部 東から



SX004 南東部 北東から



SK004・SK010・SK012ABC～SK014 南西から



SK016 全景 南西から



SK016 土層 南西から



SK017 全景 南から



SK018 全景 南から



SK018 土層 南から



SK020 全景 南東から



SK020 土層 南東から



SK026 土層 南から



SK031 土層 北西から



SK033・SK034 全景 東から



SD001 全景 南東から



SD002 トレンチ 東から



SD002 北側・SD016 北西から



SD002・SD014・SD015等 南西から



SD002 南側 北西から



SD003他 調査風景



SI024・SD003 全景 北西から



SD004～SD007 西側 西から



SD004 東側 南から



SD004 東側 南東から



SD004 東側 南東から



SD004 南東側 南から



SD005 南端部 南東から



SD005 南西部 南東から



SD005 南西側 南東から



SD005 南西側 南東から



SD005 北西側 南東から



SD005 北西側 南東から



SD006 土層 南東から



SD006・SD007 土層 南西から



SD004 ~ SK007 西側 東から



SD008 内 SK027 ~ SK030 全景 南西から



SD008 内 SK027 ~ SK030 全景 北東から



SD008 東側 南から



SD009・東腰曲輪等 南から



SD009・東腰曲輪等 北西から



SD009・SD012・東腰曲輪等 南から



SD010・SD011 全景 東から



SD010・SD011 全景 東から



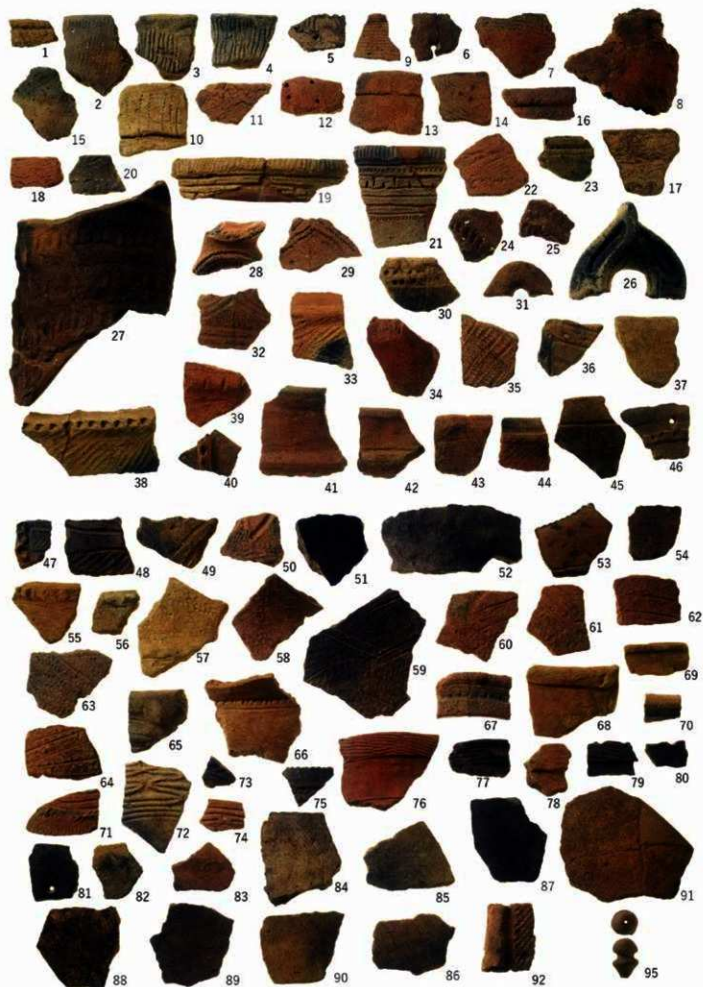
SX006 内 SD014・SD015 南西から

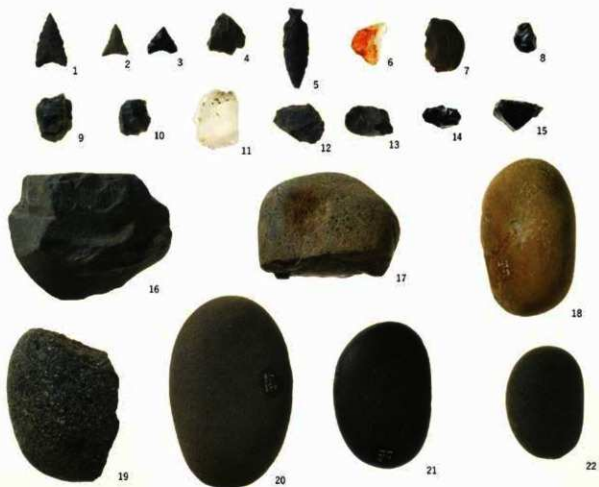


SD014・SD015・SK048 南西から



SD015・SK047 土層 北から







SI001-1



SI001-2



SI001-3



SI001-4



SI001-5



SI001-7



SI003-1



SI004-1



SI004-2



SI005-1



SI005-2



SI005-3



SI005-4



SI007-1



SI007-2



SI007-3



SI007-6



SI010-1



SI011-1



SI012-1



SI012-2



SI012-3



SI012-4



SI012-10



SI012-11



SI012-14



SI012-16



SI012-15



SI013-1



SI013-3



SI014-1



SI014-2



SI015-1



SI015-2



SI015-3



SI015-4



SI015-5



SI015-6



SI015-7



竖穴住居跡出土土器 (3)





SK032-1



SX005-1



SX005-2



SX005-3



遺構外 5 (SD005)



遺構外 4 (SD008)



遺構外 4 (SD008)



遺構外 1 (SD001)



遺構外 3 (SD011)



遺構外 4 (SD008)



遺構外 (3T)



遺構外 (11T)



遺構外-11 (30T)



遺構外 7 (273DR13)



遺構外 2 (273DS42)



遺構外 (273DS42)



遺構外 10 (273DS21)



遺構外 (273DS42)



遺構外 1 (表採)





豎穴住居跡等出土土器 (1)



SI012-12



SI014-7



SI018-7



SI020-5



SI021-10



SK011-1



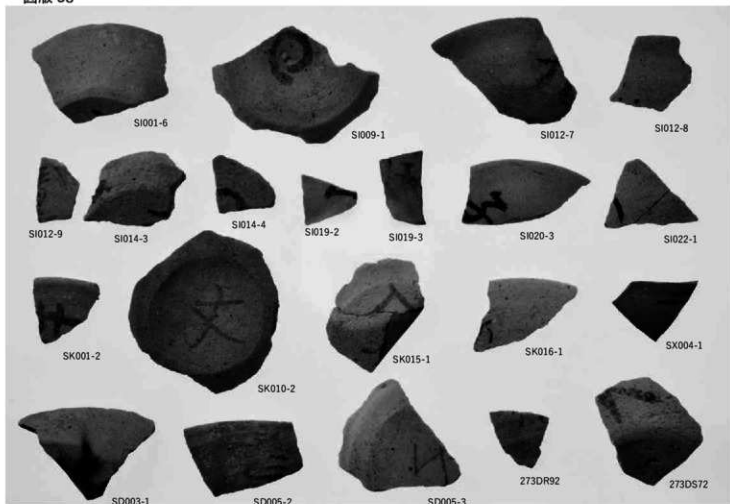
SK019-1



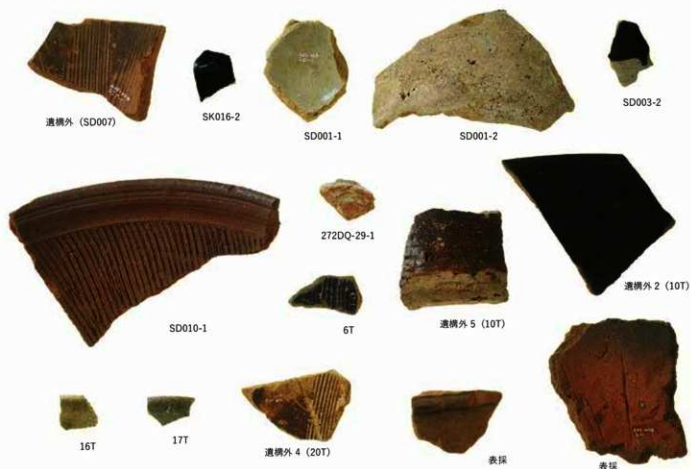
SK032-2



SK032-3



墨書土器赤外線写真



中・近世土器・陶磁器



SI012-19



SI013-4



SI014-11



SI014-10



SI020-7



SI023-4



SI02-17



SI02-18



SI020-6



SI001-8



SI015-14



SK003-4



SK012-1



SK035-1



SK026-1



SD002-1



SD004-1



SD005-4



6



7



8



1



2



3



4



5



9



10



11



12



13



報告書抄録

ふりがな	しゅとけんちゆうおうれんらくじどうしゃどうまいぞうぶんかざいちようさほうこくしょ							
書名	首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書							
副書名	芝山町境砦跡							
巻次	42							
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告							
シリーズ番号	第792集							
編著者名	井上哲朗・安井健一・栗田剛久・渡邊修一							
編集機関	公益財団法人 千葉県教育振興財団							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 TEL 043 (422) 8811							
発行年月日	西暦2023年3月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド 市町村	ド 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
きかいよりである 境砦跡	きんぶでんしげやままちとかい 山武郡芝山町境 あびのみごう 字上郷179-3ほか	12409	048	35度 42分 43秒	140度 26分 44秒	20210518～ 20220209	9.546	道路建設に伴う埋 蔵文化財調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
境砦跡	包蔵地 集落跡 城館跡	縄文時代 古墳時代終末期 ～ 奈良・平安時代 中・近世	竪穴住居跡 井戸状遺構 土坑 粘土採掘跡 粘土採掘坑	23棟 2基 10基 2か所 8基	縄文土器・石器・土製品 土師器・須恵器・灰釉 陶器・二彩陶器・土製品 ・石製品・金属製品 土器・陶磁器・石製品・ 金属製品	9世紀後半から10世紀 前半までの比較的短期 間に集落が集中してお り、古代末頃の土地利 用を考えるうえで重要 な遺跡である。		
要約	<p>境砦跡は、太平洋に注ぐ栗山川の支流である高谷川と多古橋川の支谷によって挟まれた標高40mほどの狭小な台地上に立地する。</p> <p>集落の時期は奈良・平安時代を主体とし、竪穴住居跡は、7世紀末～8世紀初頭が3軒、8世紀後半が3軒と単発的であるが、その後の空白期間を置いて9世紀後半に12軒と比較的大きな集落が出現し、10世紀前半で急速に終息する。</p> <p>中世では、前期の屋敷が戦国期に周囲に曲輪や空堀を造成して城郭へと改変されたことが明らかとなった。</p>							

千葉県教育振興財団第792集

首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書 42

－芝山町境畧跡－

令和5年3月20日発行

編 集 公益財団法人 千葉県教育振興財団
発 行 東日本高速道路株式会社
千葉県美浜区若葉2-9-3

公益財団法人 千葉県教育振興財団
千葉県四街道市鹿渡809番地の2

印 刷 三陽メディア株式会社
千葉県千葉市中央区浜野町1397
